
第二の人生はISの世界で！？

キンケドウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一の人生はISの世界で！？

【Zコード】

Z4314W

【作者名】

キンケドウ

【あらすじ】

WARNING！

これはISの一次創作ものです！

オリ主最強が苦手＆原作ブレイク&ZTRが嫌いな方は閲覧注意です！

話の序盤と一部のみオリジナルで、他は小説丸写しです！

そして構成は作者の完全妄想！「弦先生」めんなさい的作品です！

処女作のため、至らぬ場面が多い！（というか駄文！）

また、誤字脱字あり！（見つけたら指摘して頂きたい）

それでもやあつてやるぜ！って方のみ閲覧して下さい！

360'000アクセス越え&37'000コニーク越えしました
！ありがとうございます！（遅つ！）

～～以下あらすじ～～

この物語は天然神様によつてテンプレ展開を受けた氷川優人はISの世界で生きることになり、基本的に原作通り進みつつ平凡に生きる事を決めた優人が織り成す学園生活を描いた物語である。

プロローグ（前書き）

初めまして、キンケドウと申します。
文才の無い妄想癖のある私ですが、生暖かく見守って頂ければ幸い
です。

プロローグ

「ふあ～あ～…よく寝た…よつし、HISのUUAの続きでも読むかって…あり?」

俺は起き上がるごと、自分の目の前にあつたはずのパソコンが無い事に驚いた。ところより、俺の周り全てが真っ白だった事に驚いたのかもしれん。

「むむ…これはまさに、俺が見ていたHISの転生物のUUAと同じ展開じゃないか!」

「うそ～その通りだよ～」

「えつ～その声は…豊崎愛生!？」

振り向くと平沢唯に似ている少女が立っていた。

「愛しの唯ちゃんが…何故ここに!…?」

「アハハ…残念だけど、あたし、唯じゃ無いんだよね。正確には神様だよ!…フンス!…!」

「唯のまんまじゃん!…!」

「あなたが望むから、唯ちゃんのモノマネしてるんだよ～

「俺が…望んだ…?つーか、ここはどこ!…?」

「あ、そうだった、説明がまだだったね。ここはあなた達の町つ、天界かな?または死後の世界?」

「…ちよつとまで。ところによお…俺死んだの!…何処ぞの一次

創作もんの主人公みたいな状況な訳！？

「そうだよ～モグモグ…」

「なに一人、優雅にお茶してんだ！？」

「あ、食べる？」

「そうじゃねえよ！－本当に唯みたいだなオイ…！」

「えー、これがわたしの素だよ？」

（畜生…まんま、唯で心奪われそうだ…ん…？）
（死後の世界だとしたら…）

「お前つて神様！？」

「そだよ。で、あなたはさつき自分で言つてた通り、あたしの部下の手違いで死んだわけ」

「はは…嬉しいのやら…悲しいのやら…ってえ！－俺、けいおん！の映画見てないし、まよチキの最新巻読んでねえし、ISも続기가気になるんですけどお！－あ、はがないも見てない…！」

「大丈夫～の一ふろぐれむ、だよ！あたしが転生させてあげるから。転生先はあなたの居た世界じゃなくともいいよ－因みに、どの世界に行つてもけいおん！の映画も見れるようにするし、あなたの言つてるラノベを読めるよ！あ、そのラノベの世界に行く事も出来るよ」

「…そうなのか…んじゃ、ISの世界に転生させて下さい」

「良いよ～あ、その代わり、ISの原作の続きは読めなくなるから。自分の目で確かめて」

「う…構わん…俺の本命はけいおん！だけだ…ん？と言つ事はまよチキとはがないも平氣…？」

「うん、でも、あなたがさつきまで生きてた時の歳まで成長しないと、発売されないし、放映もされないから」

「そうなのか…意外に手厳しいね…」

「なんたつて、因果律を書き加えて平行世界を作るから」

「そんな事すんの！？」

「うん、因果律書き換えるの結構面倒なんだよ～？クオヴレーくんにお願いしなきゃだし」

「ぐ、クオヴレー！？ 実在してたの！？」

「え？ うん。今まで名前はなかつたけど、あなた達が名前を付けたからクオヴレーになつたんだよ？」

「は、初耳だわ… あ、ところで、何処ぞの一次創作みたいにチート能力つけられる？」

「うん、あたしの部下の手違いのせいだからね。あまり強大なものじゃ無ければ幾つでも」

「えーっと、じゃあ、転生した際、小学校と中学校の時の記憶を勉学のこと以外消し去つて欲しい。綺麗さっぱりね」

「OK、OK。勉学以外の記憶を消せば良いんだね？ つまり、黒歴史を消したいんだね？」

「そ、で、次に定番の束さんと同じくらいの天才スキルと運動やらなんやらの身体系スキルを付けて。あ、後、ISに反応する様にして」

「ようは、天才になつて、さらに運動などでも天才になりたいと更にISも起動出来る様になりたいと」

「そう言つこと。というか、IS起動出来なきゃ詰まんねえだろ」「それもそうだね。まだまだ付けられるよ～」

「うーん… そんぐらいかな」

「あれ？ 顔がイケメンとかじゃなくていいの？」

「あー… それはフツメンでいいわ」

「なんで？ 男の子なんだから、フラグ体质のためのイケメンじゃ無くていいの？」

「俺はあくまで、最低限、原作を見たいだから、女の子と馴れ合いたい訳じゃ無いんだ」

「もしかして… 16にして枯れてた？」

「ちげーよー！ 女の子が苦手なだけだよ！！」

「じゃあ、なんで女の子が最も多いISの世界にしたのさ？」

「え？ 何処ぞの一次創作みたいにオリジナルのIS作れるからに決まってんだろう？」

「ふーん。でも、それならガンダムの世界とかでもいいんじゃない？」

「あー、あれはダメ。戦争とか、巻き込まれたくないし。それに、E.Uの世界でガンダムとかの武装を使ってみたいし」

「例えば？」

「ガンダムのフィン・ファンネルとか、クアンタのソードビットにフルセイバー、ヒュッケバインのファングスラッシュジャーとか」

「おおう…いい具合にチートばかりだね…」

「どじがだ！ファングスラッシュジャーは強化しなきゃチートじゃないだろ」

「まあいいや、そろそろ行つてもいいよー。あ、因みに、まだ死んで無いから、一回死んでもらうね」

「ところで、俺の死亡原因って？」

「ジャンプとラノベを買いに行つた帰りに暴走トラックに轢かれます！」

「へ？ちょっと待てそれかなりイテエじゃねえか！！！」

「グッジョブ！」

「おい…！」

気づくと俺は本屋に居た。

「あり？…手には買つたばかりのジャンプとラノベ…やつさまで家に居たよな…まさか、本当にあつた事なのか？んな訳無いかー夢だろ、夢」

あ、思い出した。SS読んでたけど、E.Uのラノベの続きと今週号のジャンプが欲しくて、走つて本屋まで来たんだった。

アリガトウゴサイマシター

「さてと、さつあと帰つて読みますかー」

キィイイイイイー！！！

「ん？つてえトリック！？嘘つ…」」つちぐくな…ちよ…

ガッシャーン…！！！

プロローグ（後書き）

如何でしたか？本編には入っていませんが、アドバイスをくれると
ありがとうございます。

主人公設定（前書き）

書いてあつたのに投稿するのを忘れていた…

今更ですけど、どうぞ

主人公設定

主人公

氷川優人

天然神様の手によつて転生というテンプレ展開を受けた青年。前世では、ロボットアニメや日常アニメが大好きな青年だったライトオタクである。姿は少し幼さの残したスパロボのリョウトのような顔立ち。

転生してからは文武両道の優等生キャラで、父親に似て正義感が強く、自由を愛している。

束のISの作成を手伝い、その過程で、ISのコアを偶然ながら作つてしまつ。

小学4年生で、神様と再会し、純粋種のイノベーターの力を授かる。

使用IS

ブレイブハーツ

格闘寄りの万能タイプのIS。格闘戦がし易い様に従来のISよりスマートで小柄なデザインとなつてゐる。腰に鞘に収められた剣がある。背中には光を放つ剣で翼のような形を作つていて、操縦者が命令をする事で遠隔操作武器として使う事も可能。尚、作られた当初は操縦者の顔等を隠す為のヒュッケバイン風バイザーとマントが装備されていた。武器は近接戦闘用にウイングセイバー（非実体剣）、エクスカリバー（実体剣）。中距離用にファングスラッシュヤー（ヒュッケバインMK-?と同じデザイン）。遠距離用にケルベロスショットと呼ばれるツインハンドガンとショットガン、ランチャードの三種に変形する万能光学銃。

单一仕様能力

不明

オートクチュール

・重火力型デストロイ

その名の通り火力重視の装備となつており、武装の装備数はシャルロットの『ラファール・リヴィアイヴ・カスタム?』には劣るもの火力としては現行 I.S. (P.F.を含めず) 最強。追加武装は右腕に大口径型ショットガン、ショットガンのアンダーバレルにグレネードランチャ一、左腕にガトリングガン、ミサイルポッド(両肩、両足)、腰にレールガン、背中に荷電粒子砲、左腕の隠し武装に9連装パイルバンカー。全ての武装はデッドウェイトにならないようにパジが可能である。また、突進力を強化する為に背中に大型スラスターも付いている。尚、これを装備する際にカラーリングは赤を基調としている。

・高機動型シユーティングスター

このオートクチュールは背中のウイングセイバーの出力をすべて推進力にまわしている(→2ガンダムの真似)。そして非固定浮遊部^{アノロックゴー}位の増設スラスターを装備。これによつて高速移動時の急転回を可能に。最高スピードは紅椿と同等である。追加武装は小型近接ブレード2本だけと心許ないが、2本の近接ブレードを連結させることでツインランサーとして使用が可能。尚、これを装備する際、カラーリングは青を基調としている。

二機目

プライムフィールド

フランスにいる時に作ったI.S.。このI.S.は全身装甲であり、固有の武装を持たないため専用パッケージに換装しなければ戦闘能力は無いに等しい。優人がこれを作った理由は「ダブルオー系統は勿論、他ガンダムの武装や、スパロボシリーズの機体を使いたいから」と

いう理由。反則的能カばかりある為、このエリ使う時は緊急時など特殊な条件下のみ。

单一仕様能力

パッケージチェンジャー

パッケージによって单一仕様能力を変える单一仕様能力

専用パッケージ

クアンタ（フルセイバー）

優人が最初に作ったパッケージ。このパッケージを基本装備としている。その名の通り、ダブルオークアンタの姿そのもののパッケージである。このパッケージにGNドライブが搭載されている為、攻撃や移动の際にシールドエネルギーを消费しない。このパッケージのみGNドライブは一機搭載している。

武装はGNソード?、GNソードビット、GNビームガン。ソードビットとGNソード?が合体する事でバスターソード（ライフル）になる。フルセイバーという追加パッケージがある。その際、GNソード?が追加装備される。

单一仕様能力

トランザム

GNドライブから精製されたGN粒子を一気に開放し、通常のスペックより3倍以上引き上げる单一仕様能力。しかし、この能力は長くても10分が限界である。トランザムが終了すると、能力が極端に下がってしまうという原作の設定があるが、その問題はある程度は解决済みである。

サバーニヤ

クアンタと同时進行で作ったパッケージ。このパッケージにはGN

ドライブが搭載されている。外見は、最終決戦仕様のガンダムサバニーヤ。武装はGNホルスター・ビット、GNライフル・ビット?、GNピストル・ビット、GNミサイル・ポッドである。

单一仕様能力

トランザム

前述通り

サー・ベラス・イグナイト

IS学園入学後に作つたパッケージ。外見はサー・ベラス・イグナイト(G)。武装はH.O.M.Iサイル・ランチャー、レイガン・ポッド、コート・ティング・ソードTeX、ラディカル・レールガン、イグナイト・バイク、ターミナス・キャノン。動力にTEエンジンを使用している為、シールドエネルギーを消費するのはダメージを受けた時だけである。原作通り、TEスフィアもある為シールドエネルギーを消費する事は殆どない。

フォームSもあるが優人が近接戦を好むため、全く使わない。

单一仕様能力

TEスフィア

異空間からエネルギーを取り出し、バリアを張る、单一仕様能力。シールドエネルギーの消費をしない為、非常に便利。

ソウルゲイン

優人が唐突に作ろうと考へたパッケージ。近接特化された機体でスピードはピカイチ。武装と言える武装は聳弧角のみ。

单一仕様能力
自己再生
オートリバース

装甲が破壊された際に自己再生する。が、しかし、シールドエネルギーで装甲が守られるためあまり重宝されない。

ビルトビルガー

優人が唐突に作ろうと考えたパッケージ。このパッケージは近距離特化しつつも、中距離をこなす万能機。通常時はジャケット・アーマーを装備した重装備型で必要に応じてジャケット・アーマーをパージした高機動形態に変わる。この形態ではテスラ・ドライブをフルドライブにすることによつてウイングにエネルギーを発生させ、これを高速で相手にぶつけ切り裂く「ビクティム・ビーク」が使用可能となる。武装は三連ガトリング砲、M90アサルトマシンガン、コールドメタルソード、スタッグビートル・クラッシュバー、ビクトイム・ビーク。尚、コールドメタルソードにはゾル・オリハルコニウムを使用している。

单一仕様能力
なし

主人公設定（後書き）

随時更新して行きます

12 / 15

追記しました

第一話　あれ？俺がいる時点で原作ブレイクだよな？（前書き）

第一話です。

「ひへ…文才が欲しい…」

第一話 あれ？俺がいる時点で原作ブレイクだよな？

「どうも、先日？天然神様の部下のミスで殺されました、氷川優人です。でも、神様は僕にチート的能力を付けて、ISの世界に転生させてくれました。容姿は、何故かイケメンにするつもりは無かったのに、少しだけスパロボ のリョウトに似てる気がする… 体型はまあ、中肉中背だね。

親の名前は父親が氷川勇利と、母親は氷川莉緒。しかも、母さんは何処ぞの令嬢だったとか。で、駆け落ちして今に至るんだけど… 何という滅茶苦茶な設定だ… しかも、ご近所さんは織斑家と篠ノ之家。あ、因みに、明日で僕は小学1年生になります。

「コウト～？」飯ですよ～？

「あ、はい！」

「明日から一年生だな、優人」

「うん、やつとつて感じだけどね」

「そうか。まあ、お前は運動も出来るし、頭も良いしな、それに顔も良いからモテるんじゃないかな？」

「む、優人は渡しませんよ～！」

「莉緒、そりや、過保護過ぎるだら」

「アハハ…」

この二人、結婚してからも、名前で呼び合つたりして。

「そうでしょうか、有利？」

「そうだよ。つと、お前も明日は早いからな、さつと飯食つて、風呂入つて寝なくちゃな」

「うん、わかつてゐよ、父さん」

翌日、

「じゃ、こつてきまーす！」

「おう、入学式には行くからな！」

「気を付けて行つてくるんですよーー！」

「わかつてます！」

ガチャツ！

「お、優人！」

玄関から出ると、幼馴染の一夏と篠ノ之が居た。

「やあ、一夏！篠ノ之さん！」

「んじや、行くか！優人、篠ノ之！」

「一夏、逆だぞ？」

「へ？アハハ…じよ、冗談さ！」

この頃から方向音痴だつたのかよ…

入学式

一夏視点移行

『新入生代表、氷川優人！』

「はい！」

「（？なあ、篠ノ之、何で優人が新入生代表なんだ？）」

「（お、お前：あいつが成績優秀者だという事を知らないのか！？）

「（え！？あいつ、やっぱり頭良かつたんだ…）」

優人視点移行：

ううー、緊張するなー…たかが、入学時の学力テストで本気出すん
じゃなかつた…簡単過ぎたから、なあ…

『新入生代表、氷川優人！』

呼ばれた！

「はい！」

そう言つて壇上に上がり、手に持つていた原稿用紙を広げ、読み上

げ始める。

勇利視点

「お、息子の晴れ舞台だ。カメラ、カメラうと…」

「勇利ばかりズルいです、私にも見せてください…」

「わーった、わーった！」

因みに、勇利達の居る位置は保護者席の一一番後ろである。

「ほら」

そう言って、録画中のビデオカメラに映る息子の姿を見せる。

「本当にうちの優人が立つて…感動的ですね、勇利！」

「莉緒、声がでかい」

「す、すみません…」

優人視点移行

そんな事もあつた（らしい）入学式は無事終了。

そして、俺は入学祝いにパソコンを買つてもらい、インターネットも繋いだ。そして始める事は…

「武器の設計…！」

そう、俺はスパロボやガンダムなどの武器の設計をしたいと思つていた。

そして、そんな武器の設計をしていたある日。

「優人！、束さんが来てますよ～！」

「束さん？何の用だ？」

不思議に思つて、階段を降りて行く。

「ハロー、ゆーくん！」

「束さん、どうしたんですか？」

「ここじゃ、何ですから、優人の部屋に入れたらどうですか？」

「そうだね、母さん。束さん、どうぞ」

「おひじゅましまーす」

「んで、束さん、何の用ですか?」

「ゆーくんち、武器の設計してるでしょ?それもかなり強力そうな
「…ええ、まあ…どうしてそれを?」

「これは…まさか…

「ゆーくんのパソコンをハッキングして、ちょちょこと見せてもら
つたからね。それで、ゆーくんに手伝って欲しい事があるんだ~」
…やつてくれたな、この天災。

「…手伝って欲しい事?」

「うん、うん、ここじゃ説明しにくいから束さんの家まで来て」
「はあ…」

「あら、優人、折角お菓子だそつと思つたのに、出かけるんですね?」

「ええ、ちょっと束さんの家まで」

「そうですか、気を付けていらっしゃい」

「はい。いってきます」

「いりだよん」

「つて、物置じゃないですか!」

「ちつ、ちつ、ち、甘いなあ~ここに秘密基地があるので!」

「へ、へえ…」

「とりあえず、中に入つて」

「はあ…」

「あ、そこに立つて」

「はー…ん?」

段々、足下が下がつていつてる事に気がつく。

「束さん、これは?」

「私が作ったエレベーター!」

はつは、この天災、何でも作るのね。といふか、僕は束さんと同じ

ぐらい天才なんだから、作れるのかな…材料があれば出来るな…た

ぶん…

そうこう考へてるうちにエレベーターが止まる。

「と～ちゅく～。ようこそ！ 束さんのラボへ！」

「うわあ…」

様々な機械がある。まさにここは僕にとっては天国だ…これだけあれば、僕の武器も作れる…！

僕は武器の設計はしていたが、材料が無いため、設計止りだつた。その辺の廃材を使えば良かったのだが、面倒だつたので、お小遣いをこつこつと貯めて、通販でそれぞれの材料を買って作りうと思つていた。

「あ、それでね、ゆーくんに手伝つて欲しい事は、これ！」

そう言つて、ライトアップした白い甲冑のよつなものを指差す。

「これは…？」

「正式名称は決めてないけど、高性能な宇宙服！しかも女性にしか動かせない！」

「それで、僕にどうしろと？」

「外装は出来てるんだけどね～中身のOSが未完成で、システムも不安定だし、持たせる武器とかが無いの…」

「…ちょっと待つてください。OSとシステムはわかりますが、武器つて何ですか？ 武器つて」

「え、自己防衛の為に付けるんだよ…」

「は、はあ…」

「というわけで、手伝つて…ゆーくん…」

「…わかりました。但し、これの構造やら何やらを教えて下さいよ、でなきや手伝えませんし

「いいよ…」

「じゃあ、始めますか…」

「はいはーい、これが構造表ね！」

それから、僕と束さんのIOS作成が始まった。

第一話 めれ?俺がこる時点で原作ブレイクだよな?(後書き)

両親出て来てますけだし、じざりへしたら玉籠無くなると困こまや...

第一話 ハウスひつねた…（前書き）

いつも、キンケドウです。
なんやかんやで2話目です。
つて、誰も読んできませんね^ ^ ;

第一話 ハウスにいつなつた…

「いつも、先日から束さんの高性能な宇宙服（仮）の作成を手伝い始めました、氷川優人です。手伝い始めて一週間、そこで僕はとんでもないものを作ってしまった…そう、コアですよ、コア。束さんに見せてもらった資料を元に自分なりに考えながら束さんからもらつた材料を使って作れちゃいました。しかも、資料には女性にしか反応しないって書いてあるのに普通に俺に反応してるし。まさか…作り方も書いて無かつたのに作れてしまつし、しかも起動出来てるとは…神様チート恐るべし…」

『でしょー？ 神様は偉大なのです！』 フンス！

…幻聴が聞こえた気がする…とりあえず、これを束さんに見せてみるか。

「束さん、偶然こんなものが作れたんですけど…」

「あ、これ、あれのコアだね。作り方は見せてない筈なのによく作れたね～あ、しかも反応してる…どうしてか分からないけど、さすがゆーくん！」

「アハハ…とりあえず、僕もこれでちょっと束さんと同じものを作つてみます」

「わかつた～！じゃあ、ここにある材料、ゼーんぶ使っていいよ…」「本当にですか！？ありがとうございます！」

「いやいや、いつも手伝ってくれてるからね、ゆーくんは

「ここから、僕のオリジナルTISの作成が始まった。」

そして、オリジナルTISの作成が始まつて一年、小学校にて、とあ

る事件が起ころ。…え、時間が飛び過ぎ？仕方ないじゃない！毎日やつてる事が機械弄りなんて！

「ゴホン、で、いつも通り放課後帰ろうとしたんだけど、急に腹が痛くなつて教室掃除をする一夏に荷物預けてトイレに行つたんですよ。戻つて来たら、一夏と一緒に掃除をする、篠ノ之さんが六人の男子に囲まれて何かされてるんですね、はい。つて、原作では三人じゃ無かつた？増えてる？…一夏アアア！！どこ行つたアアア！！？」

…とりあえず、イジメの現場を撮影するか…この束さんお手製高性能ビデオカメラで…！」

「なあ、お前男女のクセになんでリボンなんかしてんだよ？」

「本当だよ、お前に似合わねーって」

取り囲んでる連中は大笑い。

…これを束さんに見せたら恐ろしい事になるな…

あ、一夏居た。何呑気に掃除をしてんの？

「大体、お前の姉ちゃん、変人なんだってな？変人の妹は変人でか？」

「お、お姉ちゃんは…変人なんかじゃない…！」

「男女が怒つた～！」

「お前ら、うるせえよ。掃除をしないなら帰れ

お、一夏が助け舟出したか。

「んだよ、織斑」

「俺知ってるぜ、こいつら夫婦らしいぜ…」

「夫婦！夫婦！」

「別に仲が少し良いだけだろ？夫婦なんかじゃねえよ」

「あ、そういうや、お前も姉ちゃん居るんだつけ？確かに男女の姉ちゃんと仲良かつたよな？やつぱり織斑の姉ちゃんも変人なんじゃね？」

「姉ちゃんをバカにするな！」

お、よく手を出さなかつたな。

「お前、好い加減ウザいんだよ！」

あ、殴つた。

「つてえ…」

「いつつも、いつも、男女庇いやがつて」

「うわ、何その理不尽な理由。あ、六人がかりになつた。」

「ギャハハ！！普段からウザいと思ってたからちょうど良いくぜ！」

「そろそろ不味いか…カメラを固定してと…」

「ねえ君達、一人に対して六人でやるのは卑怯じやない？」

「あん？氷川じやねえか。こいつが邪魔するから悪いんだよ」

「邪魔つて、篠ノ之さんをイジメる事かい？」

「つ！てめえ…」

「そういう事はいけないよね…」

「るせえんだよ！」

お、殴りかかつてくるか。だが、僕はその腕を掴んでそのまま背負い投げ。

「せい！」

「おうわ！？」ドンッ！

「ヤロー！」

残りの五人がかかつてくる。

「コラ！あなた達！何やつてるの！？」

「うげつ、先生だ！逃げる！」

ナイスタイミング、先生。

「あなた達大丈夫？特に織斑君と氷川君」

「僕は平気です。それより一夏と篠ノ之さんを」

「え、ええ…」

僕は教室の隅に置いてあつた自分のランドセルを背負つて教室を出て行く。

「それじや」

「あ、おい！」

セットして置いたカメラは回収つと

帰り道の途中。

「さつきはよくもやつてくれたな、氷川」「

さつきの六人が居た。

「あれ、どうしたの君達？」

「オメエをぶちのめす為に待つてたんだよ

「へえ、わざわざ」丁寧な事だね

「るせえんだよ！ やつちまうぞ！ お前ら！」

六人一気に走つてくる。そして、僕を取り囲む。僕はランドセルからリボルバーのついたガントレットの様なものを取り出す。

「なんだあ？ そりや？」

「複数で来るんだからハンデ付けでもらつてもいいでしょ？」

「は…この大人数に勝てるわきゃねえだろ！」

そう言つて周りの連中が僕にかかる。僕はそれを無視してリーダー格っぽい奴に走つていく。向こうは殴ろうとするが、僕はそれを避けて懷に飛び込み、ガントレットの様なものについている、杭を腹に突き付ける。

「威力は調節してあるけど、それでも痛いからね」

「はっ？」

そして、ガントレットに付いている引き金を引く。

ズドンッ！！

リボルバーの火薬が破裂し杭、ステーキが勢いよく飛び出す。

「ゴッホオ！！？」

ステーキを打ち込まれたそいつはあまりの衝撃に胃の中身を吐き出す。僕はそのままそいつを投げ、次のターゲットを選定する。

「さて、次は誰かな…」

薄つすらと笑みを浮かべる僕。

「二、こいつやべえよ！ みんな、ずらかるぞ…」

倒れてる一人を除いてみんな逃げて行く。

「あ、あ…」

「あーあ、君を置いて行っちゃうなんて、酷い友達だね」

「ひ、ひい…」

「でも、安心して。止めは刺さないから
僕はそのまま立ち去った。

その後家に着くと、帰りが遅いと親に怒られたが、篠ノ之さんがイジメられた事を話しそしてそれを止めた。という事を言ひつと父親は褒めてくれた。

「お前はお前の正義を信じてやつた事だ。誰も咎めねえよ。というわけで、帰りが遅かつた事は不問だ！」

「ありがとう、父さん」

翌日、学校にあのイジメっ子の親が来て、先生を含めて話しかけたが、僕が撮つておいたイジメの現場を見せると何も言い返してこなかつた。

その日の放課後、東さんに映像を見せたらひどく怒っていた。

そのまた次の日、篠ノ之さんをイジメていた六人は急な転校をしたという話を先生が言つていた。東さんおつかねえ：

第一話 もうじきいつなつた（後書き）

ちくせつ……俺に文才さえあれば……もつとアクセス件数増やせるのに……
因みに、ガントレットの様なものは、既に分かっていると思いますが
リボルビングステーキもどきです。

第三話 もう我慢の限界だー原作ブレイクしてやるー♪（前書き）

第三話です。

千冬さんが初登場です。

第二話 もう我慢の限界だ！原作ブレイクしてやるーえ？もうじてるー

篠ノ之事件（勝手に命名）から俺と一夏は篠ノ之の事を幕と呼ぶ様になつた。

それから2年、高性能な宇宙服（仮）は完成し名前はIIS、つまりインフィニットストラトスといつ正式名になり束さんは世界に向けて公表をした。無論、各国はそんなものあり得ないと鼻で笑つた。それがいけなかつた。束さんは日本が射程内にあるミサイル基地をハッキングし、2341発以上のミサイルを日本に向けて発射した。それをIISですべて落とすといつ作戦を思いついたのだ。白騎士のパイロットは一夏のお姉さんこと千冬さん。千冬さんは一夏の家に遊びに行つた時に少し挨拶したぐらいの関係ですね。

「それじゃ、千冬さん気を付けて」

「えー… ゆーくんの作ったIISも完成してるし、何故か男のゆーくんも起動出来たんだから、ゆーくんも行つてよ」

僕はジト目で束さんを見る。

そう、僕のIISは完成していた。束さんの白騎士を手伝いながら、IIS発表直前に何とか完成させた。

「優人、お前も来てくれると助かるのだが…」

「う…」

男はこうこう女の涙に弱い。いや、涙は流していないけどそんな寂しそうな声で言われたら… ねえ…

「はあ… わかりました、ですけど女性にしか使えないって束さんは公表しますから、バイザーやマントを付けて行きますよ」

「ありがとう！ ゆーくん、だーいすき！」 ダキッ！

「束さん、離れて下さい。IISの展開が出来ません」

「あ、ゴメン」

（来い… ブレイヴハーツ…）

念じると剣の形をしたネックレスが発光し、僕の体に機械の鎧が纏われる。腰には剣と銃。左肘には折り畳まれたファングスラッシュや。背中は光の剣で出来た翼がある。

優人はもしもの時のために用意しておいた黒いマントを羽織り、ヒュッケバイン風バイザーを付ける。これで顔がわからないはず。といふか、この姿はサンドロック（EW版）を思い出すな。

「そんなので、戦えるのか…？」

「大丈夫ですよ。ほら早くしないとミサイルが飛んできちゃう

「あ、ああ…」

「二人共ー！」ってうつしゃーーい！』

束さんに見送られながら、僕達は飛び立つた。

「これは…想像以上だな…」

360度すべてミサイルばっか、これはある意味珍しい体験かもな

「ああ…だが、私たちはやるしかない！」

そう言って千冬さんはミサイルの海に飛び込んで行く

「ははっ…流石千冬さん…僕もやるか！」

腰の2丁の銃、ケルベロスショットを手に取りミサイルに向けて撃つ。

半數程落としたところで銃を連結させる。

「他のモードのテストをしますか。ショットガンモード」

引き金を引くと収束された粒子の弾が拡散する。ミサイルは一気に5機程減る。

「うつひやあ…」ここまで拡散するとは…次はランチャーモード

また引き金を引く。ツインハンドガンモードよりも強力な収束された粒子が射出される。その粒子の通った先のミサイルはすべて爆発していた。

「これもまた結構な威力だな」

気が付くともう数える程しかミサイルは無くなっていた。

「うーん、エクスカリバーも試したかったけど、まあいいや。ワイングセイバー！」

翼の剣がミサイルに向かつて行く。そして、ミサイルをすべて落とした。

「ふう…千冬さん終わりましたね」

プライベートチャンネルで千冬さんに話掛ける。

「いや、まだだぞ。軍の連中が集まつて来たよつだ」

周りを見ると戦闘機やイージス艦などが僕達を囲んでいた。すっかり忘れてた。原作では確か無力化してたな。

「うーん、よし千冬さん。パイロットは殺さずに無力化しましよう！」

「何？」

「ここで現行兵器ではIHは倒せないとこつ認識をさせねばミサイルを使つたんですから、丁度いい機会ですよ」

「なるほど…わかつたやう」

よかつた、エクスカリバーを試すチャンスだ…っと、ファングスラッシュジャーを忘れてた。

性能を確かめながら戦つたら、数10分で片付いた。

「…呆気な…」

「そうだな…そろそろ戻るか…」

僕達はその後、IHのステルス機能を利用し束さんの家まで戻った。

「さつすがちーちゃんとゆーくん！早速話題になつてゐよー。」

そう言つてTVを見せる束さん。TVにはミサイルに迎え撃つ白騎士と黒いマントを羽織つたIHが映つていた。

「あ、本当だ」

「幾らなんでも反応が小さ過ぎないか、優人？」

「アハハ…でも、やつたの僕と千冬さんだし…」

「う…そう言われるとそつだな…」

「でも、これで束さんとゆーくんのISが凄いって事が世界中に伝わったよ！ありがとうね、二人とも！」

「そうですね。って、もうこんな時間か。それじゃ束さん、千冬さんさよなら

「ああ、またな」「バイバイゆーくん！」

次の日、僕は何故か束さんと一緒に国会に呼ばれた。困った事に束さんは僕の事を一緒に開発した者として公表していた。まあ、でもこれで好都合な展開になった：

「…では、ISはお一人の特許にすると言つ形でよろしいですね？」

「はい」

束さんは殆ど話を聞いていない。といつも寝てる。つまり、僕は只今束さんの秘書みたいなものかな…あ、そういうやこの後色んな人達から追い回されるのか。…もう原作なんて知るか、原作ブレイク開始。つーか、ISの開発協力した時点で原作ブレイクか…

「では、各国にこの製造されたコアという物をお送り致しますがよろしいですね？」

「あ、はい。ちゃんと各国に束さんが振り分けた通りの数が行く様にしてください。女性にしか扱えないという事も付け加えてね。それと、僕と束さんはISに関してどの国にも所属しませんので、自由国籍権を下さい」

ここで原作ブレイク、束さんが自由国籍権を手に入れれば重要人物保護プログラムを受けずに済むはず。因みに、束さんと僕が作ったコアは467機。僕が秘密裏に作った1機とブレイブハーツのコアを含めれば469機。

「ちょっと待つて下さい！日本にもですか？」

「当たり前です、各国のパワーバランスを保つ為にもISのコアを各国に渡すんですから、開発者たる僕達がどこかの国に属せばパワー

－バランスはすっかり変わってしまいます。その為に自由国籍権が欲しいのです」

「…わかりました、明日、各國と緊急集会を行いますのでその際、あなた方が自由国籍権を手に入れる様に手配致します」

「絶対ですよ」

そう言って隣で寝てる束さんを引きずりながら部屋を出て行つた。この国会には行きも帰りも電車。束さんより背の低い僕が束さんを引きずりながら電車に乗る場面は非常にシユールだったと思う。次の日の夕方、僕の家に国から電話があり、自由国籍権を取得出来たらしい。だが、今後誘拐などの危険性を予測して僕と束さん＆その家族は重要人物保護プログラムを受けなければならないらしい…」
駄目だつたか…

第三話 もう我慢の限界だ！原作ブレイクせりやーへ？もじりこむる。（後書き）

ミサイルの戦闘シーン等をキングクリムゾンしてしまった…

でも、EHS学園編に入るまでは書ける様にします…

ミサイルの戦闘シーン等をカットした理由は…かなり微妙といつか
…正直、書けなかつた…

第四話 旅立ち…高一になれる手前辺りまで…（前書き）

第四話です。

キングクリムゾンしまくつて原作に近付いてきました。

第四話 旅立ち…高一になる手前辺りまで…

束さんの家には電話は行つてないだろ？から僕は束さんに自由国籍権と重要人物保護プログラムの話をした。すると束さんは旅に出ると言つ。そして次の日、篠から束さんが突然居なくなつたと聞いた。僕は気になつて束さんのラボに入らせてもらつと何もかも無くなつていた。

その後、親に重要人物保護プログラムについて話した。そして、束さんがそれが原因で束さんが旅に出たということも…

「…成る程、お前と篠ノ之さんの娘さんが作ったIISっていうものせいで、俺たち家族はその重要人物保護プログラムっていうのを受けなきやなんねえのか」

「うん…ごめんなさい…」

「何謝つてんだ？別に悪い事をしたわけじゃねえ。お前が熱中出来るもんがたまたまこんな事態になつただけじゃねえか」

「でも、僕のせいで父さん達はこの家を離れなくちゃならないんだよ！？」

「…そうだわな、でも俺と莉緒が結婚しようとした時に比べりやどうつて事はねえ」

「え…あ…」

「だから、お前もお前の好きな様にしろ」

「…なら、僕は束さんみたいに自由に生きたい！」

「そうか…なら、フランスのここへ行け」

そう言つて紙を差し出した父さん。

「…」「…？」

「そこには、古くからの友人がいる。事前に連絡入れとくから荷物まとめて、明日にでも出発しろ」

「でも、保護プログラムのせいで飛行機とか使えないんじや」

「そこら辺は問題ねえ。友人のジェット機がお前を迎えて来るよう

に言つとくから」

父さんの友人って何者……？

「あ、ありがと……そりこえは父さん、僕に剣術を教えてくれるつて約束は？」

「あー、向こうの友人にでも習つてくれ。あいつも我流に近い剣術だし、お前の習いたい帯刀術も習えると思つぞ」

「そりなんだ……」

「話は終わりました？では、今日が家族全員での団欒の最後の日ですから、パーツとやりましょう！」

「お、そりやーい！」

「ありがとう…父さん、母さん…」

「辛氣臭えのは明日でいい！今は楽しむぞ！」

その後の夕食はとっても豪華だった。夕食後僕は荷物をまとめ、工房の工具などはエリと一緒に量子化させて荷物を減らした。

翌日、土曜日。

家の前にて

「と言つわけで、僕も旅に出るよ一夏、簞」

「なんだよ！突然！」

「い、一夏…その…私も重要人物保護プログラムとか言つやつのせいで明田にここを発つ…」

「えつ…」

「そうだったのか…因みにどこ行くんだ？」

「京都らしい…その後も転校はあるかもしけないと政府の人によわれた…」

「あーあ、一気に友達2人も居なくなっちまつのかよ～つまんね～

「そう言わないでよ。同じ星にいる限りいつか会えるでしょ？」

「なんだよ、そのクサイセリフ」

「そうだね、クサかったよ…そうだ、（簞、明日引っ越し越す前に告白したらどう？）」

「な、な、な、何を言つー…？」

「ん? どうした? 篇」

「いや、なんでも無いぞ…そعدだなんでもない…」

「変な篇…」

「（鈍感王一夏だから直ぐには彼女は出来ないと思けど、気持ちは伝えられるうちに伝えときなよ? しかも、明日の大会が引っ越しのせいで無くなつて、優勝したら付き合つていう約束はもう果たせないんだからね）」

「（あ、ああ…）」

「なんだよ、さつきからヒソヒソと…もしかして…愛の告白とか?」

「はあ…違うよ。そろそろ時間か…またね、一夏、第1…」

「ああ、またな!」

「ふん! またな…」

2人に見送られながら俺はタクシーに乗り込んだ。

1時間ぐらいで空港に到着。そして、メモに書かれた場所を目指す。
「すごい…本当にあつた…」

そこには真っ白なジエット機があつた。思いつきりマフィアっぽいおつさんが待機してる…

「氷川優人様ですね?」

「あ、はい」

「あなたのご両親の氷川勇利様より話を承りお迎えに上がりました。こちらへ」

「どうも、お邪魔します・つてえ、すごい!」

中はかなり凄かつた。アニメで見たようなリムジンの中みみたいに冷蔵庫やらTVやら高級ホテル顔負けの施設だった。

「優人様、お席にお座り下さい」

「あ、はい」

「それでは出発致します」

「ここから僕の旅物語の始まりだ!」

第五話 神様と再会して増えるチート…つてもい。（前書き）

今回は同じ一次創作小説を書いている方々を参考に行を開けてみました。

第五話 神様と再会して増えるチート…つておい。

「では、優人様ごゆっくりと」

そう言つてマフィアっぽいおっさんは去つて行く。

… そういうや、ガンダムのIIS作るつもりだつたけど結局、オリジナルIISになつちましたな… ファングスラッシュャーは付けたけど。よし、フランスに着いたら一機目のIISを作ろう。それで、専用パッケージで色んな機体になれるように作るう…

ん… 待てよ… 肝心の〇〇系ガンダムのGNドライブ作れねえ… 一度前に設計してみたけど、モノポールが無いから半永久的機関にならないんだよな… 木星まで行つてもモノポールを必要分採取するのに何年掛かるか…

『大丈夫! まかせて!』

あれ? 今声がした… そこで僕の意識は切れた。

目を開けると、真っ白な空間に僕は浮かんでいた。

— こりは… ?

『こりは天界… いや、君と私だけの空間なんだけど』

聞いた事のある声だ。

— 何故僕をここに?

『君が願い』ことを決めたからそれを叶えてあげようと思つて』

ああ、思い出した。この人、神様だ。また豊崎ボイスだよ。

一僕の願い』とつてまさか

『オリジナルのGNDライブが欲しいんでしょ？ IISサイズの』

一…はい

『私があげるよ』

一何故ですか？

『転生した際、君の願い』ことが少なかつたからかな？』

一結構頼みましたよね？

『でも、大きな願い』とつて天才ってスキルだけじゃない？』

一記憶の消去は？

『あんなもの、全然力使わないし』

一因果律の書き加えは？

『あれもノープログレムだね、実際力を使うのクオヴレー君だし』

一…成る程、分かりました

『ならよろしい。という訳でGNドライブあげるね。しかも、一いつ
！他に何か願い』と無い？今後一切会えないと思うけど？』

－なら、純粹種のイノベイターの力を下さい。あの力が無いとツイ
ンドライブを使いこなせませんから。後、他のガンダムやスパロボ
の機体の作り方を下さい。特にスパロボ系統はエンジンが特殊だつ
たりしますから。

『そりだね、じゃあ純粹種の力と設計のスキルを加えるね』

－大丈夫なんですか？

『ちょいギリギリだけど、叶えられるよ』

－あ、武器とかの足りない素材は何処かにありませんか？

『そう言つと思って、月のある場所に特殊な素材類を置いておいた
から。あなたが今後作ろうとしているダブルオークアンタの量子テ
レポートで月を探してみて』

－あの時と同じ神様とは思えない程有能だ…

『んなあ！？失礼だね！オマケとして、GNドライブの他にOO系
統の機体を作る為の素材も一緒にあげよつと思つたのにやめよ
うかな？』

－わーー！『めんなさい！嘘です！神様は気の利く神様です！

『ふふん、そうでしょう？』

この神様…本当に天然というか…何と言つか…

『あ、そうだ最後にあなたのいる世界ではバグが起きたの』

「バグ？」

『そう。本来起きるはずの無い事が起こる可能性があるから気を付けて』

一分かりました…肝に銘じておきます…

『それじゃ、そろそろ時間だね。またいつてらっしゃい、そしてさようなら…』

「ありがとうございました
そう言って僕は消えた…

『チート付けて原作通りに進んだらつまらないからね、少し意地悪しちゃった』

「ゆ…………ま…………ゆう…………優人…………ま…………優人様！」

「んあ？」

目を覚ますとジェット機は既に着陸しているようだ。

俺：12時間近く寝てたのか…

「ふう…やっと起きましたか。夕食になつても起きないので、

とても心配しましたよ

「すみません…」

「既に本家に到着していますので、そちらで朝食を摂つていただけますでしょうか?」

因みに、現時刻6時である

「分かりました」

「では、じゅり。寝ていたとはいってお腹が空いているでしょうから急いでご案内致します」

「ようじくお願ひします」

グウ~

あ。

「やはりお腹が空いているのですね、ご主人様の挨拶より先に朝食を摂つたほうがいいですね」

そう言ってマフィア風のおじさんは僕を先導する。
腹の虫を人に聞かせるのがこんなに恥ずかしいとは思わなかつた…

「あ、申し遅れました。私、オーベル・クロードと申します」

「あ、ようじくお願ひします、オーベルさん。そういうえばオーベルさんって日本語上手いですね、どうしてですか?」

「それは私の初恋の女性が日本人だったからです」

「へえ……」

うわ、すげえ努力家だな。好きな人の為に日本語覚えるとか。

「当時の話はあまりしたくないのでこれぐらいで。あ、着きましたよ」

流石に振られた話はしたくないか…そういうしてつらううちに食堂に着いたみたいだ。

「ひかりべじゅうべ」

そつ言つて椅子を引いて座り易くしてくれるオーベルさん。

「どうも」

「君が勇利の息子か！」

左のほうから声が聞こえた。しかも、めちゃくちや櫻井孝宏ボイスだわ。

「あなたが父の友人の？」

「自己紹介がまだだつたね。俺はアスベル・ドレルム、よろしく

ウッソーン、思いつきりTOGのアスベルやん。姓が違うけど。外見はそのままアスベルだ。

でも、流石に左眼にラムダは宿っていないようだ。

僕も自己紹介しなくてはと立ち上がろうとするが…

「座つたままでいいよ、優人君」

「はい、では改めまして。ゴホン…父、勇利の息子の氷川優人です。
これからお世話になります」

「あまり堅くならないでくれ、自然体で構わない」

「はい」

「それじゃ、まず食事にしよう」

その後僕はアスベルさんと一緒に食事を摂った。

第五話 神様と再会して増えるチート……つておい。（後書き）

今回はテイルズオブシリーズよりアスベル・ラントをモテルにしたキャラを登場させました。フランス編はまたキングクリムゾンを使つて3話程で終わらせて原作に入つていくつもりです。

伏線を張つてみたが、上手く回収出来るか不安です…

第六話 迷失の迷失の女の方（漫畫セイ）

第六話です。

今回、結構日本語がおかしいといふがおおいかも…

つて、前の話でもおかしいといふがあつたよな…

第六話 迷子の迷子の女の子

朝食を取り終えて、アスベルさんが僕に話をしてきた。

「優人君、勇利から話は聞いている。君は政府の重要人物保護プログラムから逃れる為にフランスに来たんだよね？」

「はい、父さんがここに来れば友人が力を貸してくれると。そして剣術を教えてくれるといつ事も」

「ああ、勇利の言つ通り俺達は君を政府から逃れる為に力を貸そうと思っている。勿論、剣術も俺が直々に教える」

「本当にですか！？ありがとうございます！」でも、僕を匿うと言う事は政府を騙すということになつてバレた時にアスベルさんの家の立場を悪くしてまうのでは？」

「安心してくれ、既に政府とは仲が悪い。それにここら辺の地域は俺が統括している。隣町もね。だから政府の人人が来て、君を連れて行こうとしても追い返したりする事は可能だ」

「この人の家す」過ぎだろ…

「凄いと思うただろ？でも実際はあまり良くないんだ。おかげでこの町が密入国者が多いと変な噂を流されているんだ」

「そんな…って僕が密入国者か…」

「あはは、気にしなくて偽装パスポートで正規入国扱いになつて

いるよ。名前と顔を少し変えてね

「へえ、準備がいいですね。…因みに名前と僕の顔はひとつになって居るんですね？」

「はい、これ偽装パスポート」

そこには顔は僕だけど、髪形が天然パー・マジやなくてストレート、名前はリコウ・ド・ドレルム。それだけなのにバレないって…政府アホ過ぎや…

「政府が馬鹿なんぢやないかと思つていいだろ? けど、うちの部下が整形して撮つた写真だからバレてないんだよ」

「つまり、政府は僕が入国したのではなくその部下が入国したと思っているんですね?」

「ちょっと分かりにくかったね、そいつ言つ事だよ」

「この人、結構凄いな…

「さて、剣術の事だけど明日からにじょい」

「何故ですか?」

「ソニーに来て間も無いからね。今日は荷物を整理して観光でもしていくといふ」

「でもー。」

「焦りは禁物だ。今は観光でもしてきて、ここでの生活に少しでも慣らしておいた方がいい」

「…わかりました。ですが、僕は自動翻訳機のおかげでフランス語を理解する事は出来るんですけど、喋れないんです…」

「その点については心配ない。オーベルが着いて行く

「ありがとうございます。そして、ようしくお願ひします、オーベルさん」

「それじゃ、楽しんできてくれ

「ようしく頼むよ、優人君」

そう言ってアスベルさんは立ち上がり、早々と食堂を出て行ってしまった。

「それじゃあ、優人君。私がフランスを案内してしませう。」

「ようしくお願ひします！」

それから僕はオーベルさんと共にリムジンに乗ってフランスの名所を巡り続けた。

それから夕方になり、僕は観光を終え、ドレルム家の管理する地区的隣町の公園にいた。

ボーッとベンチに座りながら公園中を見回すと僕と同じ年ぐらいの女の子が噴水の近くで座り込んで俯いていた。

僕はその子がどうしたのか気になつて近付いて話し掛けた。

「どうしたの？」

しまった、日本語で話しあげてしまった。

「え？」

俯いていた女の子は僕を見上げた。その瞳はエメラルド色で震えていた。とこか、この子日本語分かるのか？

「えーっと、日本語分かるの？」

その女の子はコクコクと頷いた。

「せうなんだ、それじゃあ改めて聞くよ~どうしたの？」

「あのね……お母さんと一緒にこの近くに散歩に来たんだけど、お母さんとはぐれちゃって……」

成る程、成る程。それで寂しくなつて泣きそつになつていたと。

「やうだね……はぐれたのはこの辺っ？」

「うそ……」

「なり、僕も君の母さんを探してあげるよ。」

「え、でも……」

「でもも何もあるもんか。人が困った時はお互い様だよ

「… そうだね、ありがとう」

その後、僕と女の子はその子のお母さんを探したが、一向に見つか
らなかつた。そして少し経つてから女の子から腹の虫の鳴き声が聞
こえた。

「あつ…／＼／＼」

女の子は恥ずかしそうに俯く。

「えーっと…ちょっとだけこのベンチで待ってて」

僕は女の子をベンチに座らせ、近くにあったクレープの屋台でクレ
ープを2つ買つてその子に渡した。

「はい」

「え、でも…」

「僕もお腹が空いてたんだ。それ元々、一人で吃べるのは美味しいくな
いから」

「う、うん… いただきます」

「召し上がり」

「甘くて、美味しい…」

「本当だね…」

そして、クレープを食べていると声が聞こえた、女人の。

「シャルロット・シャルロット・ビートル屋のーーー？」

「あ、お母さん！」

「あの人ガ?」

「うんー！」

女の子はシャルロットと叫んでいた女性の所へと走つて行った。僕はその光景を見守つていた。

「ありがとうーーー紹介がまだだつたね。私はシャルロットーーー君、名前は?」

女の子はお母さんと手を繋ぎながら僕に聞いてきた。
つて、シャルロットーーー?おいおい、一夏君のハーレム候補ジャマイカーこんな所で会つて大丈夫なのか!?
そんな事を考えながら僕は紹介をした。

「僕は優人」

「ゴウトーーーありがとうーーー！」

僕にお礼を告げるとその子のお母さんもお辞儀をして日本語でお礼を告げてきた。

「娘がお世話になりました……」

「人として当然の事をしたまでです。それじゃあ僕はこれで」

「バイバイ！ユウト！」

「バイバイ、シャルロット」

お互い、別れの挨拶を済ませてそれぞれの帰路に着いた。
その後、僕はシャルロットとフランスで会う事はなかつた。
そう…フランスでは…

第六話 迷子の迷子の女の子（後書き）

はい、ヒロイン登場回でした。

フラグの建て方が難しい…これで本当にシャルロットが優人君に惚れたという理由になるのか不安です…

だれか…私にアドバイスを…ガクツ…

第七話 成長しました。高一ぐらー（前書き）

第七話です。

こんな駄文の一次創作小説でも読んでくれてる人が居てくれてあります。

でも、評価は一向に上がらない…

第七話 成長しました。高1ぐらい

僕がフランスに来て一日目以降、剣の稽古が始まった。アスベルさんの剣技はまんまアスベル・ラントそのものの太刀筋だつた。でも、流石に旋狼牙や極光蓮華は出来なかつたけど、葬刃は眼にも止まらぬ居合切りだつたり、裂震虎砲は全身の体重を相手にぶつけて吹き飛ばす技だつたりと色々と違いはあつたものの、アスベルの剣技を習う事が出来た。

それから5年とちょっと、僕は高1にならうとしていた。原作の時期的にはそろそろ一夏がISを起動させる辺りだな。

そんな事を考えながら僕は新しいISを完成させた。その名もフランスフィールド（以降PF）。訳すと英語で素体。フランスで作つたからフランス語にしたかつたけど、語呂が悪かつたんでやめた。…思えば、僕の最初のISのブレイヴハーツも名前が厨二っぽいな…しかもブレイヴなんて名前なのに銃の名前がケルベロスとかね…うん、おかしいね…まあ、考えても仕方ない！

今回作つたPFは既にファイットティングを済ませた。単一仕様能力も発動している。ただ、その単一仕様能力が専用パッケージを装備しなければ発動しないが、パッケージによつて単一仕様能力を変えるという代物なので別に気にしていない。むしろチート過ぎたと思つた。

それから一週間後、僕は神様から貰つたGNドライブをブレイヴハーツから取り出した。あの神様は僕のブレイヴハーツに量子化させて入れていたのだ。しかもガンダムのバーツと共に。おかげで、工具を取り出すのが大変だった。

僕は取り出したGNドライブの動作を確認し、あらかじめ作っておいたPF専用パッケージ、クアンタに一機のGNドライブを積んだ。そして、もう一個の専用パッケージ、サーバーニヤに一機のGNドライブを登録しておいた。これで、クアンタを起動してもサーバーニヤを起動してもGNドライブ搭載型として出撃可能になつた。

僕がクアンタとサーバーニヤを完成させた直後TVから速報が聞こえた。

『速報です！男性がIISを起動させたそうです！名前は織斑一夏、15歳…』

「お、始まつたか…再会が楽しみだね、一夏…」

独り言をつぶやき僕はTVを消して、PF専用パッケージの起動テストを行つた。

「GNドライブ、マッチング・クリア…ツインドライブ、安定領域…トランザムテスト開始…オーバーロードの危険性ゼロ…トランザム停止…確認…テスト終了…」

なんとかGNドライブは安定して居るみたいだ。この分なら行けるな。

「よし！完成！これから日本に戻るうかな

既にアスベルさんには話を付けてある。なので、PFが完成次第出て行くつもりだったのだ。でも、流石に挨拶ぐらうしていかなくちゃ。

着いた、アスベルさんの書斎だ。

「ンン。」

『入れ』

「失礼します、アスベルさん」

「なんだ、優人か。その様子だとTISが完成したんだな？」

「はい。なので、別れの挨拶に来ました。アスベルさん、いえ、教官。今まで、お世話になりました」

「ああ、これからも剣技に磨きをかけるんだぞ」

「はいー。」

別れの挨拶が済ませた後、僕はドレルム邸の屋根の上に立ち、PFをクアンタで起動した。

「GNZドライブ安定…ツインドライブシステム…オールクリア…量子ワープシステム、起動」

あの神様は脳内設計の中にちゃんと量子ワープシステムの設計も入れていてくれたので、この機体はサイズが違うだけのダブルオーケアンタになっている。無論、クアンタムシステムも組み込んである。

肩のシールドからソーデビットが5つ離れ、前方に量子ゲートを形成する。

「座標確認…」

座標は日本。これでOK。

そして僕は量子ゲートに入った。

「…ここは…日本か…」

一瞬目の前が眩しくなったと思うと、目の前に見覚えのある神社があつた。篠ノ之神社だ。ここで一夏と篠が剣道を習っていたのだ。

「つと…」

誰かがくる前にとPFを待機状態にする。PFの待機形態はブレイブハーツのようなネックレスでなく、花の形をしたバッヂが胸ポケットに着いている。

「確かに事前に調べた情報だと、父さんと母さんは元の家から動いて無いんだつたな」

最初に日本に着いたら両親に挨拶すると決めていたので、情報を集めていたのだが、この情報を知った時、かなり驚いた。保護ブログラムを受けてるものだと思っていたのだが、どうやらアスベルさん達の配慮で移動せずに済んだらしい。改めてアスベルさんが凄い事が分かった。

そんな事を考えながら歩いていると家に着いた。現時刻、深夜2時。アスベルさんが政府に見つかってはマズいとアドバイスをくれたので、両親に連絡してこの時間に来たのだ。実際、量子ワープは失敗

するか小刻みにしかワープ出来ないと思っていたので、こんなに早く着くと思わなかつた。ドアに手を掛け開けると…

「優人？ 優人なんですね？」

「う、うん。ただいま、母さん、父さん」

「ああ、おかえり」

「おかえりですね、優人！」

その後、一旦就寝。僕の部屋はあの時ままだつた。

次の日

「はい、これ」

「何これ？ 預金通帳？」

母さんの手には5枚の預金通帳があつた。

「はい、優人がISの特許を取つてていたのでお金がドンドン貯まつていたんです。幾らか現金を下ろして限度額にならないようにしてはいたんですが、足りなくなつてしまつて五枚ぐらい作つてしまつました…」

「因みにその現金は使つた？」

「はい、優人のお金を管理する金庫を買つた方に…」

母さんに手を引かれ、両親の部屋に入ると、でかい金庫があつた。

「でかい！」

「これぐらい大きく無ければ入りきらなかつたんですねー。」

「は、はは、母さん、この現金は母さん達で使って」

「でも……」

「今までどじれからの養育費だと思つてー。」

「…わかりました。ところで優人はこれから何処へ行こうとしてたんですか？」

「ん？一夏の家だよ」

そして、一夏の家。

ピンポン。

「はいはーい、今までーす」ガチャツ

「やあ！久しぶり、一夏ー！」

「優人？優人なんだな！？お前、いつ旅から帰つてたんだよ？」

「ん？昨日だよ」

「まあ、とりあえず入れよー。」

僕は一夏の家へ久しぶりに入りフランスの土産話した後、一夏の
IS学園入学について話をした。

「そりゃ、大変なことになつたねえ」「ニヤニヤ

「何ニヤニヤしてんだよ。おかげで、こつちは珍獸を見る様な目で
見られるんだぞ！？」

「まあまあ。とりあえず、試験つてのはいつなんだ？」

「明日だよ。はあ…嫌だな…」

「それじゃあ僕は見学に行こつかな？」

「ん？ 部外者は入れないと思つた？」

「これを見せねばいいでしょ？」

「そう言つてカードを取り出す優人。

「これは？」

「IS開発者証明証、これがあればISに関する事ならいかなる場合でも介入できる様になる優れ物だよ」

ついでに、この証明証を作つても、ひつひでにどの国の法律も適用されないという約束もしてもらつていて、この証明証がそれを証明する物にもなつていて。え？ なんでそんな事をして貰つたかって？ そもそもしなきやISを自由に使えないし、女尊男卑の世の中になつていくこの世界で冤罪にかけられたらやだし。

「すげえ！んじゃ、ISの開発者として何かアドバイスをくれよー。」

「相手の動きを良く見て」

「それだけかよー。」

「一夏なら出来るさ」

原作でも山田先生だつたし大丈夫だろ。

そして、次の日…

試験の日が来た。でもここで一夏が負けても勝つても結局入学なんだよな。

第七話 成長しました。高一ぐらー（後書き）

もうすぐ原作突入ですよー猿渡さん！

ミスターさんのモノマネでした

第八話 抜刀！研ぎ澄ませー… たらいにのばな…（前書き）

第八話です。

今日は千冬ファンめんたいの回です。
こんなに千冬さんが弱いわけがないと思つた方は即回れ右してください。

何時のためにかP V 20'000 & ニーカクセス4'000 突破
してたんですね。
こんな駄作なのにありがとうございます。
ではピース。

第八話 抜刀！研ぎ澄ませ… たらいの元な

「一夏ー頑張れー」

僕が今いる場所はEIS学園の第3アリーナである。ここで一夏の試験を行うそうだ。

「たつく…あいつ、他人事みたいに…」

あ、一夏が何かぶつくを言つてる。

「お前…優人か？」

不意に後ろから声を掛けられる。振り向くと黒いスースを着た一夏の姉、織斑千冬が立っていた。

「あ、ども。お久しぶりです」

「いつ日本に戻ってきた？」

「日本には一昨日戻って来ました」

「そうか…それでここで一夏の応援をしているというわけか

「その通りです。ところで僕もこの学園に受験したいんですけど?..」

「…本気で言つてるのか?」

「はい、HSは動かせるから問題無いでしょ?」

「それはそうだが…」

「…あ、女子ばっかでも気にしませんよ。僕は一夏を観察したいな
なんて思つてゐるだけですか？」

「わつこつ問題ではなかろう…」

「それ」「この学園に入つてしまえば政府もつらへ無くなるだう
うし…」

「…なるほど、それは一理あるな…」

「でしょうって、あれ？一夏の相手が勝手に壁に激突しましたけ
ど…」

「山田先生…」

あ、やつぱり山田先生が相手だったのか。

「まあ、分かった。私が申請を出しておいつ。恐らくお前は今田の
午後には試験を受ける事になるだろ？」

「ありがとうございます」

「フフフ…これで一夏のハーレムを見届ける事が出来る…

そんな事を考へていふ間に千冬さんが居なくなり、入れ替わるよ
うに一夏がこっちに来た。

「やあ、お疲れ様、一夏。俺の言つた通り相手を見てれば勝てたでしょ？」

「ああ、まさか勝手に突っ込んで勝手に負けてくれるとは思わなかつたぜ。そりいや、そつと千冬姉と話をしてたみたいだけど?」

「ああ、僕もエリ学園を受験するよつ手配してもらひつてた」

「はあー!?.」

「あ、言つてなかつたね、僕もエス動かせるんだ」

「お、俺一人じやなかつたんだな…」

「うん」

「優人」

「あ、千冬さん」

「申請を終えた。午後1時30分にお前の試験を始める。場所はここ、第3アリーナだ。そして相手は私だ」

「えつー!?.」

「お前は一応専用機持ちでベテランだからな。相手に不足は無からう!?.」

「いや、そりやそうですけど…だからつて千冬さんが相手じや無くてもいいじゃないですか!」

「…ちよつと待て、優人。お前、ずっと前からIIS使えたのか！？」

「え？ うん」

「一夏がポカーンとしてる。どうしたんだろう？」

「とりあえず、一夏。応援してよね」

「あ、ああ…」

「話は纏まつたな。優人と一夏はこれから案内する食堂で昼食を取れ。優人は時間に遅れるなよ」

「はい」「分かった」

その後、僕達は千冬さんの案内の元、原作でも美味すぎる原作一夏に評判だった食堂で昼食を取った。一夏は日替わり定食で、僕はカルボナーラを頼んだのだがそこら辺の料理店で食べるものより美味しかった。

そして時は移り試験時間、もとい運命の時が迫る。千冬さんが相手とかマジ無理…

それでもやるしかない…空中に浮かんだディスプレイを見ながらそう考えた。

「なあ、お前が使つ工ひつて訓練機じゃねーの？」

「ん？ ああ。僕のIISは専用機だよ。自作したね」

「なんかズルいな…」

「そう拗ねないでよ、イイじゃない。試験で勝てたし、多分、入学すれば専用機を貰えるんじやない?」

「どうしてだよ?」

「世界で唯一男でIRSを動かせる男。そんな事言われたらデータを取りたがる連中が多いだろうからね」

「へえ…」

ま、原作で白式貰つてたし、大丈夫だろ。

『優人さん、IRSを装着してアリーナ中央まで移動してください』

「時間が…一夏、応援頼むよ」

「ああ、頑張れよ!」

「うん。来い…ブレイヴハーツ!」

僕は光に包まれ、光が消えると一夏が試験で使つた打鉄より一回り小さいIRSが装着されていた。それはまるで鎧を纏うように。顔には後ろにアンテナが伸びたヘッドバンド型のハイパー・センサーが取り付けられ、左肘に一つの細長い鉄の棒が付いている。腰には鞘に納められた剣と2対の銃が付いており、背中には非固定武装の翼が付いていて、そこから光で出来た剣が左右、3本ずつで翼を形成していた。

「へえ……優人のエヒ、かつこいいな……」

「ありがと……それじゃ、行つてくるー。」

「応！」

カタパルトに足を固定し、火花を散らしながらカタパルトから射出された。

アリーナに出ると、目の前に打鉄を纏う千冬さんがいた。

「ほつ……懐かしいな……」

「あの事件から5年経つてますからね」

「あれでお前と手合させしたかつたものだな」

「ははつ……冗談は……」 チヤキツ……

腰から2対の銃を手に取り……

「言わないで下さい！」 ババン！

2つ同時に引き金を引いて、一発のビームが飛んで行く。

しかし、千冬さんはそれを最小限の動きで躰し、僕に接近してくる。

僕も負けじと銃の引き金を引き続け弾幕を張るが、あっさりと躰される。

そのまま千冬さんは僕に一気に接近して、打鉄の近接ブレードで斬りつけてきた。

「ハアー！」

「……」

僕は咄嗟に2対の銃を交差させて剣を受け止めるが、千冬さんの力が強く、押されて行く。

このままでは……と僕は思い、背中の光の剣に命令を送った。

「田標を斬り裂け！」

そう僕が命令すると、一本の光の剣が背中の翼から離れて千冬さんへ飛んで行く。

「チツー！」

千冬さんは慌てて距離を取り、近接ブレード一本で様々な方向から斬りつける光の剣を捌いていた。

「隙だらけですよー！」

僕は千冬さんが光の剣を捌いているうちに、左肘から細長い鉄の棒を一本とも取つてX字に合体させて、ブーメランの様に投げる。

「ファングスラッシュヤーー！」

「何ー？」

千冬さんは光の剣を捌きつつ、回避行動を取る。おかげで、光の剣は振り切ったが、ファングスラッシュャーは自動追尾モードで千冬さんを追い詰める。

「自動で追尾してくるのか…ならば…」

突然、千冬さんが姿を消した。いや、正確には瞬時加速イグニッショントーストを使ってこつちに迫つて来たのだ。

「イグニッショントーストか…ってダブル…？」

一段階瞬時加速イグニッショントーストは通常、スラスターが多い機体で無ければ使う事が困難なのだが、千冬さんは平然とそれをやってのけた。

おかげで、距離は詰められ、ファングスラッシュャーは目標が消えたと判断され、空中を飛び回つてしまつていて。僕は千冬さんの速さに翻弄され、まともな防御も出来ず…

「ハア…!…!…!

「うわあああ…!…!…」

咄嗟に腕を前に構えたが、近接ブレードで斬りつけられ、シールドエネルギーが削られる。

僕は一撃イグニッショントーストがくる前に瞬時加速で一時離脱をした。

ハイパー・センサーに映るシールドエネルギーを見ると、残り254だつた。それに比べ、千冬さんは残り298。僅差に近いが、僕は

攻撃を入れる事が出来ずに削られている為、千冬さんが有利と言つても過言ではない。

「流石ですね…千冬さん…」

「フツ…お前もな…」

このままではと思い、僕は腰の剣を鞘ごと手に持ち、帯刀術の構えを取つた。

「ほつ…やつと近接戦闘を見せるか…」

「相手が相手だから避けてましたけどね。でも、もう攻め方がこれしか無いので」

「フツ…ならばお前の剣技、私に見せてみろー」

そう言つて僕に近づいてくる千冬さん。僕も立ち向かって行き、近接ブレードと鞘がぶつかり合い火花を散らした。

そのまま鞘で近接ブレードを流し、鞘で殴つた後千冬さんに蹴りを入れた。

「なつ…」

「まだまだーー！」

僕は瞬時加速を使って力を強めた全体重を乗せるタックルをお見舞いする。

「斬るつ！！」

吹き飛んで行く千冬さんを通り過ぎながら抜刀し斬りつけ、そのまま鞘へ収める。これで結構削つたはず…

振り向く途中、ハイパーセンサーを確認すると、僕は残り98。千冬さんが残り97。差は1だが、かなり減らせたほうだ。

「クツ…フランスで面白い剣技を習つて来たようだな…」

「あ、あれ、僕、千冬さんに、言つて…ませんよね…」ハアハア…

「束から聞いたからな…」

納得だ… あの人なら俺の事を知つても不思議じやない…

「では、決着を付けるぞ！」

「はい！」

「うおおおおおお…！」

二人が衝突する… 結果は…

「惜しかつたな、優人！」

「それでもないさ、向こうはかなりハンデ付けてくれてたし、こっちの機体がよかつただけだ」

「それでも、あの千冬姉を追い詰めるなんてすげえよ、あの一太刀が届いてりやな…」

そう、僕は負けた。最後の一振りは千冬さんが早かつたのだ。

「だが、優人、お前もなかなかよかつたぞ？」

「あ、千冬姉！」

「ありがとうございます。でも、やはり僕にもまだまだ鍛錬が足りないと感じることが出来ました。千冬さん、ご指導ありがとうございました！」

「指導などしたつもりは無いがな…まあ…入学までにこれを読んでおけよ？まあ、優人はいるかもしれないが」

そう言って一夏と僕は分厚いIISの参考書を渡される。

「うげえ…」

「入学までに勉強して来い」

「はい…」「はい！」

その後は通常通り帰宅。夕食は一夏の家で食べた。

第八話　抜刀！研ぎ澄ませ！　たらいにのこな…（後書き）

初戦闘シーンです。

因みに、後の話でやる予定でしたが補足するとオリ主のISのファングスラッシュヤーはゾル・オリハルコニウム製では無いので、打鉄の近接ブレードで切り裂くことが出来る設定です。正直、今回の話でやつて見たかつたけどISの3巻読んでたら千冬さんの一段階瞬時加速をしてるシーンを書いて見たかつたので没にしました…

後、サブタイトルの元ネタは作者が最近再燃し始めたTOGfの戦闘BGMの題名です。

第九話 入学初日から授業とかね、きついね（前書き）

第九話です。

基本、原作丸写しです…申し訳ない…

気が付くと、お気に入りが一件減つていた…駄文だからですね…精進します…

第九話 入学初日から授業とかね、きついね

「ふああ～あ…」

現在、早朝5時。今日からEIS学園へ登校だ。明日から寮での生活なので、部屋は小さつぱりしている。両親は僕とアスベルさんが政府に圧力を掛けたら自由に動けるようになり、昨日フランスへと向かつた。なんでも、僕が養育費と言つて渡したお金で世界一周をしてくるそうだ。

僕は重たい体を持ち上げ、洗面所に行き、顔を洗つて田を見ます。そして服を脱いでそのまま朝風呂をする。朝風呂を終え、EIS学園の制服を着る。その後リビングへ行つて朝食を食べる。

朝食を食べ終える頃には6時になつていた。まだ時間があるので、暫く離れるこの家の掃除をした。

掃除が终わり、戸締りをして僕は鞄を持つて外に出た。

外に出ると一夏が待つていた。

「おー、優人。おはよー」

「うふ、おはよう」

「お前の事だから集合時間の5分前に来てると思つたら時間ジャストとはな」

「家の掃除を軽くやつてたんだ。暫く誰もいないしね

「あれ？ 勇利さん達は？」

「昨日から旅行だからこなじよ

「へえ……」

「そろそろ行けー夏。電車に乗り遅れると遅刻して千冬さんに殺されるよ?」

「それだけは勘弁だ……」

そんな会話をしながら僕達はE.S学園の前に着いた。E.Sで千冬さんと待ち合わせなのだ。なんでも僕達男子は異例なので、普通に入るのはマズイという事で千冬さんと一緒に入るという事になつた。一夏はソワソワして落ち着かないが僕は両耳にイヤホンを付け、音楽を聴いている。聴いているのは、神様がこちらの世界でも見れるようになんと準備してくれたあのアニメ『けいおん!』のオリジナルメドレーだ。

(はあ~唯ちゃんのまつたりボイスは落ち着くな~)

少し顔が緩んでる気がした…

「織斑、氷川、待たせたな」

「あ、千冬姉…つていって!?」

千冬のげんこつが炸裂…

「E.Sでは織斑先生と呼べ、馬鹿者…」

僕はイヤホンを取り、姿勢を正して

「今日からよろしくお願いします、織斑教官ー。」

「教官では無い、先生だ」

その後僕達はクラスに案内された。同じクラスの方が監視がし易いと僕と一緒に組となつた。

「私が案内出来るのはここまでだ。すぐにSHRが始まるから席に着いておけ」

それぞれの席に着くと本当にすぐSHRが始まった。

「皆さん、入学おめでとうございますー副担任の山田真耶ですー！」

シーン…

ありや？誰か反応してあげなよ？って僕もか…

「あ、あれ…？」

山田先生がなんだか焦つてるみたいだ。つか、原作でもこんな流れだつたか…

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

一夏視点移行…

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺と優人一人という点だ。

(これは……想像以上にきつい……)

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中＆最前列なんだ。めちやくちや目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

俺は窓側の方に目をやる。

「…………」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼馴染の篠ノ之箒はふいつと窓の外に顔をそらした。なんて奴だ。これが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度だろ？ いや、もしかして俺嫌われてるんじゃないかな？

試しに箒と反対側に居る、優人にも視線を送ったが何故か一コ一コした顔で俺を見る。もしかして、あいつ俺の反応を楽しんでる…？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいいつー？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンねーでもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、

「ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……つていうか血口紹介しますから。先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対です」

優人視點移行

先生と少し漫才をした一夏が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は儀礼的に頭を下げる、上げる。女子達は『もつと色々喋つてよ』的な視線を送りつつ、『これで終わりじゃないよね?』的な空気を作った。

「以上です」

ギヤグ漫画みたいにずつこける女子数名が居た。僕も笑いを堪えるのに必死だった。

すると、千冬さんがクラスに入つて来て、一夏が頭に？マークを出しているところにスパン！と出席簿が叩きつけられた。

「二二一！」

一夏が振り向くと

「げえつ、関羽！？」

スパーン！とまたまた爽快な音が響く。響く？仮面ライダー響鬼？
そうだ、前世で見てなかつたから見よう。

謎の決心を僕が決めたと同時に千冬さんが口を開いた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

千冬さん、ナイス突っ込み！

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これ位はしないと…」

あれ？山田先生、千冬さん来た途端に涙声じゃなくなつたぞ？僕が
そんな事を考へてるうちに千冬さんが自己紹介を始める。あ、耳栓
よーい。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者
に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来
ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六
才までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。
いいな」

千冬さんの話が終わると同時に耳栓を装着。耳栓をしていて分から
ないが、黄色い声援が響いてるに違いない。だって一夏が驚いてる
んだもん。

暫くしたら僕の前に千冬さんが来て、何かなー?って思つたら出席簿アタックが飛んで来た。僕は咄嗟に机脇に置いておいた木刀で防いだ。片手で耳栓を外し、千冬さんに話掛ける。

「ど、どひしたんですか?ち…織斑先生…?」

かなりきつい…木刀と出席簿だってのになんでこんなに押されてるんだよ…

「自己紹介がお前の番だと言つのに、自己紹介をしないからな。私が知らせに来てやつた。どうだ?嬉しいだろ?」

「ははっ…そりゃありがたいです…」

ヤバイ…左腕がそろそろ限界…

「わかつたら、さつさと自己紹介をしろ」

それから初めて力が緩み、出席簿を離す。

流石に一夏の一の舞は避けたいね…僕は深呼吸して自己紹介をする。

「氷川優人です。織斑くんの次にエスを起動出来たと言つ事でこちらに入学させられました。一年間よろしくお願いします」

無難な自己紹介だ。これで満点…って、一夏の時のような空氣にしないでくれ…

だが、僕にはこれ以上言つ事はない。
僕はそのまま座った。

「ふん…まあいい、次」

よ、よかつたあああ！！満点では無いが、出席簿アタックが来なかつた…次来たら左腕が死んでいたぜ…

S H R が終わり、僕は一時間目の授業を受けた。今はその一時間目が終わつた後の休み時間。

「なあ、優人。お前、一時間目の授業…わかつてゐよな…」

「当たり前さ、製作者だしね」

「はあ、俺にHSの事を教えてくれよ…」

「高級料亭の飯を奢つてくれるなり」

「酷つ…」

「何を言つてゐるの？等価交換だよ？」

「はあ…とこりどさつつきから女子からの視線が気になつて仕方ないんだけど…お前は？」

「それは、無視しろ」

だが、しかし、これは想像以上にきついと思った一夏の気持ちはよくわかつた。誰だ、ハーレムは天国とか言つたやつ。そんな考えの中、凜とした声が聞こえた。

「ちょっといいか、一人とも…」

見上げると六年ぶりの幼馴染、篠ノ之簾が立っていた。

「……簾？」

一夏が名前を呼ぶ。すると簾は

「屋上でいいか？」

あり？原作だと廊下だったよな？ああ、アニメ版か。幸い、一夏は屋上が一階上のためすぐにに行くことが出来る。

「早く来い…」

何時の間にか出口に立っている簾。

「うん、わかった」

「あ、待ってくれよ二人とも！」

屋上に出ると、一時の沈黙が訪れるが、一夏の一言で沈黙は破られる。

「そういえば

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでと！」

「…………」

あり？ 篠だんまりか？

「なんでそんな事知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし…」

「な、なんで新聞なんか見てるんだ？」

「え、それ理不尽過ぎない？」

思わず突っ込んでしまった。

「…………」

あー、また沈黙を作つてしまつた…

「あー、あと」

サンキュー、一夏ー！ナイスフォロー！

「な、何だ！？」

「…………」

「あ、いや……」

自分の剣幕に気づいたのか、ぱつが悪そりする篠。一夏に会えたのが嬉しいのか、妙に興奮してる。

「久しぶり。六年ぶりだけビ、篠つてすぐわかつたぞ」

「ああ、僕も」

「え……」

「ほり、髪型一緒だし。なあ、優人」

「ああ」

「よ、よく覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

「……」

「あー、一夏が睨まれた……」

僕は無言で篠の肩に手を置き、励ます……

「一夏だからね……抑えるんだ、篠……」

「う、うむ……分かっている、優人……」

キーンコーンカーンコーン。

おっと、タイムアップだな。

「二人とも、教室もどるよ。千冬さんご殴られる前に

「お、お」「う、う」「え、え」

二人の声がハモる。教室に戻ると僕と篝はすぐに席に着いたが、一夏は何故か席の前に行くと何かを考え始め、千冬さんに叩かれた。

「ひとつと席に着け、織斑」

「……」指導ありがと「ひざ」でいます、織斑先生

一夏の脳細胞、二万個死んだのか…南無…

一夏視点移行…

一時間田…すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし、俺は全くついて行けなかつた。

「…………」

どつかりと積まれた教科書五冊。その一番上のものをぱらりとめぐるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。

(お、俺だけか?俺だけなのか?みんなわかるのか?いや、優人はわかるけど…このアクティブなんぢゃらとか広域うんたらとか、どういう意味なんだ?といつかこれ、まさか全部覚えないといけないのか……?)

ちらつと優人の方を見ると、あいつは授業を聞かずに何か絵を描いてる。時々頷いては一ノ二ノ三ノ四してて。視点を少し右に動かし、隣の席の女子を見ると、いつちは山田先生の話に時々頷いてはノートを取りつている。

(ぐぬぬ……。しかしこのIIS学園に入るやつって事前学習しているつていうのは本当なんだな……)

IIS操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるための機関だ。そして入学試験でものすごい倍率を勝ち上がつて来た優等生もある。

(エリートには興味が無いが……うーん、このままではいかん。要勉強だ。今月きついけど、優人に飯を奢つて教えてもらおつ)

かなりの劣等感に頭をたれながら、俺はついてきぱきノートを取る女子を注視してしまつていた。

「な、なに?」

案の定、視線に気づいた女子が驚いたような緊張しているようなその上なにか期待しているよう、引きつった作り笑顔で聞いてきた。

「あ、いや。何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そう」

ホツとする様にノート記入に戻る女子。

「織斑くん、何かわからないところがありますか?

俺と女子のやり取りに山田先生が気づいてわざわざ話してってくれた。

「あ、えつと……」

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですか？」

（んー、先生なら分かりやすいよな。それにここで聞けば優人に飯を奢らずに済む…よし…）

俺は意を決して…

優人視点移行…

「先生！」

一夏が山田先生に言われ、質問する。

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた山田先生が返事をする。

「殆ど全部わかりません」

「ブツ…」

わ、わかつていたのに吹いてしまった…ククッ…

「え……。ぜ、全部ですか……？そ、それと氷川くん大丈夫ですか？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつり、僕に心配そうに声を掛けってきた。

「ブククッ……だ、大丈夫です……」

「そ、そうですか……え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないつていう人はどれくらいいますか?」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

「ですよねー、このぐらい常識の範疇だもん。」

教室の端で控えていた千冬さんが少し眉をピクつかせながら一夏に質問をする。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか?」

「古い電話帳と間違えて捨てました!」

いい笑顔で一夏が答える。そんな一夏にプレゼントされるのは…
スパン!

そう、出席簿アターック!

「必読と書いてあるあつただらうが馬鹿者」

あそこで、一夏が『殴ったね!？親父にも殴られたこと無いのに…』って言えば完璧なんだけどな~

「必読と書いてあつただらうが馬鹿者。……氷川、お前のはどうした?」

「あー、いい火種になりました!」

僕は少しパラパラと読んだ後、季節外れな焼き芋が食べたくなり、火種にした。そんな答えをすれば当たり前のように…

スパン！

僕が木刀を構えるより早く出席簿が飛んできた。ちくせう…防げなかつた…

「氷川は…まあいいか…織斑、後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間で「やれと言つて」いる…はい」

そんな怒涛の一時間目でした

第十話 セシリアに決闘申し込まれた…（前書き）

第十話です。

サバーニャを出すタイミングをどうするか迷つ今田の頃

第十話 セシリアに決闘申し込まれた…

「ちゅうど、 よりしくて?」

「く?」「え?」

一時間ほどの休み時間、僕と一夏が雑談をしてくると金髪で僅かにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出してくる。あー、セシリア・オルコットか。

「訊いてます。お返事は?」

「あ、ああ。訊いてるナビ……もうこの用件だ?」

「まあーなんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではないかしら?」

「……」

「…一夏、やつをのどに呑み込む回やつか」

「ね」

無視して一夏にHの基礎知識を叩き込む手伝いを再開…

「無視とせざるごとく」とドスのー?」

「あー、めんどくせーから?」

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない?」このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!?」

「あ、氷川センセー、質問でーす」

「はい、織斑くん」

「代表候補生って、何?」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がまたずつこけた。セシリ亞に關してはフルフル震えてる。携帯のバイブレーションみたいに。

「あ、あ、あ……」

「ん?『あ』?」

「あなたっ、本氣でおっしゃりますの!?.」

「おう。知らん!」

「誇らしげに言わないでよ。文字通り、国家代表Iの操縦者、その候補生として選出されるエリートだよ」

「そつーエリートなのですわ!」

「まあ、国の代表になつたわけでもないからそこまで威張れるよう

なもんじゃなによ

「ぐつ……」

おー、セシリ亞が苦虫を噛み潰したような顔してる。

「ほ、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラス。同じする」とだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか。それはラッキーだ」

「…馬鹿にしていますの?」

((む前が幸運だつて言つたんじやないか))

「大体、こちらの方は違いますが…」

そつ言つて僕を指差し、次に一夏に指差して口に言つた。

「あなたE.Sについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界で一人だけの男でE.Sを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるとかと思つていましたけど、期待はずれですわね」

「いや、一夏に期待してもね」

「優人…相変わらずお前酷いな…」

「E.Sのことわからぬことがあれば、まあ……泣いて頼まれた

ら教えて差し上げてもよくなつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試つて、あれか? I Sを動かして戦つてやつ?」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ? 僮も倒したぞ、教官」

「は……?」

「優人は千……織斑先生が相手だったからな~勝てなくともおかしく無いよな~」

「……勝てたら凄すぎるよ」

「勝つたのはわたくしだけと聞きましたが? しかもあなたはあの『ブリュンヒルデ』の織斑先生と?」

「勝つたって話は女子だけつてオチじゃないのか? あと、優人の話は織斑先生や、山田先生に聞けば本当だつてわかるよ」

「つまり、勝つたのはわたくしだけでないと……?」

「「いや、知らないけど」」

あ、ハモつた

「あなた! あなたも教官を倒したつていうのー?」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!?.たぶんつてどうこつ意味かしらー?」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「い、これが落ち着いていられー」

キーンローンカーンローン。

三時間目の開始のチャイムだ。

今の僕らはとつて福音に聞こえる。

「ひ……一またあとで来ますわー逃げなーことねーよくつてー?」

ええ…めんどくせ…言つたら怒るだから言わないけど。あ、三時間目は千冬さんが授業をするのか。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。ああ、その前に再来週行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

代表者か…原作だと珍しいからって一夏が推薦されてたな…僕も推薦されるのだろうか…でも、そうなるとセシリ亞が決闘挑んでくるんだつけ?そんな事を考えているうちで千冬さんがクラス代表者についての説明を終えていて…

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

つと原作通り

「じゃあ、私は氷川くんを！」

「……前世で読んでいた一次創作のHSの主人公と同じ展開を味わうとは……」

「では候補者は織斑一夏と氷川優人……他にはいか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

一夏が驚いて立ち上がった。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないならここに一つで決めてしまつた」

「ちよつ、ちよつと待つた俺はそんなのやらな」「自薦他薦は問わない」と言った。他薦されたものに拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ。氷川の様にな」……

僕は面倒事にならないように黙つてるだけだけど……

「い、いやでもー」

「待つてください！納得がいきませんわ！」

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしにて、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「あ？ だつたらさつさと立候補しなよ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされでは困ります！わたくしはこのような島国までIFS技術の修練に来てるのであつて、サーパスをする気は毛頭ございませんわ！」

あーはいはいそうですかー。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛でー「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」なつ……！？」

おーー夏ーよく言つた！

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

はあ？流石に黙つてられん。

「先に侮辱したの、そつちでしょ？人様の国を散々侮辱しておいて自分の国を侮辱されると怒るつて大した御身分な事だねえ？」

「くつ……ーわかりましたおー一方、決闘ですわ！」

ええ…

「おう。いいぜ。四の五の言つよりわかりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

「いえ、奴隸にしますわよ

「侮るなよ。俺と優人は真剣勝負で手を抜くほど腐つじゃいない」

「そう?何にせよちよどいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね」

あつるーー?僕の意思に關係無く話が進んでるけどまあいいか。つか、セシリアって自己紹介が多いな。まあ、原作ブレイク開始だな。あのセリフを僕が言おう。

「勝負するにあたって、ハンデはどの位つける?」

「あら、早速お願ひ事かしり?」

「いや、僕がハンデをどの位つけようか言つてるんだけど?」

クラスからドツと爆笑が巻き起つた。

「日本の殿方はジョークセンスがありますのね」

「氷川くん、それ本気で言つてんの?男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

「うん、僕は本気だよ。だって僕もIISの開発者だし」

笑いが止まり、全員が固まる。

「あ、あなたがIISを作つた?」

「正確には篠ノ之東博士が基礎理論やら何やらで、僕が武装とシステム構築とかだけど」

「ええええええええええ！」

「うるさい…って、当たり前か。こんな事聞いたら驚くのは無理もない。待つ、待つて！？篠ノ之博士って篠ノ之さんと何か関係があるの！？」

咄嗟にそんな声が聞こえた。そんな質問に千冬さんが冷静に答える

「そうだ。篠ノ之は篠ノ之博士の妹だ」

またクラスがざわつく。

「ええええーー！す、すごいーー」のクラス有名人の身内がふたりと有名人がひとりいるの！？

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やつぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ

クラスの女子達が篠に質問攻め。僕の方にも来てるが軽く流してい
る。

「あの人は関係ない！」

突然大声をあげる篠。

「……大声を出しません。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言つて窓に顔を向ける篠。まあ、あの人と比べられるのは嫌だもんな。

「おい、盛り上がるのはいいがクラス代表決定戦は一週間後に行う。三人共、いいな？」

「「「はい」」」

「ところでオルコットさん？ ハンティはどうする？』

「い、入りませんわ！ そんなもの！」

「ふーん…

そんな事があつた三時間目も終了。

以後、昼に僕と一夏が昼食を食べに行く際にモーゼの海割りが起つた事以外普通に終了し、放課後に。

僕と一夏は教室に残り、山田先生を待っていた。用件は部屋割りについてだ。

「お待たせしました。お一人の部屋何ですか…

「どうしたんですか？」

「相部屋があれば良かつたのですが…都合が悪く、どちらかが女子

と同じ部屋になってしまつんです……」

「「えつ」」

「そこでお一人が相談し合つて、どちらが女子と相部屋になるか決めて下さい。あ、もちろん、女子と相部屋にならなかつた方は一人部屋がご用意させて頂いてありますので」

「…一夏」

「…優人」

二人で睨み合い…

「「勝負だ！！」」

一人で叫んで…

「「最初はグー！…ジャンケン…ポン！！」」

僕がパー、一夏がグーで僕の勝ち！

「よし…」

「む、無念…」

「山田先生！僕が一人部屋で！」

山田先生は僕のテンションに驚いくがすぐに鍵を渡してくれた。

「は、はい。これが織斑くんの1025室の鍵で、これが氷川くんの1026室の鍵です。それぞれの荷物は後で届くと思いますので」

「「はい」」

「あ、大浴場は男子は使えないのに気をつけないと…」

「え、なんですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「どこから出て来たんだ… 千冬さん…

「あー……」

「一夏、やつらの事はもうと奢えてから言おう」

「おひ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですけど、ダメですよー！」

「いや、入りたくないです」

「ええつ？女子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のよつな……」

「一夏、山田先生が暴走してくる。やつらと寮に行こう」

「あ、ああ……」

「ふ、ふたりとも…寄り道はダメですよー。」

教室を出て行く僕達に叫びてくる。寮まで50㍍ほどだから寄り道のしようがないが…

「それじゃ、一夏。また後で」

「おう、夕食の時にな」

一夏は隣の部屋だった。原作通りなら篠が一緒に部屋だな。

「しかし、この部屋、本当に高級ホテルそのものだな。高級な設備ばかりだし」

料理器具からパソコン、シャワールーム、ベッドなどすべてが高級品だ。特に料理器具なんか、どつかの料理亭で使われてるだろ。

ドタドタッ…！

隣が騒がしい…一夏と篠だな。原作でも喧嘩してたし、あれは理不尽だな…

まあ、そんなことは気にせず、僕はパソコンを起動し、P.Fのサバーニヤのシステムを起動する。今回やろうとしている事はビット系統の操作を行うAIの作成だ。流石に僕も28機ものビットを同時に扱うのは無理なので、原作と同じようにハロのよつなAIにビットの操作を手伝ってもらおうと考えている。あ、そういう僕ってイノベーターなのか。そうか、だから千冬さんと互角に戦えたのか！

すっかり自分がイノベーターだと忘れていた！まあ、いいや。今はA-Iの作成に集中だ。その後、休憩のような形で一夏と夕食を取り、一日を終えた。

次の日の授業では一夏に専用機があると言つ事が告げられた。やつたね、一夏！その日の毎。

「なあ、優人。篠誘つて飯行こうぜ！」

「わかった。じゃあ、先に行つて席を取つておくよ」

「頼む！」

そう言つて篠のところへ行く一夏。僕は先に席を取つて待つていると、少し一夏がボロボロだった。

「一夏、どうして少しだけボロボロなの？」

「ん、あー何でもない」

「…篠がやつたのか

「…何故そつう思つ？」

「一夏だから」

「なるほどな…」

「何の話だよ…それより、優人！俺にエリのことを教えてくれ！」

「嫌だ」

「即答かよ！」

「あ、でも、操縦は教えないけど基礎知識なら教えるよ」

「それだけでもいい、サンキュー…なら篠！お前が操縦の「一チを頼む！」

「ぐだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「そこ」を何とか！」

篠は無視してほうれん草のおひたしを食べてる。すじいスルースキルだ。そんなところに先輩が来た。

「ねえ。君たちって噂の口でしょ？」

「はあ、たぶん」

「私が工Sの事、教えてあげようか？」

「それはゼー」「結構です。私と優人が教える事になつていていますのでえ？」

篠が大胆な行動にてたなー原作通りだけぞ。

「でも、あなたたち一年生でしょ？私は三年生だからあなたようつまく説明出来るよ？」

「心配には及びません。私は篠ノ之介の妹ですから」

「篠ノ之介まさか…?ええつ…なら仕方ないわね…」

先輩は立ち去つて行く。一夏はどうあっても渡したくないか…僕は昼食のラーメンをスープまで綺麗に飲み干した。

「それじゃ、ふたりとも。練習頑張つて。僕も頑張るから」

「あ、ああ。篠、本当に教えてくれるのか?」

「放課後、剣道場に来い」

「え、でも俺はEVAの事を…」

「いいな!?」

「あ、ああ…」

「(篠、折角ふたりつきになれるチャンスなんだから頑張れよ。
その様子だとあの時告白出来てないみたいだし)」

「う、うむ…」

僕は篠に少しアドバイスをしてその場を立ち去る。

そして、一週間がたつた…

第十一話 セシリア・オルゴットの後悔や懺悔もない-(前書き)

第十一話です。

お気に入り登録件数は増えているのに評価が上がらない：

文才が欲しい…

第十一話 セシリア・オルゴットに後悔の匂いも聞えない！

クラス代表決定戦当日

「で？剣道の練習ばつかで HIS の操縦を教えてもらえたなかつたって？」

「おう。幕ばはずっと剣道ばつかだつたんだ」

「し、仕方ないだろ。お前があんなに腕が鈍つていいとは思わなかつたんだ。何よりお前の HIS は届いて無いじゃないか」

「うう……」

そつ言われると確かに一夏の HIS はまだ届かない。原作通り白式が来るらしいのだが、やはり遅れて届くらしい。

「お、織斑くん！織斑くん！来ました、織斑くんの専用 HIS ！」

一夏視点移行…

山田先生の声が聞こえた後、後ろのハッチが開いた。

——そこへ、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほど純白を纏つた HIS が、その装甲を解放して操縦者を待つていた。

「これが……」

「はー！織斑くんの専用HIS『白鷺』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。氷川が戦っているつむぎフォーマットとファイティングをやれ。できなければ負けるだけだ。わかつたな」

「一夏、三十分稼ぐよ。それでフォーマットとファイティングを済ませてオルコットさんの弱点を見極めるんだ」

「ああー！」

そして俺は純白のHISに触れる。

「あれ……？」

試験の時に感じたあの電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。——わかる。ムが最適化する

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステム

そして俺は白式を装着した

優人視点移行

「へえ……武装は近接ブレード一式」

「マジかよー！」

「おー、氷川。アリーナを使う時間は限られてくる。もつまと行け

「了解です」

そう言つてプレイヴハーツを起動する僕。

「優人…」

「何? 篇」

「勝つてこいー!」

「うん!」

そしてカタパルトから射出された。

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコットさんはまた腰に手を当てたポーズで待っていたようだ。

「君如きに逃げる僕じゃなによ」

そつ言いながら腰の2丁拳銃を手に持つ。

「ぐつ…言つてくれますわね!」

ハイパー・センサーに『警戒、敵I.S操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認』と映しだされる。

「それなら…」

『警告！敵 I.S 射撃体制に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填』

「お別れですわね！」

キューイング！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が向かってくる。が、僕はそれを軽々と避ける。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルーティアーズが奏でる田舞曲で！」^{ワルツ}

「悪いけど、僕は踊りが苦手なんだよね！」

一夏視点移行…

「すげえ…これが…I.S…」

モニターの向こうに映る優人とオルコットの試合は一見、オルコットの方が押してるように見える。

「一見、オルコットの方が押しているように見えるが、あれは完璧に氷川のリズムに乗せられている」

やつぱりか。千冬姉が言つんだ、間違いない。

「確かに…オルコットさんは攻撃をし続けていますけど、氷川くんは攻撃せずにしかも一撃も当たらずに避け続けていますね」

「織斑、さつあとフォーマットを終わらせろ」

「は、はい！」

優人視点移行：

おお、焦つてる焦つてる。僕の方から一切攻撃せずに避け続けて相手を焦らせ、相手の切り札を出させる。と、同時に一夏のフォーマットとフィットティングの時間を稼ぐ。まあ、予備知識があるからブルーティアーズの切り札はわかつていいんだが。そういうしてみると二十分が経とうとしていた。

「ああん…ひょこまかとうとおしいですわねー！」

「おや？ もう終わりかい？」

「いわゆるそこですわー！ わかりました… 閉幕^{フイナーレ}と参りましょう」

そう言つと非固定武装^{アンロックユニット}の四つのフイン・アーマーが一気に離れ、こちらに飛んでくる。

「へえ…」

そしてその四つのフインの先端が光るところからビームが飛んでくる。僕はそんなものを気にせずにおルコットに瞬時^{イグニッシュンブースト}で加速で突っ込んで行く。そして、オルコットの肩を掴みながら押して行く。

「なあー？」

「」の兵器は君が指示してるのは君自身が動けないみたいだね。逆の場合もそうだ

「ぐつ……」

図星…といつよりわかつてたけど。そのまま僕はオルコットさんを地面に衝突させる。

「ぐう！」

僕はオルコットさんから離れ、上昇し、動かなくなっているブルーティアーズを四つすべて落とした。

「さあ、これで君を守るものは無くなつた。そろそろ終わらせようか？」

「まだですわ！」

へえ…やつぱり勝つことに執着があるのか。僕はケルベロスショットを閉まって、エクスカリバーを抜く。そのまま何時の間にか上昇していくオルコットさんに突っ込んで行く。

「残念ですわね！」

オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。そこからミサイルが二機発射された。

「どうかな！」

僕は横一閃し、ミサイル一機を同時に切り裂く。そしてそのままオルコット通り過ぎながら切り裂き、納刀した。

『試合終了。勝者、氷川優人』

ふう……終わった……つてえ……？ オルコットさんがIRSの展開解除されて落ち始めていた。僕はそれを急いで助けに行く。

(くつそお……間に合ひえ……ーーー)

何とかオルコットさんを抱きとめた。だがしかし、その抱きとめた形がいけなかつた。そう、お姫様抱っこだつたのだ。周りから黄色い歓声があがる。

「あー、えつと… オルコットさん、大丈夫？」

「う、ん… あれ… 何故わたくし… あなたに抱きとめ… ーーー」

途端に顔が赤くなるオルコットさん。

「あ、あの… ー そろそろ降りして下せこまし…」

「あ、ああごめん…」

そのままオルコットさんのピットに行き、オルコットさんを降ろす。

「あの！ 何故… わたくしを助けましたの… ？ あなたをあんなにも軽蔑したのに…」

「つーん、誰かを助けるのに理由がいるかな？ それに目の前で誰かが死ぬのは後味悪いし」

しまつた… FF9のジタンの物真似だ…

「そ、そりですか…あつがといわれこまか…」

それだけ聞くと僕は自分のベッドに戻った。

「すごいなー優人ーきつかり三十分だー」

「そうじゃないでしょー! フォーマットとファイティングを終わらせたの?」

「フォーマットは終わったけど、ファイティングがまだ…」

「はあ…もうひとつ本番でものにしなくちゃいけないじゃないか

「ぶつつか本番でものこしてやるぞー。」

「そうか、僕の戦い見てたらオルコットさんの弱点分かるよね?
?」

「おうーあの遠隔操作の武器は自分と同時に動かせないんだり?」

「うん答。なら勝つでこー。」

「おうー。」

そのまま、一夏はベッドから出て行つた。

セシリ亞視点移行…

「あのお方…」

優人が居なくなつた後、ブルーティアーズの予備パートを呼び出し、次の試合の準備をするセシリアだが、殆ど上の空である。

(氷川…優人…)

あの男子のことを思い出す。あの瞳に宿つてゐる強い意志を。他者に媚びることのない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

(父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……)

名家に婿入りした父。母には引け目を感じていただろう。幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいられなかつた。

そして、ISが発表されてから父の態度は益々弱いものになつた。

母は強い人だつた。女尊男卑社会以前から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めたセシリアにとつて憧れの人だつた。

だがしかし、そんな両親はもういない。三年前に事故で他界した。莫大な遺産を残して…

そしてその残つた莫大な遺産を守る為にあらゆる勉強をし、その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。両親の遺産を守る為、即断し、ブルーティアーズの稼働データと戦闘経験値を得るために日本にやってきた。そして出会つてしまつた。氷川優人と。理想の、強い瞳をした男と。

気がつくとブルーティアーズの整備を終えていた。

「氷川…優人…」

思わずその人の名前を出してしまった。

「オルコットさん…オルコットさん…急いで下せ…もう時間が無いんです！」

そんな事を考えていると既に時間が押してしまつていいやつだった。

「す、すみません！」

そのままブルーティアーズを装着し、ピットから出でていった。

その後、セシリアと一夏の試合は原作以上に善戦した一夏だったが、单一仕様能力の零落白夜の特性を理解せず、一夏の自爆に近い形で幕を閉じた。

第十一話 セシリア・オルゴットに後悔する聞も『えない』（後書き）

一夏対セシリア戦をキンクリして申し訳ない…

優人対セシリア戦ですらうまく書けてる自信がないのに… 一夏対セシリア戦は自分なりに上手く書けなかつたので消しました…

9/24 優人対セシリア戦を少し修正をくわえました。

第十一話 代表者は一夏で俺は宇宙人（前書き）

まよチキ、昨日で実質最終回でしたね。原作もクライマックスに近づいて来てるし… IISの最新刊、でないかな…

では、十一話をどうぞ。

第十一話 代表者は一夏で俺は宇宙に

一夏視点移行：

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

女子達は盛り上がっているが俺は納得出来なかつた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「何故俺は昨日負けた上に優人と戦つていなのにクラス代表になつているんでしょうか？ていうか優人居ないし」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。様になつてゐる…
はもういいや。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。何せわたくしセシリ亞・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒つたことを反省しまして」

しまして?

「“一夏さん”か“優人さん”にクラス代表を譲ることになりましたわ

「へえ～ってじゃあ尚更俺と優人は戦わなくちゃならないんじゃ?」

「氷川くんなんですけど…今日から暫く休むから伝言をと…」

「伝言?暫く休む?」

「はい…なんでも急ぎの用があるらしく、今朝出て行きました…それで伝言なんですけど読みますね」

山田先生が紙を広げ、読み始める

「ゴホン」親友の一夏へ。僕は暫くここを離れる。だからクラス代表決定戦は君の不戦勝という事で頼む。といつわけでクラス代表の件は任せた!コーチに織斑先生に任せておいたから心配無いよ。じや!P・S・問題です。この伝言が読まれている時、僕は何処にいるでしょうか?答えは山田先生が知っています』…以上です』

「えーっと、山田先生…優人は何処に?」

「それが…そ、その…う、宇宙だそうです…」

『は?

クラス全体がそんな声を出す。

『ええええええええ！？』

「み、みなさん、静かにしてください！」

それでも騒ぎが收まらず、最終的に千冬姉が止める形になった。

その後、セシリアと篠が喧嘩しかけたが、セシリアの一言でその場は収まった。何言つたんだろ？

ていうか、成り行きでクラス代表かよ…

優人視点移行：

僕が今いるのは宇宙…PFのクアンタを起動し、量子ワープしてきた。目的地は月。神様の言うパート置き場を田指している。暫く飛び続けていると月が見えた。

月に近づくとクアンタのハイパー・センサーが何かに反応した。そして、月のある座標を示し始めた。僕がそこに向かうとクレーターでカモフラージュにしたハッチが開き、そこに入ると酸素があつた。そこはあるで のムーンレイスのような場所だった。一旦緑の多い場所で休憩をする。食糧は一応一ヶ月分。IS装備状態でも食べられるようにゼリー状のものもある。休憩を終え、暫く歩き続けるとある建物の中に巨大な端末と巨大な力プセルがあった。その端末を起動すると、僕の求めるパートすべてがあつた。でも、流石にティンプラー・シリンドーやディス・レヴとかは無かつたけど…

とりあえず、僕はゾル・オリハルコニウムとTEエンジン、S?Iパートと言うものを取り出した。そうするとカプセルの中にパートが出来上がった。どうやらTEエンジンとセットで取り出すよう推

選されていたS?I?というのはサーベラス・イグナイトのパートのようだ。とりあえず僕は数日かけてゾル・オリハルコニウム製のファンクスラッシュャーを作り上げた。そろそろEIS学園に提出した休暇届の期限のはず…僕はTEエンジンとサーベラス・イグナイトのパートを量子変換させておいた。と同時にプレイヴハーツに新しいファンクスラッシュャーをインストールした。

あ、そういうや鳳鈴音が転校していくんだっけ？で、次に…あれ？誰がくるんだ？確かに金髪の…あ、あれ？フランスで会った子…そうだ！シャルロットだ…で、後…銀髪の…思い出せない…原作の知識が段々抜けていつてる…まさか、これが神様の言っていたバグ…？今は深く考えない方がいいか…

僕はクアンタを起動し、量子ワープをした。

目の前にはEIS学園。だが、様子がおかしい…第二アリーナだ！僕はクアンタのままその場へ向かった。

アリーナの真上に着くと一夏と鈴が無人ISと戦っていた。ちくしょう…なんで忘れてたんだ…まあ、いいか、束さんの作ったやつだし。だけど、友達は見捨てないさ！

僕はGNコード?をライフルモードにして、高濃度圧縮粒子のビームを遮断シールドへ向けて放った。

一夏視点移行…

くつそ！何なんだこいつ…いきなり試合の邪魔してきたと思つたら攻撃してきやがって…！上空からまた粒子ビーム！？

「鈴！ 気を付けろ！ また上から何かくる！」

「ちよつ…嘘…！？」

だが、しかしその粒子ビームは俺と鈴を射抜く事はなく謎のI.Sに降り注いだ。が、謎のI.Sはそれを回避した。

そして、遮断シールドの壊れた部分からもう一機の全身装甲のI.Sが入ってきた。その機体は青と白を基調とし、左肩には大きな盾がある。そして、緑色の粒子を放出していた。

「新手！？」

だが、俺達の盾になるように立っている。

「いや、あれは…多分、味方だ！」

突然、あのI.Sから一人に通信が来た。

「そこのはー下がれ！ 後は俺がやるー！」

男の声だけど、優人じや…ない！？

千冬視点移行…

(何だあのI.Sは…?)

突然、謎のI.Sが学園に侵入したと思ったらまた新たなI.Sが乱入してきたのだ。驚くのは無理もない。

「お、織斑先生……」

「どうした？」

山田先生が妙に慌てている。確かに慌てる事態だが……

「あのもう一機のIISが入ってきてから、センサー、及びその他の機械が障害を起こしています！」

「何だと……？」

……真耶の言つとおりだ……センサーにはあのIISだけ反応していない上センサーが機能していないし、モニターには激しいノイズが入つてこる……どう言つ事だ……

優人視点移行……

ふふ……一夏が驚いてる……さてと、いっちょやりますか！

僕はGNソード？のライフルで無人IISを牽制する。

そのままソードビットを開く。

「……」

無人IISはビームでソードビットと僕を落とすとするけど、当たりはしない。そのまま近づいて行き、GNソード？をライフルモードからソードモードに戻して斬りつける。そのままソードビットをGNソード？と合体させてバスターソードで無人IISを斬りつける^{ワンオフアビリティ}がギリギリで躲された。が、僕は手を休めずクアンタの单一仕様能

力、トランザムを発動。

無人ISが止まったところにそのままライザーソードを叩き込む。決着はついた。トランザムを解除して着陸した。すると、教員組のISに取り囲まれた。

「そこのはう。動くな」

僕は黙つて従う。

「ISを解除しろ」

解除すると教員組とその場に居た一夏が驚いていた。

「ゆ、優人！？」

「やあ、帰つてきたよ」

その後、事情聴取をされたが、少しで済んだ。あの証明証のお陰ですね。

その後、千冬さんに連れられ、地下へと連れていかれた。

そこは薄暗く、僕が粉々にした無人ISがあつた。

「よくもまあ、こんなになるまでやつてくれたものだ…」

「す、すみません…」

「中に入がいたらどうするつもりだったんだ？」

「それは中に入居ないと確信していましたから」

「何?」

「僕が使っていたあのＩＳ、クアンタは人々の意識を拡張させる機能があるんです。その機能を低出力ながら使用してみたらあのＩＳからは人の意思が感じ取られなかつたので無人だと確信していました」

クアントムシステム積んでおいてよかつた…実際、使ってないが…

「ほり…」

「織斑先生、あのＩＳの解析結果が出ました」

「どうだつた?」

「氷川くんの言つとおり無人機でした。機能中枢はもはや影も形もありませんでした…」

「コアは?」

「破片から解析したんですが、登録されていないコアでした」

「さうか」

「何か、心当たりが?」

「いや、ない。今はまだーーな

その時の織斑先生の顔は何か思い詰めたような顔だった。

第十一話 代表者は一夏で俺は宇宙だ（後書き）

「意見、ご感想お待ちしています。」

閑話 優人の趣味、洗脳される一夏（前書き）

一部、本編と後に関係します。

完璧に作者の趣味回です。

あ、キヤラ崩壊注意です。

正直な話、最後の部分をやりたかつただけかもしけない…

閑話 優人の趣味、洗脳される一夏

「ククク…遂に…遂に届いた！某密林からまよチキ、はがないのラノベとけいおん！とその他諸々のBD全巻が！」

僕は一人部屋で絶叫していた。折角の日曜日だと叫びのに外にも出ず…

コンコン…

「誰だあ！？」

「うあ！優人…だよな…？一夏だ

「何だ…一夏か…入れ」

「お邪魔しまー…つて！？何だこの段ボールの山！」

「これは、通販で頼んだものだ！」

「へえ…つて、アニメばかりじゃんか」

「で？用件は？」

「そうだった。あのクラス対抗戦の時に使つてたIS何なのか聞きたくてな」

「ああ、あれか。あれは秘密だ」

「何だよ…」

「やつだ、お前は今日何か予定はあるか?」

「ん?無いが?」

「ならば、僕とナニおんーのBロを制覇しきりではないか…異論は認めん…。」

「はあ…わかつたよ…お前がそれと絶対だかんな…」

やつ、一夏達と一緒にいた時には僕が異論は認めんとこいつと強制的に一夏を拘束していたのだ。

では早速、テレビCMを接続してと…

「第一期からだからな…」

現時刻、10時である。

途中、昼食を取り、第一期視聴終了。

現時刻、18時。

「わああああ…澪やあああん…」

「やつが…一夏は澪スキーになつたのか…」

「澪だけじゃなくてみんな好きだけど…今は…澪が一番気になるんだ…」

「フ…流石澪だな…だが、僕は唯が一番だあ…」

「優人！早く一期を…！」

「ああ、だが、その前に…これを忘れるな！」

「…」
「これは…？」

「セウ…ライブBD…レッジゴー…だ…！」

「つおおおお…行きたかつたあああ…」

「だが、今は夕食の時間だ…夕食を取つてから元気よ。だが、一
夏、ライブBDを見る上で注意すべきことば？」

「うーん、サイリコウムの準備か？」

「それは用意済みだ。ちゃんと全員分。だが、それ以上に大事な事
がある」

「そうか、わかつたぞ…予習だ…！」

「その通り…！」にウォークマンがある。之中に一期のキャラ
ソンを含む全曲が入つている。食事中、これを聴きながら食べるん
だ！」

「行儀が悪いが…やるしかないな…」

「ああ、では行くぞ…」

その後、食堂でイヤホンを着けながら僕と一夏は食事を取った。途中、一夏が鈴に呼び止められたが何とか説得し、部屋に戻れた。

「つまつまおー・ムギーいーーー！」

「ああ…ムギのキャラソンは最高だ…」

「つまちやあああん…！」

「流石元気いっぽいみんなのアイドルつまちやんで…」

視聴終了…

「ああ…」こんな事なら弾も居りやよかつたのにな…」

「弾? 誰なのその人」

「ん? ああ、俺が中学ん時の知り合い。そいつもけいおんが好きでさ、よくけいおん見ろって言われてたんだが、見てなかつた…クソッ不覚だぜ…」

「過ちを気に病むことはない。ただ認めて、次の糧とすればいい。それが大人の特権だ」

「そのセリフは?」

「ガンダムUCのフル・フロンタルのセリフだ。丁度いい、流石にもうけいおんの一期を見るには時間が時間がだからな、ガンダムUCを見よう」

「でも、それって前の作品見ておいたほうが楽しめるってお前が…」

「見ていないくとも楽しめるのがユーローナだ、今のところpart 3まで出てるからな」

「ああ…」

視聴開始…

『父さん…母さん、『めん…俺は…行くよ…』』

「ゆ、ユーローンが動く…」

『ユーローから鳥肌ものだ…』

『ユーローから…ユーローから出ていカーニ…』

「バナージかつけええ！」

「ああ…」

『落とせるつー…』

「バナージ、危ない！って何だこれ！？」

「N-T-D、ニコータイプドライブって言つたんだけど、実際はニコータイプデストロイヤーって言つてニコータイプだけを駆逐するシステムだ」

「へえ…で、その『ユータイプ』はこのマリーダなのか?」「

「いや、マリーダさんは強化人間でバナージが『ユータイプ』

「そうなのか…」

「さて、part2だ

視聴開始…

『強制解除! ! !』

「ここかつこいいな!」

「だろ?」

『すごい…』

「何だこれ…すごい威力じゃないか!」

「ビームマグナム、従来のビームライフル四発分だったかな? そんなぐらいの威力が一発に込められているんだ」

「へえ…」

『今度は…ここが戦場になるのか…?』

「うはあああーやべえええー続き気になるーあ、そういうや、思ったんだけどセシリアのビットとあの四枚羽のクシャトリアだけ? あれのファンネル似てるよな」

「そうだな。似てるといえば一夏の声とバナージの声似てるよな」
まあ中の人と一緒にだけだけど。

「そうか？じゃあモノマネしてみる。リクエストは？」

「そうだな…フル・フロンタル戦の餉迫り合いのシーンのモノマネ
で。僕がこの変声機でフル・フロンタルをやるよ」

「わかった」

「じゃあ行くよ？んん、『また敵となるか！ガンダムー』」

「んん、『下がれよ！下がつてくれないとオーデリーが！』」

「やつぱり似てるー！」

「言われてみるとそうだな…そつか…俺とバナージは一緒になのかな…」

すると突然ドアが開いた。

「お前、うつむかって、就寝時間はとっくにすぎているんだ」

「げえ、千冬姉！」

「織斑先生と呼べ馬鹿者…む？ガンダムじじだと？」

「え、千冬…じゃなくて織斑先生も知ってるんですか？」

「ああ、まあな山田先生と一緒に一度見たことがある

「へ？ 何で？」

「とあることでチケットを貰つてな、それで見たんだ」

「チケット？ 優人、何でチケットなんだ？」

「それは劇場で先行上映してたりするからね、でもチケットがあるのは知らなかつたな」

「へえ……あ、そういうや織斑先生の声ついでヒロさんの声に似てない！？」

「言われてみれば……」

「なつ！ お前達までそんな事を……」

「お前『達』？ 山田先生にも言われたんですか？」

「それ以上言つたなーええい、今回の件は不問にしてやるから、さつりと寝るー。」

バタンッ

何故か千冬さんは勢いよくドアを閉めて出ていった。

「とりあえず、注意されたし今日はお開きだな」

「うん、もうじよつか」

「じゃ、また明日な優人！」

「うん、また明日」

次の日から僕と一夏はけいおんとコニークーンの話で持ちきりだった。それから一週間ぐらいいして、一夏が篠の声が澪に似てるって言ってこんな事件が…

「なあ、篠。『痛い話はダメなんだ』って弱弱しい声で言つてみてくれないか？」

「…何故だ？」

「頼む！ 篠にしか頼めないんだ！」

「そ、そこまで言つなら…」

顔赤くしてる…

「んん…『い、痛い話はダメなんだ』」

「うおおおお！ 篠イイイイ！」「ガバッ！

「うおー篠に抱きついた！

「な、な、な、な、何をする一夏…！」「ドンッ！

あ、突き飛ばされた。そして机の角に頭が…

「お、俺の生涯…一戻の悔い無し…」ガクッ…

「「一夏アアアア！」」

その時、クラス中騒然とした。

一夏…こゝりなんでも悔い無しはねえよ…

その後、保健室に運ばれた一夏だったが、一夏の命に別状はなかつたが、その時の記憶が吹き飛んでた。

閑話 優人の趣味、洗脳される一夏（後書き）

本編の次の回は遂にあの二人が登場です。

第十三話　冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスっておかしいよね（前編）

第十三話です。

更新遅れてすみません…

第十二話 冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスつておかしいよね

そう、あれはクラス対抗戦から数日経ったある日の夜のことだった
…隣からドタバタと音がした後、篠の愛の告白が聞こえたのだ。

「ら、来月行われる学年別トーナメントだが、わ、私が優勝したら
つ、付き合つてもらう!」

よく言ったー篠!でもあの朴念仁の一夏だからな…ダメかな…

取り敢えず今日は作業をやめて寝るか…え?なんの作業かつて?そ
りや、P.Fの専用パッケージ、サーベラス・イグナイトの組み立て
だよ。でも、あんまりうまく行かないんだよな…今度どこの研究
室借りるか?

次の日。

「んんーー今日もいい朝だ

「お、優人~」

朝食を取るために食堂に向かう途中、声を掛けられる。ふりかえると
そこにいたのは一夏だった。

「お、一夏。おはよ

「ああ、おはよ~」

「と、ついで昨日何があったの?ドタバタしてたけど

「ん？まあ、色々あつてな簿と部屋が別れたんだ」

「へえ～でも何で？」

「何でも今度来る転校生が男らしい。で、山田先生が俺に『気を配つてその転校生と俺が相部屋になるそつなんだ』

「成る程。」の時期に転校生つて事は恐らく代表候補生だな

「何でだ？」

「いらっしゃんでも不自然過ぎる時期だ。恐らく国としては特異ケースの僕達と接觸をしてこのデータを取るためにだろう

「成る程な……」

「だから、あんまり一夏や僕の一人の事をペラペラとしゃべらないよつこ」

「おつ

その後、僕達は朝食を取り、教室に向かうとクラスが騒々しかった。

「その話本題一へ。」

「あ、鈴の声だ。あこつなにせきてんだ？」

「わあ？」

因みに僕は鈴とはクラス対抗戦の時位にしか話したことがない。

「よお！みんな何の話してるんだ？」

「あ、織斑くんと氷川くんあの噂つて本…むぐう！？」

「む？噂だと？」

「い、いや何でもないのよ。あははは……」

「――バカ！秘密つて言つたでしょうが！」

「いや、でも本人達だし……」

「ねえ、噂つて何？」

僕が一夏より早く質問する。

「う、うんー？なんのことかなー？」

「ひ、人の噂も365日つて言つよね！」

「な、なにいつてるのよ!!」私は一四十九口だつてばー！」

ソレチガーウ……

「何か隠していないか？」

「そんなことつ」

「あるわけつ」

「ないよーー?」

謎の連携を決めてから即撤退。この間わずかに一秒。しかも、何時の間にか鈴がいなくなっている。さすがの僕達も状況が全く飲み込めずにはかんとするしかない。

「と、取り敢えず席に着こうか、一夏」

「そ、そうだな」

それぞれの席に荷物を置いて僕は一夏の机のところに行く。

「あ、今日の訓練なんだけど僕も試したい事があるから第六アリーナに行ってくれる?そこで回避訓練も行うから」

僕が宇宙から帰つて来てからは一夏の訓練を筆、セシリア、僕、鈴の順でローテーションを組んで教えてくる。おかげで負担が減つて助かるばかりだ。正直、セシリアに一夏の練習に付き合つてとお願ひした時、一つ返事で了承を貰えたのは驚いた。まあ、僕が彼女の訓練に付き合うという条件付きだが…どういうことだろう…一夏が好きだから了承したと思ったのだが…どうやらそうではないみたいだ。もしかして僕が開発者だから訓練を見てもらえば強くなれるって踏んだのか?それとも、まさかとは思うが僕に好意を抱いているとか?いや、ないな。勘違いにも程がある。

「おう、いいぜ。でも、回避訓練つて前みたいにお前が俺を追い掛けて撃つてくるのを俺が逃げながら避ける訓練か?」

「んー、ここの前は結構反応出来てたからね、今回は一対多を想定した回避訓練だよ」

「へえー」

キーンゴーンカーンゴーン

一時間目の予鈴だ。僕は急いで席に着く。

「みなさん、おはよー！」ぞーます。今日はなんと転校生を紹介します！しかも一一名です！」

転校生か…シャルロッテと…ドイツの人気がだつたな。やばい、ここから先の原作知識が消えてる。他の前世での記憶はあるのに。

「え……」

「　「　「えええええつー！？」」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。それもそうだ。この三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網を搖い潜つていきなり転校生が現れたんだから驚きもする。しかもふたり。

(普通分散させるとこるだけど、特異ケースの僕達に接触するためにここのクラスに無理矢理でも来たか)

そんな推理をしていると教室のドアが開いて、一番起きて欲しくない事態が起きた。

「失礼します」

「…………」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

それもそうだ。

だつて、そのうちのひとりが——男子だつたんだから。

しかも、僕は他の意味で唖然していた。その男子に見覚えがあつたからだ。それは、フランスに居た時に出会つたあのシャルロットという女の子にとても似ていた。僕のあの時偶然会つた子とこんな形で再会する……いや、まだあのシャルロットと決まつた訳じゃない。多分大丈夫だ……

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。あつけをとられたのは僕と一夏以外のクラス全員だった。

「お、男……？」

誰かがつぶやく。

「はい。じつに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

——

僕はこの状況から推理して数秒後にソニックウェーブがくると考え、耳栓を差し込んで一夏にアイコンタクトを送るがボーッとしてこちらのアイコンタクトに気付かなかつた。

「ハラフ」

「はい？」

「アキラ君の手筋は、もう一回見たい。」

一夏がめりやくわや辛そうな顔をしてくる。

— 1 —

クラス中の女子がシャルルの感想を述べているようだが、何を言つてゐるのか耳栓を付けている僕には全く聞こえない。

織斑先生の行動から騒ぎは収まつたとわかり、耳栓を外す。入学初日の一の舞はノーセンキューだからね。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

そう、もう一人の転校生の自己紹介は終わっていないのだ。まあ、忘れることが出来るような外見じゃないが。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長くおろしていい。きれいではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしつぱなしという印象のそれ。そして左目に眼帯。医療用のものではなく、本物と言つより戦争映画とかの大佐がしていそうな黒眼帯。そして開いている方の右目は赤色を宿しているが、その温度は限りなくゼロに近い。

恐らく雰囲気からして軍人だろう。

」
「

当の本人は未だに口を開かずに、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで、今はもう視線をある一点……千冬さんにだけ向けていた。

「……挨拶をしや、リウラ」

「はい、教官」

千冬さんを教官と呼ぶことは千冬さんがドイツに行つた際の教え子だったということとか。だが、千冬さんは面倒くそそうな顔をした。

「ヒロではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ヒロではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるリウラはぴっと伸びた手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋をのばして、自己紹介を始めた。

「ラカラ・ボーゲヴィッヒだ」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待つていいのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を開ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気が凍ついたぞ。あ、一夏と目があつた。

「…貴様が…」

ラウラが一夏に近づいて行く。僕はそれが嫌な感じがして木刀を手に持ち帯刀の構えを取りながらラウラにすぐに近寄つて一夏を殴ろうとするところで僕は木刀を抜刀し、ラウラの平手を木刀で止める。…木刀はまずかったか？でも、おかげで一夏に張り手が届く事はなく、ラウラはこちらを睨んできた。

「何をする……貴様……」

「親友を殴られるところは見ていて気持ち良くないからね。なんで一夏を殴ろうとするんだ？」

僕はラウラの質問に対し怒りを込めた声で言い返す。ラウラも臨戦体制に入る。が、そこに織斑先生が介入していく。

「お前ら、そこまでにしておけ。SHRが終わってしまう

僕は木刀を左手に持つ。ラウラも手を引いた。そしてラウラは一夏の方を見てこう言った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか

第十三話 冷静に考えなくても転校生2人が同じクラスつておかしいよね（後書き）

サバー二ヤ起動テストフラグを建てました。

分かりにくいでですかね…？

第十四話 お嘸い飯は戦争です。（前書き）

第十四話です。

『最近の悩み……評価上がらない。

どうにか、この駄文を直せば評価上がるのか……？

第十四話 お昼飯は戦争です。

一 夏視点移行…

優人とラウラが睨み合いをした後、クラスが沈黙していた。

「あー……ゴホンゴホン！」ではHRを終わる。各人はすぐに着替えで第一グラウンドに集合。今日は一組と合同でIS模擬戦闘を行つ。解散！」「

ぱんぱんと手を叩いて千冬姉が行動を促す。ラウラの行動にはかなり腑に落ちないというか腹が立っているんだがそうも言ってられない。なにせ、このままクラスにいると女子と一緒に着替えなくてはならなくなる。それは困る。非常に困る。

なので俺は急いでクラスから移動しなくてはいけないのだ。ええと、確か今日は第一アリーナ更衣室が空いているはずだ。

「おい織斑。氷川と一緒にデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ？」「

やつぱりそつなるよな。

「君が織斑君？初めてまして。僕は——」

「あー、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。優人！つてあれ、いない？」

「氷川君なら先に行つたよ？」

近くの女子が教えてくれる。あいつ……押しつけやがった……
俺はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。

「ありがと。まあ、とりあえず男子は空いてるアリー・ナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだ?さっきまでとは違つて妙に落ち着かなそうだな。

「トイレか?」

「トイ……つ違つよ!」

「さうか。それは何よ!」

とりあえず階段を下つて一階へ。速度を落としてはだめだ。なぜなら――

「ああつー転校生発見!」

「しかも織斑君と一緒に!」

そり、HRが終わったのだ。早速各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆けだしてきている。波にのまれたら最後、質問攻めのあげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っているのだ。絶対にそうなるわけにはいかん。……優人は俺を囮に逃げたな……

「いくちだー!」

俺とシャルルは駆け出した……

優人視点移行…

僕はHRの終わりの合図と共に教室を出て第一アリーナ更衣室へと走り出した。

あの転校生、シャルルと話すのが気まずく感じたからだ。

僕はいつも通り廊下の窓から外へ。そのまま第二アリーナを目指す。走り続けるとすぐに更衣室に着いた。

ロッカーを開け、制服を脱ぎ、ロッカーの中へ。ISスーツは制服の下に着たままのため、これで終わりだ。

着替え終えるとまた走り出す。

第一グラウンドに着くと山田先生と織斑先生がラファール・リヴァイヴと打鉄を出していた。

「あれ、氷川君？ 織斑君とデュノア君は？」

「今頃ふたりは女子に囲まれてるかと」

「ほう、お前はそれを見捨てたのか？」

「いえ？ 僕は囲まれる前に移動しただけですよ」

「はあ……デュノアの面倒はお前に見させたまづがよかつたな……」

千冬さんが半ば呆れてる。それもそうか。一夏じゃ、あれを抜け出すのに時間がかかるし。

「あ、山田先生。手伝います」

「ありがとうございます。ではこのラフアール・リヴァイヴを運んで下さい」

「はいはーい」

そう言つて僕はEIS運び専用カードを軽々と押していく。

「すごいですね…氷川君…」

「へ？何がです？」

「成人男性でもこのカートを生身で軽々と押していく人はそうそういませんよ…大抵女性は私みたいにSを展開して運びますし…」

「…………」

アスベルさんとの特訓の時、これ以上の重さのものを持ちながら毎日10キロ走っていたんだから、自然と力がつくものだ。

その後、一夏と鈴とセシリアが何かを話している間に千冬さんが来て三人を叩いていた。

僕？僕はずつとPDFのデータを弄つてたよ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同演習なので人数はいつもの倍。出でくる返事も妙に気合いが入っていた。

「ハハハ……。何かとこうとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

千冬さんに呪かれたセシリアと鈴はちょっと涙目で頭を押さえていた。
あ、一夏蹴られた。

「なんとなく何考えているかわかるわよ……」

成る程、失礼な事を考えていたのを読心術で見破ったのか。すいに
な鈴は。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょいと活力が溢れんばかりの
十代女子もいることだしな。——凰^{フアン}！ オルゴット！」

「な、なぜわたくしまでー?」

THE飛び火だね。可哀想に。

「専用機持ちはすぐにほじめられるからだ。いいから前に出る

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

責任はすべて一夏かよ……

「お前ら少しほはやる気を出せ——アイツらにいとこひを見せられるぞ?」

千冬さん、耳元でなにか囁いたぞ?

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね! 専用機持ちのー..」

「それで、相手はどういう? わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが、なんだ、なんだ? いきなりやる気出したぞ? 何を言つたんだろうか?」

「ふふん。じつちの台詞。返り討りよせんが」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

キィイイン……。

この音は……まさか一上を見上げると山田先生が落として来ていた。

「ああああーっ…び、どこでくださこーっ!」

気が付くと僕と一夏以外その場から離れていた。僕はとりあえず衝撃に備え、山田先生を止めるためブレイブハーツを起動。更にショックアブソーバーを最大出力で起動して僕と一夏は山田先生と激突する。一夏もギリギリで白式を起動したみたいだ。それでも僕達は

地面に転がる形になってしまった。

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合つたな。しかし一体何事——」

一夏の動きが止まる。あれ?どうしたんだ?僕も起き上がる。うとするが左手にあるマシュマロのよつた柔らかいものに~~く~~付き、動きが固まる。

「あ……」

思わず声を上げてしまつ。だが、一夏が自分の右手にあるものに気がづかず手を動かし続ける。

「あ、あのう……織斑君に氷川君……ひゃんつー」

やめて!山田先生!変な声を出さないで!

とか言いつつこのマシュマロに触れていたいという男の性か手を動かせない。だが、このままでは一夏と同罪だ!それだけは嫌だ!

「や、その、ですね。困ります……こんな場所で……をいえ!場所だけじゃなくてですね!私とお一人は仮にも教師と生徒ですね!
……ああでも、このまま行けば——」

「うわあああ……!」「ごめんなさいイイイイー!それと山田先生は暴走しないで下をこじイイイイイー!—」

僕は慌てて離れる。だが、一夏は未だ動かず。だが、僕達に向けての殺氣を感じ、咄嗟に身を低くする。一夏は顔を引いた。

すると、僕の頭の上と一夏の顔があつた所を一筋の閃光が走る。

「ホホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑つてゐるけど、目のハイライトが消えてる！これはマズイ！

後ろからはガシーンと何かが連結する音が…後ろを向くと一夏と僕へ向け、連結した双天牙月が投擲される。僕と一夏は間一髪で躲しだが、一夏は仰向けに倒れる。僕はブレイヴハーツのケルベロスシヨットで戻つてくる双天牙月を撃ち落とそうとするが、さつきの激突で何処かに飛んでいつてしまつたらし。

…量子変換させといった方がよかつたな…そんな後悔をしながらウイングセイバーの射出準備にとりかかるが…
ドンッ！ドンッ！

短く一発、火薬銃の音が響く。弾丸は的確に双天牙月の両端を叩き、その軌道を変える。

キンッキンッと地面に薬莢が跳ねる音がする方を見ると山田先生がアサルトライフルを構えていた。

「…………

山田先生のいつもと違う姿を見て驚いたのは僕と一夏だけではなく、セシリシアと鈴はもちろん、他の女子も畠然としていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

極度の上がり症なんだつたつけ?ほ、どうやら原作知識の中にも抜けてないものはあるようだ。どうやら、重要な出来事とこれから現

れる人達のことを語れているようだ。

「わい小娘どもこつまで惚けてる。わいわいはじめるわ」

「え？あの、一対一で……？」

「いや、わすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、といつ葉が気に障ったのかセシリ亞と鈴は再びその瞳に闘志をたぎらせた。

「では、はじめ…」

即ちと同時にセシリ亞と鈴が飛翔する。それを一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。

「手加減はしませんわ！」

「さつきのは本気じゃなかつたしね！」

「こ、行きませー。」

口調はいつもの山田先生だったが、田は獲物を狩るもの田だ。セシリ亞鈴組は先制攻撃をするが、簡単に回避される。

「わい、今の間に……。そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているHISの解説をしてみせや」

「あつ、はい」

シャルルがリヴィア イヴの説明を始めると同時に僕もRFのコンソールを起動し、調整を始める。

しばらくするとセシリアと鈴が同時に落とされてきた。

何やらいがみ合つふたりだが、興味は無いのでコンソールを再度弄り始める。だが、授業が再開される合図を千冬さんがする。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、氷川、ボーデヴィッヒ、凰^{ファン}だな。ではハ人グループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな? わかれろ」

僕はコンソールを閉じると、女子が一気に詰め寄つてくる。一夏とシャルルもそうだった。でも、そんなどしたう…

「IJの馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ! 順番はさつき言った通り。次にもたつくよつなら今日はEISを背負つてグラウンドを百周させるからな!」

やつぱりね。とりあえず番号順に女の子達が来る。各班はおしゃべりをする女子ばかりだつたが、ボーイヴィッシュの班だけ静かだつた。その後、授業は一夏がお姫様抱っこをしたことによる騒ぎ以外何も起こらなかつた。まあ、僕の班でも懇願してきたけど、千冬さんが止めにきてくれた。

さすが千冬さん。

しばらく指導して授業が終わり、僕はEISをさつさと片付けて更衣室に向かつた。制服を着て、更衣室を出ると一夏とシャルルが居た。

「げ……」

「『げ』ってなんだよ。『げ』って？」

……仕方ない、腹を括るか。

「いや、何でもない。あ、自己紹介がまだだったね、シャルロット」「ト

「えつ？」

……しまった、間違えた。シャルルが困った顔してゐる……

「優人、何言つてんだ？ シャルロットじゃなくてシャルルだぞ？」

「あ、ああ、そうだつた。知り合いでシャルロットって子がいたから。その子と名前を間違えたよ。ごめん。改めて、僕は氷川優人。優人でいいよ」

「う、うん。僕はシャルル・デュノア。よろしく、優人」

「あ、そうだ。優人、俺とシャルルはこれから飯を一緒に食つんだけど、お前もどうだ？」

「そうだね、僕も同席するよ。今日はお弁当だけど

「お、ちゅうどいいな。屋上で食つ氣だつたから。先に弁当持つて屋上行つてくれ。そこに待つてる奴がいるから

「待つてる奴？」

「行けばわかるさ、じゃ後で

「ああ、後で。一夏、シャルル」

そんな」とで僕は弁当を持って屋上へ行くと篝が居た。

「……朴念仁め。『めん、篝』

「い、いや、いいんだ。一夏だからな……」

「でも、僕が来なくともシャルルが来たんだけど……」

「一夏……」

篝からドス黒いオーラが見えた気がした。

それから少し経つと一夏、シャルル、セシリ亞、鈴が来た。何か増えてるし……

「……どうこうことだ

「ん? 天気がいいから屋上で食べるので話だつたら?」

「そりではなくてだな……！」

はあ……そこまで来ると病気だろ……

「せつかくの昼飯だし、大勢で食つた方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろ?」

「そ、それはそうだが……」

ちなみに箸は弁当だが、一夏の分も作つてきたりしい。幼馴染つて素晴らしい。そして、一夏。もげる。

「ええと、本当に僕が同席してよかつたのかな？」

なんだか幕と鈴が睨み合つのを見てそんなことをシャルルが言つ。
「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、
まあ協力してやつていこう。わからないことがあつたらなんでも聞
いてくれ。――以外で」

「一夏、好い加減僕の教えた内容覚えてよ」

「うう…多すぎるんだよ、覚えることが。お前とセシリ亞や鈴は入
学前から予習してゐるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くともみん
なジュニアスクールのうちは専門の学習をはじめますわね」

そんな面倒なことやつてるんだ。知らなかつた。まあ、僕は神様か
らもらったチートのおかげですぐ覚えられるけど。

「ありがとう。一夏つて優しいね」

シャルルが一夏にお礼を告げるとおかしな反応をした。

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるんだし……ついで
だよ、ついで」

「一夏さん、部屋割りがもう決まつたのかしら？」

「ああ、昨日山田先生が教えてくれた」

「でも、なんで優人の時は一緒にやなかつたの？」

素朴な疑問に鈴が言う。

「あの時は部屋数が足りなくて一人と女子と同じ部屋になるかつていう選択肢になつただけだよ。部屋を増設した後も僕は一人部屋がいいつて山田先生に言つたら一夏の部屋にシャルルが行くことになつたわけ」

「ふーん……」

続いて一夏を冷めた田で見始める。おそらく、さつきのおかしな反応のことだろう。

「なあに照れてんのよ……」

「べ、別に照れてねえぞ……」

「…まあ、いいわ。はいこれあなたの分」

「お、酢豚だ！」

「そ、あんた食べたいって言つてたでしょ？」

「一夏はいいな…もげる。

「あ、あの、優人さん！わたくし、今朝はたまたま偶然何の因果か

早く田が覚めました、ソーツもものを用意してみました。よろしくおひとつどうぞ」「

バスケットを開くセシリ亞。そこにはサンドイッチが綺麗に並んでいた。前世ではこういう体験がなかつただけに新鮮だ。そして、我が家が世の春が来た——って……俺はこの世界で彼女を作るために来たわけじゃないだろ……

「お、ありがとうございます。いただべよ」

「い、いえ……では、どうぞ……」

僕は一個サンドイッチを取り、ぱくつ。

「……? ……? ……? ……?」

何だこれ……Bマークのサンドのはずなのにめりへりへり……あ、やつといえばセシリ亞は料理が超級アド手だったな……

「どうがじら?」

「セシリ亞……味見した?」

「? いえ、してませんが?」

「セシリ亞、僕がマンツーマンで料理を教えるからそのサンドイッチを食べてみて」

そう言って僕はバスケットから新しいサンドイッチを取り出し、セ

シコアに突き出す。

「わ、わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを揃ねるよ
うな行為は良しとはいたしませんが、今日は平日でこゝは日本、『
郷^{ゴーリング・ガウ}に入つては郷に従え』ですね」

そして、突き出された新し^シサンデイッチをセシリアが一口..
ぱくつ。

「ハハ…へ？」

ビーフサンド、ローストサンド^{ローラン}の味に驚いたようだ。

「あ、今一夏と優人がやつたのつてもしかして日本ではカツプルが
するつていつ『はい、あーん』つていうやつなのかな？仲睦まじい
ね」

どいつやら隣でも一夏と雛が同じよつなことをしたらしく。おかげで
鈴が騒いでる。

「…優人さん。『あなたが…こんなものを食べさせてしまって…
…』

「あ、いや、その…料理つてこつのは最初からつまごものじゃない
からさ、僕と練習して上手くなるわ。」

「…や、そうですね…で、ではこのサンデイッチはわたくしが責任
持つてすべて食べますわ」

「…いや、せつかく作つてきて貰つたんだ。僕が全部食べるよ」

「えつ……でも……」

「セシリ亞は僕のお弁当を食べて。まだ、食べてないから」

意を決して……僕はサンドイッチを一気に食べる。確實にひとつずつ……めちやくひや甘い……でもこれに耐えなきや男じやない……

「うふふ……食べきつた……ぐふう……」バタツ……

『優人！？（さん！？）』

僕はあまりの衝撃的な味に耐えられず氣絶してしまった……結局、目が覚めたのは放課後になる直前であった。

第十四話 お嘸い飯は戦争です。（後書き）

「意見」感想お待ちしております。

第十五話 やっぱりサバーニャの乱れ打ちはかったいいね（前書き）

更新遅れてすみません。最近何かと忙しかったもので…

お気に入り100件登録突破＆ユニークアクセス1万越え、ありがとうございます！これからも日々精進して行きたいと思います。

こんな作品でもここまでくるのはTSHやガンダム、スパロボが偉大だからですね。いつかは作品の力だけでなく、自分の力を含めて評価されるようになりたいです。

では十五話をどうぞ

第十五話 やっぱりサバーニャの乱れ打ちはかっこいいね

結局、セシリ亞の料理で倒れた後は体調が不完全でサバーニャの起動テストは土曜日に持ち越しとした。

そして、転校生ふたりが来てから五日が経っていた。すなわち起動テスト当日。現在、テストを行うために全開放されているアリーナにいる。だが、先にシャルルと一夏が模擬戦を行い、一夏が負けた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「う…優人と同じことを…一応わかってるつもりだったのに…」

「やっぱりねー、一夏に何度も言つてるけど聞いてくれないんだよ。…」の事は口にしないけど。

「うーん、知識として知つてはいるだけって感じかな。さつき僕と戦つたときも二、三回位しか間合いを詰められなかつたよね?」

「う…確かに。『イグニッション・ブースト瞬時加速』も読まれてたしな…」

「一夏のIISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速つて直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃつからね」

「直線的か…そこは優人にも言われたことないな」

「僕は一夏と模擬戦したことないし」

「そりいやそうだな」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「そこら辺は優人が瞬時加速の注意を聞いた時に教えて貰つたぞ。しかし、シャルルは優人と同じ位……いや、優人以上に教え方が上手いな」

確かにシャルルは教え方が上手いな。一夏の言つ通りかもしれない。僕は人に説明するのが苦手だし。

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやつたのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だといつのかしじ

「少なくとも、シャルルの教え方は擬音ばかりの教え方や感覚だけで教えようとする人や細か過ぎる説明の人達よりも上手こと思うけど?」

「……誰の事(だ)(ですか)(よ)?」「

……自覚がないから余計にたちが悪い。

因みにここは第三アリーナ。僕と筹とセシリヤと鈴はペリット二。一夏とシャルルはアリーナにいる。

僕が申請を出して貸し切っている。……本当は第六アリーナが良かつ

たんだけど。それでも、男子三人がいるせいか、観客席は満席になつてゐる。

「一夏の『白式』つて後付武装^{イコライザ}が無いんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらつたんだけど、拡張領域^{バッスロット}が空いてないらしい。だから量子^{インストール}変換は無理だつて言われた。優人は多分、ワンオフ・アビリティーに容量を使つてるつて言つてたぞ?」

「開発者が言つんだから間違いないだろ? じゃあ次は射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

そう言つて一夏に渡したのは、さつきまでシャルルが使つていた五五口径アサルトライフル《ヴェント》だつた。つて、あれ? 僕、シャルルに開発者つて言つてないよな? クラスの人から聞いたのか?

「え? 他のやつの装備つて使えないんじゃないのか?」

「普通はね。でも所有者が使用許諾^{アンロック}すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。——うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

「お、おう

構えを取る一夏。ぎこちないな……

「か、構えはこうでいいのか?」

「えつと……脇を締めて。それと左腕はこうす。わかる?」

シャルルが一夏の後に回り構えを修正する。

「火薬銃だから瞬間に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくていいよ。センサー・リンクは出来てる?」

「銃器を使うときのやつだよな? やつから探してるんだけど見当たらない」

高速状態での射撃なので、そこは当然ハイパー・センサーとの連携が必要になる。ターゲットサイトを含む銃撃に必要な情報をIS操縦者に送るために武器とハイパー・センサーを接続するのだが、どうやら白式にはそれがないようだ。おそらく東さんのせいだろう。

「うーん、格闘専用の機体でも普通ははいつてるんだけど……」

「欠陥機らしいからな。これ」

「100%格闘オンリーなんだね。じゃあ、しうがないから測定でやるしかないね」

「じゃあ、行くぞ」

「うふ。とりあえず撃つだけでも大分違うと思うよ」

バンッ!

アーナにものすごい火薬の炸裂音が響く。

「つおつー?」

「どう？」

「あ、おひ。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中しているけど、それでも心のどこかでブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

やつと一夏が納得した顔をした。射撃についてあまり教えていかなかつたので、シャルルの射撃についての説明はとても助かる。

「だからそりだと私が何回説明したと……？」

えつ？

「つて、それすらわかつてなかつたわけ？ はあ、ほんとにバカね」

えつ？

「わたくしはてつきりわかつた上であんな無茶な戦い方をしているものと思つていましたけど……」

ええ……

僕の後ろでつぶやく自称一夏の口ーチ達の言葉を聞いて、一夏が少

し哀れに感じられた…

「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切つていいよ」

「おひ、サンキュー」

わざとより幾分か落ち着いて、空撃ちをする一夏。

「やうじえは、シャルルのヒヒでリヴァイヴなんだよな?」

「うそ、やうだよ。——あ、腕が離れてきているから、ちやんと一回(?)とに脇を締めて」

「お、おひ。……」うか?」

「オーケーだよ。あと、なるべく銃身を移動させて視線の延長線上に置いた方がいいね。首を傾けて撃つと、とつてに反応出来ないよ」
「で、そのヒヒなんだけど、山田先生が操縦していたのと大分違うよ」
「見えるんだが本当に同じ機体なのか?」

確かにシャルルのリヴァイヴは通常のリヴァイヴとカラーだけでなく全体のフォルムが違う。

おそらく専用機だからだろう。僕が一番立つて気になつたのは四枚の物理シールドすべてを取り外してある代わりに、左腕にシールドと一体化した腕部装甲が取り付けられていることだな。あの中にさつとなにか隠してあるに違いない。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいじつてあるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』^{ブリセット}。基本装備を

「じゅつか外して、その上で拡張領域を倍にしてある」

「倍…？そりやまたすゞこな……。ちょっと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも一十くらいあるよ」

「うーん、ちょっとした火薬庫みたいだな」

「じゃあ、その火薬庫を超えて見せようか」

「えつ？」

僕はペリットから出て一夏とシャルルに言ひ。

「一夏、僕は前にやりたいことがあつたからこのアリーナを貸し切つたつてのは言つたよね」

「おつ」

「今からそれをやるから離れてて

僕は花の形をしたバッヂを握り、念じる。

（パッケージを選択していください）

無機質な声が頭に響く。

（サバー二ヤパッケージ）

そう念じると僕の体が光る。そして光が収まるとき緑を基調とした全身装甲のエスを纏つた。

「うお！また全身装甲か！あれ、でも前と違わないか？」

「それも秘密。とりあえずターゲット起動」

ターゲットがアリーナ中に出てくる。

「う、うわ！どれだけ出したの、優人！それに声が違う！」

「さすがのシャルルでも驚くか。ターゲットの数はざっと千くらいだな。声に関しては俺の趣味だ」

ターゲットはサバニヤのマルチロックシステムのデータをうまく取るためにわざと多くした。声と一人称についてはロックオンになります。

「ターゲット。実戦モード、スタート！」

僕はアリーナ中央部に行く。

「行くぜ、ハロッ！」

「リョウカイ！リョウカイ！」

僕の言葉にAIのハロが反応する。そしてまず、肩に付いたホルスター・ビットを展開し、ホルスター・ビットからライフル・ビット？が飛び出す。そして、腰のホルスター・ビットが展開され、ライフル・ビット？も展開される。僕はハイパー・センサーのマルチロックシステム

を起動する。そうすると、頭部センサーが展開し、続けて肩のセンサーも展開される。ターゲットからの攻撃を展開したホルスターービットで防ぎつつ、すべてのターゲットをロックオン。そのまま…

「乱れ撃つぜええええ！」

僕は回転しつつ手に持ったライフルビット？の引き金を引く。勿論、ターゲットを狙つてだ。僕はホルスターービットとライフルビット？、それぞれ7機を操りながらターゲットを落とす。残りのビットはA-Iのハロにやらせている。ターゲットは一気に200ほど落とした。

「すじい…」

そんな一夏の言葉が届く事はなく、僕は移動しながらターゲットを牽制する。攻撃はホルスターービットで防いでいる。そして、少しターゲットの塊が出来た所で、ホルスターービットを四枚ずつ並べて強力な粒子ビームを放つ。そして、残りは500ほど。そのまま僕は上昇した。

ターゲットはこちらを撃つてくるが当たる事はない。またマルチロックシステムを起動し、今度こそ全機をロックオンしてライフルビット？で撃つ。それだけでは足りないと思い、機体の各部にマウントされたミサイルポッドを放つ。撃ち終えたミサイルポッドはパージする。

辺りは爆煙で見えなくなる。煙が晴れるとそこにターゲットの残骸だけが残っていた。

そして僕がゆっくりと着陸すると、周りから拍手が上がっていた。

「優人！お前すっげえな！あんなにあったターゲットを全部撃ち落としちまうなんて！」

「やつだろ？」

「うん！ほんとこすゞこみー！僕じやあんなこと出来ないし…」

「当然だろ。だが、これはサバーニャの恩恵があつてこそやだ

「ゆ、優人さん！なぜあんなに遠隔操作の武器を使って平然として
いられますの！？」

シャルルの言葉から続けてセシリアが質問をしてくる。

「あー、あれはこの機体に搭載してあるAIのおかげだ

…実際は半分は僕が操作してるけど。

「や、そうでしたか…」

ショボンとうなだれるセシリア。遠隔操作について何かコツがあつたら聞きたかったのだろうか？

「ねえ、ちょっとあれ…」

観客席が今度は別の意味でざわつく。

「ウソッ、ドイツの第三世代型だ

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

観客席がざわつきまして僕達は注目の的に視線を移した。そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィック

ヒだった。

転校初日以来、クラスの誰ともつるむつとしない孤高の女子だ。

「あれ? ここは貸し切った筈だが?」

僕がIISの開放回線オープン・チャンネルで声をかける。だが…

「おい」

僕に見向きもせず、一夏に開放回線で話掛ける。

「……なんだよ」

ぶつきあひまつに一夏が答える。

「貴様も専用機持ちだそつだな。なら話が早い。私と戦え」

…戦闘狂か? こいつ。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても私にはある」

理由というのはおそらく千冬さんのことだらう。第一回IIS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦で一夏が誘拐され、千冬さんが助けに行つた代わりに千冬さんの決勝戦は不戦敗となつてしまつたのだ。そして、その誘拐された一夏の情報を提供したドイツは千冬さんがドイツに借りを作つたという口実で、大会終了から一年ほどドイツ軍IIS部隊で教官をしたそうだ。

「貴様がいなければ教官が大会一連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

「おいおい、人権全否定かよ。それに千冬さんのことは一夏とお前が戦う理由にはならないだろ？！」

ロツクオンボイスで俺が言つ。

「うるさい！」

その一言で一蹴された。

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないよつこしてやるー。」

言つが早いが、ラウラはその漆黒のIJSを戦闘状態へとシフトさせる。刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「—」

僕は一夏の目の前にホルスタービットを展開して守った。シャルルも同じことを考えたらしく、シールドを構えて一夏の前に立つている。が、ホルスタービットの後ろだった。

「人が貸し切つたアリーナに勝手に入った挙句、武器を持たないやつに引き金を引くたあドイツ人はそこまで常識がなつてねえのか？」

「貴様！」

「おつと、やるつてか？俺は一夏と違つて、売られた喧嘩は買つてやるぜ？」

そつ言つて手に持つたライフルビットへの銃口をラウラに向ける。

『そここの生徒！何をやつている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやつてきた担当の教師だらう。

「……ふん。今日は引ひ」

横やりを二度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去つていく。

「一夏、大丈夫か？」

僕はサバーニャを待機状態にして一夏に声を掛ける。

「あ、ああ。助かつたよ」

「僕も。ありがとね優人」

一夏だけに聞いたつもりだつたが、シャルルにまで礼を言われた。シャルルはラウラと対峙した時の鋭い眼差しではなく、人懐っこい顔のシャルルであった。

「アリーナの貸し切り時間は過ぎちまつたな。とは言つても閉館時間まで貸し切つたんだが」

「おう。そうだな。あ、シャルル。銃サンキュ。色々と参考になつた」

「それなら良かつた」

またにつけ微笑む。女子だとわかつてゐるが、正直この微笑みは本当に男子だつたら残念なものだつ。色々な意味で。

「えつと……じゃあ、ふたりは先に着替えて戻つて」

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言つくなよ」

「つれないっていつていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

…シャルルに助け舟をだすか。

「あー…一夏。正直、無理と一緒に着替えようとするヒヤツチ系の趣味だと勘違いされるよ?」

「うう…それは困る」

「といつか、同じ男子でも一緒に着替えたがらない人もいるでしょ。その位の相手のこと考えてあげなよ」

「お、おう」

「と言つわけだシャルル。僕達は先に着替えて戻つてゐるよ」

「う、うん。……ありがと」

最後の言葉は聞き取れなかつたが、多分、お礼の言葉か何かだらう。
僕達は更衣室へ向かつた。

更衣室で着替え終えると、外から声を掛けられた。

「あのー、織斑君とデュノア君、それと氷川君はいますかー？」

この声は山田先生だらうか？

「はい？えーと、織斑と氷川だけいます」

一夏が答える。

「入つても大丈夫ですかー？まだ着替え中だつたりしますー？」

人はなぜ遠くに呼びかけるときに語尾が伸びるのだらうか？

「あ、大丈夫です。僕達はもう着替え終えてます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシュッとドアが開いて山田先生が入つてくる。

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は三人で実習している
つて聞いていましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もつピットまで戻ってきたかも
しませんけど、どうかしました？大事な話なら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、お一人から伝
えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使える
ようになります。結局時間帯にすると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回使用日を設けることにしました」

「本当ですか！やつたな、優人！」

「…ああ」

一夏はお風呂に入れるというだけで感激してる。しかも感激のあまり山田先生の手を取つてるし…

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます…まさか、一夏の毒牙にやられてるのか…」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます…」

「そ、そうですか？ そう言われると照れちゃいますね。あはは…」

正直、更衣室で男子生徒と女教師が一緒にいるとか、それなんてエロゲ？

「……一人とも何やつてんの？」

気がつくとシャルルがいた。

「まだ更衣室にいたんだ。それで先生の手を握って何してるの？」

「一夏が山田先生を襲おうとしてる」

いたずら開始。

「「なつ……！？」」

慌てて手を離す一夏。

「フツ……『冗談だよ』

いたずら終了。早いな。…一人乗りツツ『ハハハ』悲しいね…

「二人とも先に戻つてって言つたよね」

何事も無かつたかのようにシャルルが喋る。

「あ、『めんね。僕達もさつき山田先生と話を始めたばかりだったから』

「あ、そうだ！シャルル、今月下旬から大浴場が使えるらしいぞー！」

「そう！」

…何か不機嫌だな。

「あ、そうそう、お一人にはまだ別の用件があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるので、職員室まで来てもらえますか？お一人のＩＳの正式登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いですけど」

「そういう事だ、シャルル。先に風呂使っていいぞ」

「うん、わかった」

「じゃ、行きましょ、山田先生」

第十五話 やっぱりサバーニャの乱れ打ちはかっこいいね（後書き）

後でお気に入り100件登録突破＆ユニークアクセス1万越え記念
話を作りたいと思います。

感想、訂正もお待ちしています。

『ジサクジョン』（お気に入り100件登録突破＆コーナークアクセス1万越え記念）

自分の欲望のままに書いてみた。

人によつては不快にさせる文章があるかもしれないの、注意です。

……
图々しくてすみません
……

『ジサクジョン』（お気に入り100件登録突破＆ニークアクセス1万越え記念）

作者「どうも、作者です」

優人「どうも、『第一の人生は工Sの世界で…?』の主人公、永川優人です」

作者「いや、結局話が決まらなくてオリジナル主人公との対談話になってしまいました」

優人「まあ、変な話を作られるよりマシだけど」

作者「では、まず主人公の名前の由来を…」

優人「何の前触れも無く始めたね！？」

作者「え？まあ、そうだね」

優人「いや、お前は俺の妄想の産物だしだ」

作者「いや、お前は俺の妄想の産物だし」

優人「じゃあ、何で主人公との対談にしたの！？」

作者「強いて言つなら…ツツコミが欲しかったから？」

優人「オイイイイ！」

作者「えー、で名前の由来…」

優人「待つて！お願い！僕に質問して！」

作者「…わかつたよ、じゃあリア充になつた気分は？」

優人「そうだね…別にリア充つて気分でもないよ。男子と女子の比率が約1・9だからね。寧ろ気疲れが増えたね…あ、でも確かに顔はよくなつたからチヤホヤされるようになつたね」

作者「そうですか、リア充爆発しろ。じゃあ、質問終了。では、主人公の一―」

優人「もう終わり！？…もういいや……どうぞ…続けて下さい…」

作者「よし！で、名前の由来何だけど、氷川というのは勿論スバルのリョウト＝ヒカワからです。優人というのもリョウトという名前を少し改造しただけです」

優人「…やっぱり僕の名前つてリョウトが元だつたのか…」

作者「まあね。で、ISについては当初はP.F.だけの予定でした」

優人「へえ？じゃあ、何でブレイブハーツを作つたの？」

作者「だって、いきなりクアンタとかヒュッケバインを使ってたら動力源のところで矛盾が生まれるじゃん」

優人「あ、そうか。クアンタに関してはGNドライブを作るのにモノポールを集める必要があるし、ブラックホールエンジンなんかはまず作る事が不可能に近いしね」

作者「その通り。んで、最初にプレイヴィーハーツを作らせて、便利機能の神様を利用してPFを作ったわけ」

優人「神様に転生させられるってとっても便利な設定だね」

作者「うん」

優人「あれ？でも、そうなるとプレイヴィーハーツの出番が多数の強力な機体のPFのせいでどんどん減つていかない？」

作者「その点はノープロブレム。確かにPFにはパッケージによつて様々なロボットに変身出来るっていう能力があるから最強かもしれないけど、ネタバレになるかもしれないが、最終的にはプレイヴィーハーツが最強つて設定になる予定なんだ。だから、大丈夫だ！」

優人「へえ、クアンタとかサーベラスを超えるんだ？」

作者「うん。それとPFのパッケージも増やしたいと思つてるんだよね」

優人「あ、僕もそれは賛成だな。他の機体に乗つてみたいし」

作者「とはいっても、ガンダムばかりが作者の頭の候補に上がつてきてるんですよね…」

優人「確かにスパロボ要素が欲しいかも」

作者「でしょ？一応候補を出してみたんだけど、アルトイゼンはもう先輩にあたる先駆者がいるからつまらないし、ヒュックバイン

も先輩がいるからダメだしね。それにアストラとディストラは論外。
グランゾンとかネオグランゾンもね」

優人「あれ? ダブルオーは?」

作者「気にするな。まあ、ブラスタとかも考えているが、あれはまだ完結してないからな…」

優人「確かに…」

作者「エール・シユバリアーも考えたが、ジェアン・シユバリアーになつた時がね…」

優人「ISとしての欠点が生まれるね…」

作者「そう、大きすぎるから…出すとしたらフォルテギガスかな…」

優人「そうだね…あれならまだ妥当な線かも…」

作者「あ、ちなみに言つておくと作者はスパロボは、MX、D、Z、Z2ぐらいしか真面目にやつたことがないよ!」

優人「じゃあ、なんでアルトイゼン出そとしたの!?」

作者「スパロボの動画見て格好良かつたから?」

優人「それだけ!?」

作者「うん。つーかさ、リボルビングステークとかリボルビングバ
ンカーは男のロマンじゃね?」

優人「確かにそうだね。あれはかなりいい。あ、そういうえばリボルビングバンカーっていうとサーベラス・イグナイト何だけどさ」「ああ

作者「うん？」

優人「どうしてガルムレイドじゃなくてサーベラスなの？」

作者「…サーベラス・イグナイトの方が格好いいから…」

優人「ガルムレイドが格好いいって言う人もいるでしょ！…」

作者「まあ…そうだね…でも、BGMの『The watching off hell』は格好いい曲だろ？」

優人「確かに…あ、思えばブレイブハーツの名前の由来は？」

作者「キングダムハーツ」

優人「やつぱりね！」

作者「なんだ…わかっているなら聞くなよ。そもそもお前が命名という設定だろ」

優人「確かに…そうだけど…僕が考えた名前の由来が僕と違うんじゃないかと思つたんだよ」

作者「お前は俺の妄想の産物である事を忘れてるのか？」

優人「そういうえばそうでした」

作者「ふん、わかればよろしい」

優人「さつきから話がコロコロ変わってるけど、まあいいや。で、PFの話何だけどガンダムならどんどんアイデアが出るって言つてたけど例えばどんなの?」

作者「うーん、ユニコーンとかクロスボーンとかW零とか?」

優人「……いいかも」

作者「特にやりたいと思ったのはF91とV2なんだよ。特にV2は俺の初ガンダムだから余計に思い入れがある」

優人「完全調整したアサルトバスターで戦うのもいいし、金属剥離効果による残像もいいな……」

作者「だろ?だからどちらにするべきか迷っている。普通ならネット投稿の二次創作なのだからアンケートを取りたいところだが……」

優人「今まで感想とか書かれた事ないから言い難いと……」

作者「……うん」

優人「一度アンケートやってみれば良かつたのに」

作者「だ、だつて、書かれなかつた時が悲しいじゃん!」

優人「……意外とガラスのハートなんだね」

作者「……いわゆる黒歴史のせいでね」

優人「ふーん……ていうか、こんなところでそんな事を言つなんて
図々しいにも程があるね」

作者「……」

優人「まあ、いいか。あ、そうだ。ブレイヴハーツのケルベロスシ
ヨットの光学兵器なんだけどさ。時代的に不可能に近かつたんじや
……あの束さんでさえ当時は荷電粒子砲で止まつてたのに」

作者「ああ、あれね。あれは荷電粒子砲の出力が弱くなる代わりに
荷電粒子砲を小型化出来たっていう設定にしたつもりだよ。ショッ
トガンモードについては沢山の収束粒子を一気に放出しているって
いう設定だ」

優人「そんなのだったら、作中で書きなよ！！」

作者「……もう正直すまんかった。これも作者の文才の無さが招いた
結果です」

優人「はあ……まあ、いいか。エクスカリバーは？なんであんな名前
なの？」

作者「特に意味はない。まあ、ぶっちゃけ中二病が発生したみたい
な？」

優人「……」

作者「……テヘツ

優人「キモイ。ね」

作者「酷い！」

優人「そろそろネタ切れかな。さて今後『第二の人生はISの世界で！？』はどうなつて行くのか。PFの出番が増えるばかりでブレイヴハーツはどうなるのか！？」

作者「期待しないで待つていて下さい。えー、最後に。こんな駄文だらけのISの二次創作を読んでいただき、まことにありがとうございます。矛盾も多く、説明不足だらけですがこれからも作者なりに頑張つて書いて行きますので最後まで付き合つていただければ幸いです」

優人「そして、こんな作品でもこれだけのアクセス数が取れたのはISという作品があつてこそ。弓弦先生がどれだけ偉大な作品を書いたのか改めて実感致しました」

作者「ええと、ではこの言葉を主人公の優人と一緒に言いたいと思います……本来、このような場所で言うべき事では無いのですが……せーーの……」

作優「弓弦先生！早く続きを書いて下さい……！」

『ジサクジョン』（お氣に入り100件登録突破＆コーナークアクセス1万越え記

最新話は土曜日以降になります。

今回の回でお気に入りが減らなければいいけど……

第十六話 シャルルの正体（前書き）

更新、大分過ぎてしましましたね…すみません。

では十六話をどうぞ

第十六話 シャルルの正体

一 夏視点…

「はあ～、終わつたあ～疲れたぜ…」

「名前書くだけだつたじゃないか」

「んー、そうなんだけどな」

あ、シャルルに先に風呂を使わせたけどボディソープ切れてるんだ
つた。言つておけば良かつた。

「なあ、優人。これから俺の部屋で茶でも飲んでかないか？」

「うん、そつしそうかな」

そして俺の部屋へ入るとシャワールームから水の弾く音が聞こえた。

「んじや、優人は適当にかけといてくれ」

「わかった」

優人は椅子に腰をかけるとちっちゃなパソコンみたいなのを取り出
して何か真剣な眼差しで画面を凝視し始めた。

「つと、その前にボディソープだな。シャルル～」

ガチャ。

ガラッ。

「 「あ」」

優人視点移行：

一夏がお茶を淹れてくれると言つので部屋に来たのだが……お茶がない。見たところお湯を沸かしてゐる間にシャルルにボディソープを…ってこれ、マズくね？

「 もやあー」

遅かつた……

可愛い声が聞こえてから少ししてボーッとした一夏がお茶を淹れてこつちにきた。

「……はい」

「ビ、ビリしたんだよ、一夏」

「シャルルが…女の子だった…」

「やつぱりか

「反応薄つ！…ってかシャルルが女つてわかつてたのか！？」

「まあ、薄々ね」

「マジかよ…」

「い、一夏…お風呂、出たよ…ってゆ、優人！？」

「やあ

シャルルはジャージ姿だったが、いつものシャルルと違い、胸に膨らみがある。恐らく、今までコルセットか何かを巻いていたのだろう。

「ど、とうあえず、シャルルの分のお茶淹れるな

「へ、うん…」

僕はパソコンを見続けている。シャルルがこちらに視線を送っているのを知りながら。

「どうしたの？」

パソコンを弄りながら聞く。

「い、いやー何でもないよ

「はー、シャルル。ここに置くわ」

一夏はテーブルにお茶の入った湯のみを置く。そして自分のベッドに腰をかける。

「とうあえず、飲もうぜ」

「うん…」

ズズツ…お茶を飲む音が部屋に響く。

「でだ、シャルル。早速だけど本題に入るぞ。なんで男の格好してたんだ？」

一夏が疑問に思っていた事を口にする。

「実家の方からそうしろって言われて……」

「それはデュノア社の——」

「そう。僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ

実家の話をし始めてからシャルルの顔は顕著に曇りだしていた。
…どうしたんだ？

「命令つて……親だろ？なんでそんな——」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

一夏は絶句し、僕は顔を顰める。

「引き取られたのが一年前。ちょうどお母さんが亡くなつたときにな
ね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS
適応が高いことがわかつて、非公式ではあつたけれどデュノア社の
テストパイロットをすることになつてね

シャルルは言いたくない様な話を健気に喋っている。本当は辛いだ
ろうに…

「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかつたのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだが、その声は乾いていてちつとも笑つてはいなかつた。僕は自然とパソコンを使う手が止まっていた。一夏の方を見ると拳を強く握りしてめいた。

「それから少し経つて、デュノア社は経営危機に陥つたの」

「え？ だつてデュノア社つて量産機ISのシニアが世界第三位だろ？」

「そうだけど、結局リヴィアイヴは第一世代型なんだよ。ISの開発つているのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があつてやつと成り立つているところばかりだよ。それで、フランスは欧洲連合の統合防衛計画『イグニッショ・プラン』から除名されるからね。第三世代型の開発は急なの。国防のためにもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

イグニッショ・プランという単語を聞いて、少し前にセシリ亞が言つていたことを思い出す。

『現在、欧洲連合では第三次イグニッショ・プランの次期主力機の選定中なのですね。今のところトライアルに参加しているのは我々イギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型、それにイタリア

のテンペスター型。今のところ実用化ではイギリスがリードしていますが、まだ難しい状況なのです。そのための実稼働データを取るために、わたくしがIFS学園へと送られましたの』

おそらく、あの「ワカラ」のことに関係していたからこの学園に来たのだろ？』

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第一世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかつたんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかつた場合は援助を全面カット、その上でIFS開発許可も剥奪するつて流れになつたの」

「でも、それがなんで男装に繋がるんだ？」

「一夏、僕がシャルル達が転校していく朝に言つてたこと。覚えてる？」

「あー、俺と白沢のデータを狙つてるってやつ？」

「そ。多分それが一つ」

「もう一つは？」

「注目を浴びるための広告塔だろ？ね」

「……その通り。あの人にそつじるつて」

話を聞く限り、デュノア社の社長は愛人との間に出来た娘とはいえ、

その娘を道具としていいように使つていいだけのようだ。それはシャルル自身が一番わかっていること、だから実の父親のことを他人行儀に話すのだろう。

あれは、父親なのではなく、他人なのだと。自らの中で区別するために。

「とまあ、そんなところかな。でも一人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「 「 …… 」 」

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとうございます」と、今まで嘘をついていて、ゴメン

深々と頭を下げるシャルルを、一夏は肩を掴んで顔を上げさせていた。

「いいのか、それで

「え……？」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だつていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」

「い、一夏……？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。僕は感情を抑えられな

い一夏を見て少し顔が一ヤけてしまった。

「親がいなけりや子供は生まれない。そりやそりだらうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

確かにその通りだ。自分の道は自分で決める。誰かに縛られるいわれはない。それが人間つてものだ。

「ど、どうしたの？一夏、変だよ？」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなつちまつて」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから

「あ……」

恐らくは一夏の資料で知っていたのであらう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……『メン』

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親になんて今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」

「どうして……時間の問題じゃないかな。フランス政府との真

相を知つたら黙つていないのでし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじやないかな？」

「それでいいのか？」「

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」

「どうすれば……」

また助け舟を出すか……

「だつたらここに居ればいいよ」

「え？」

二人が声を同時に出す。

「『特記事項第二一』、本学園における生徒は在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』——つまり、この学園にいる限り、少なくとも三年間は大丈夫なんだ。その三年間に何か策を練れば良い。僕が何か新兵器を譲渡するとかね」

「優人」

「ん？ なに？」

「よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」

「昔から物覚えがいいんだ、僕は」

「確かに。お前、小学生で大学の勉強してたしな」

「すごいね、優人。ふふつ」

やっとシャルルが純粋な笑みを浮かべる。その表情には屈託が無くて、十五歳の女子そのものだった。一夏は顔を赤くして背けてしまった。

「ま、決めるのはシャルル自身だよ。誰かの為で無く、自分の為に考えてみて」

「うん。やうするよ」

コンコン。

「　　！？」

「い、一夏、いるか？夕食をまだ取っていいようだが、体の具合でも悪いのか？」

いきなりのノックと呼び声に僕達は身をすくませる。

「一夏？入るぞ？」

「ど、どうじよひー」

「とりあえず隠れて、僕が時間を稼ぐから」

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めて——」

「だあつ！ なんでクローゼットなんだよつ。ベッドベッドー布団の中で大丈夫だ！」

一夏が突っ込む。

「あ、ああつ、そつか！」

「ばたばたと慌ただしい一人を余所に僕はドアを開くと簾が立つていた。

「やあ、簾。どうしたの？」

「……何故優人がここにいる？」

「いや、ただ単に一夏にお茶を」駆走になつていただけだよ

「そうだ、一夏は？」

部屋を覗きこむとするが……

「一夏は今、シャルルの看病をしているよ。」

「看病……？ デュノアは具合が悪いのか？」

「そ、そ、うだぞ、簾！ シャルルは具合が悪いからじばりじばり寝ねつて。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから俺と優人だけで行こうつて話をしてたんだ」

「そ、うなのか……では、私も夕食はまだからな、い、一緒に食べ

よつ。め、珍しい偶然もあつたものだな

「あー、僕はお腹空いてない……というか、部屋にそろそろ食べなきやまざい作り置きがあるから一人で食べてきて。つこでにシャルルの看病もしておくれよ」

「お、おひ」

「では、デュノア、身体を大事にするんだぞ。さあ、一夏、行こう

僕は簾に向けて小さく健闘を祈ると簾は首を縦に振り、腕を取つて体を密着させた。そして、部屋を出て、隣の自分の部屋へ行こうとする……

「あら、優人さん？」

セシリアが居た。

「ど、どうした？？」

「え？ 部屋だけ……？」

「あ、あの、夕食は取られたのですか！？」

「い、いや、まだだけど。作り置きの中にそろそろ食べなきやまざいものがあるからそれを食べるつもりだよ」

「そ、そりでしたか……わたくしもそれをいたただくことは？」

「うめん、一人分しかないし、シャルルの病人食を作らなきゃいけ

ないんだ

「病人食?『テュノアさん、具合悪いのですか?』」

「うふ、少し風邪氣味みたいなんだ」

……嘘ですけど。

「で、では、わたくしも手伝い……は致しませんわ」

自分の料理の腕を思い出したらしく、表情が暗くなる。

「わ、わかった。やつき、一夏達が食堂に行つたから一夏達と食べ
てきなよ」

咄嗟の言い訳が最低なものになつてしまつた。篤……『ごめん。

「そ、そつこいたしますわ」

そつこいてセシリアは食堂へと足を運び始めた。

僕は自室に入り、冷蔵庫から作り置きの料理とトマトリゾットの材
料を持って一夏とシャルルの部屋に戻る。

「や、シャルル。リゾットだけど、いいよね?」

「う、うん。なんでもいいよ」

僕はキッチンに立つて、リゾットを作りながら作り置きの料理をレ
ンジで温める。そして出来上がった料理を皿に盛り付け、テーブル

まで運ぶ。

「うわあ……」

先にテーブルの前に座っていたシャルルは声をあげていた。

「……リゾットってそんなに珍しい?」

「ううん、そうじやないよ。こんなに美味しいそつないリゾット見たこともないからや」

「盛り付けは良くても味がすべてだからね。食べてみてよ」

そう言つて僕もレンジで温めた料理、シーフードコロアを食べ始める。

「あむっ……お、美味しい……」

あ、あれ?涙流してゐるぞ?

「ど、どうして涙流してるの?ま、まずかった?」

「う、ううん…女として負けた気がして……こんな美味しいリゾット、僕に作れないよ……どうしてそんなに料理が上手いの?」

「んー、父さんが昔にとある高級料亭で働いてて、それで料理を教えてもらつたよ。……ま、父さんがやめた後、その店は半年で潰れみたいだけど」

「優人のお父さんって何者?...?」

「普通の旅好き人かな?」

「へ、へえ…あ、そっちのドリア、美味しいそうだね」

「うん? 食べる?」

やつぱり僕はドリアを一口分取つてシャルルの口に運んでくる。

「ええー?」

「ど、どうしたの?」

「う、うう。なんでもない。あ、あーん」

パクリ。その一口でシャルルは満面の笑みを浮かべていた。

「美味しい…じ、じゃあ、僕のリゾットも!」

「え? いこよ。僕は味見したし。シャルルはシャルルの分で食べて

「や、やア…」

シコン……と少し落ち込むシャルル。何だ、この僕が落ち込ませた
みたいな雰囲気は?

「や、やア…どうかな?」

「本当…じゃあ…はい、あ、あーん…」

「うおー食べさせてくれるんですか！？……って僕がやつたからか。

「うん、我ながら力作だね」

「優人は何でも出来るんだね」

「一人で生きていく分にはね」

「そうかな？」「うひうひうひ……」

「はい、お粗末様でした」

二人で話をしながら食べていると何時の間にか食べ終わっていた。
片付けをしているとシャルルが僕を呼んだ。

「あ、あのせ。過去にフランスに行つたこと……ある？」

「うそ、あるよ」

「……あるよ」

「やつぱりか」

「その……シャルロッタって女の子会つたこと、ない？」

「…………」

「氣づいてたんだ……」

「…………」

僕は話を聞きながら黙々と食器を洗う。

「あなたと会つたあの日、コウトが私を助けてくれた日から私、毎日あの公園に行つたんだ。でも、コウトはいなかつた」

「そり……」

「それから数年して……お母さんが死んじやつて、あの人の政府の人
が私を迎えてきてね、あの人駒になつた日にいつかコウトが助け
に来てくれるつて思つてたんだ」

「…………」

「でも、コウトはこなかつた。当たり前なのにな。それでも何処か
で期待してたのかな。それで、I.S学園に入ることになつて一夏と
優人の資料を見せられた時に驚いた。だって、あのコウトと
瓜二つなんだもの」

「それは……」

「その日から私はI.S学園に行くのが楽しみだつた。本妻に罵られ
ても、どんな厳しい訓練でもI.S学園に行く為に耐えた。それで私はI.S学園であなたの顔を見てずっとあなただけを見てた」

「どうりで視線を感じたわけだ」

「ごめんね。でも、私はあなたとずっと話をしたかった。ずっとあなたにもう一度お礼が言つたかった。でも、正体をばらさない為にシャルロットとしてあなたと話すことが出来なかつたの」

「…………」

「それで、あなたと始めて話した時、あなたはシャルロットって私のことを呼んだ。シャルルじゃなくて」

正直、あのシャルロットで欲しくなかつた。……まさか、こんな形で一夏ハーレムを破壊するハメにならうとは。

「私は嬉しかつた。名前を呼ばれた時、フランスで会つたコウトとIS学園の優人が同じ人だつてわかつたから。そして、私の事を覚えていてくれた。でも、すぐにはお礼が言えなかつたの。一夏がいたから」

「そうだね」

「それに、今回も助けてもらつたから、改めてお礼を言わせてもらうね。……優人、ありがとう。私を助けてくれて」

「お礼なんて…人が困つてたら助けるのが当然でしょ？」

「ふふつ。あの時と同じこと言つてる」

「あれ？ そうだっけ？」

「そうだよ」

そんな和やかな空氣が漂つ中にやつれた一夏が帰つてきて、夜は更けていった。

第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦（前書き）

更新遅れました。

アクセス100,000越えしましたーありがとうございます！

では、続きをどうぞ

かなり、長いですけど。。；

9/23 修正しました。

第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦

シャルルの正体がバレた翌日の放課後、僕は千冬さんのところにいった。

「何? どこかEHSの作成が出来る場所を貸して欲しいだと?」

「はい。実は少し作りたいものがあるんですけど、ちょっと自室だけじゃ無理があるんですよ。あ、出来れば人が少ないとこで」

「……そうだな。第三整備室なんかはどうだ? あそこなら普段から人が少ないし、機材も沢山ある」

「本当ですか! ?」

「ああ。申請は私が出しておこいつ。……通常、製作するもののデータを提出する必要があるので、提出出来そうなものか?」

「うーん……色々端折つていいな」

「構わん。どうせ、お前の事だからな学園側も文句は言えんだろう」

「わかりました」

その後、僕はサーべラス・イグナイトの事を武装面と外装について簡潔に書き、それを学園に提出した。その後、第三整備室に移動。

自動ドアが開く。中は殆ど人がいなく、好都合だった。

(これならなんとかサーベラスを完成させられるかも…)

僕は必要な機材をいくつか手に取り、適当な広い場所に座った。

「出番だよ、ハロ達」

そう言つと量子化されたハロ×3が出てくる。このハロ達はアスベルさんの家にいる時に作ったもので、モデルは〇〇とユーローンだ。ISの製作に役立つと思い、作成した。最初はこのハロ達は命令を聞き、整備マシン・カレルを操作するだけの機械だったのだが、サバニヤの事をすっかり忘れていて、サバニヤの自立AIが作成を終えるとその自立AIをここに移植しておいた。なので…

「ハロー、ユウト。ハロー、ユウト」

「ゴウト、オハヨウ。ゴウト、オハヨウ」

「ゴウト、ドウシタ? ゴウト、ドウシタ?」

喋るのだ。原作通りなので結構愛着が湧く。…なんでアスベルさんの家にいた時に自立AI作らなかつたんだろ…結構後悔。

そんな事を考えながら今度は量子化しておいたカレルを出す。

「よし、ハロ達。カレルを使って僕の手伝いをして」

「「「ワカツタ、ワカツタ」」

それぞれのハロがカレルと合体する。僕は組み立てかけのサーベラス・イグナイトを出した。

組み立てている途中、背後からの視線を感じたので振り返ると水色の髪の毛の眼鏡を掛けた女の子がいた。その子は球状に各キーが配置されたフルカスタマイズモデルの空間投影キー・ボードを両手、両足で入力している。彼女の近くにはISの待機状態のものがあった。こっちを見ていたため、僕と目が合つた。

「……えーと、どうかした？」

「……なんでも、ない、です……」

彼女は自分の作業に戻ったので僕も自分の作業に戻る。…しかし、数分するとまた視線を感じた。僕はハロ達に作業を任せ、後ろの彼女のもとへと向かつた。

「……そんなに熱い視線を送られると困るんだけど……？」

少し冗談混じりに僕が言つ。

「……じめんな、さい」

ばつが悪そうにシュンとうなだれる。

「いや、いいんだけど。何か聞きたいことでも？」

「何かな？」

途端にパツと顔が明るくなり、「クククと首を縦に振つた。

「あの……あれって……ハロ?」

彼女が指差したものは僕の作業中のハロ達だった。

「うん。 ガンダムを知ってるの?」

「う、うん……それに……この前、あなたが使つてたIISが……ガンダムサバー二ヤに似てた……」

「ああ、見てたのか。うん、確かにあれはガンダムサバー二ヤを模したといつより本物に近いものを作つたから」

「つーべりやつて作つたの!?」

さつきまで大人しかつた彼女は急に声を荒げた。

「うーん、それは教えられないよ。企業秘密みたいなものだね」

「そ、そつ……」

ガックリと肩を落とす、女の子。

「あ、あのぞ。君もIIS作つてるの?」

「う……うん」

「見せてもらつてもいい?」

「だ、ダメっ……でも、迷惑かけたから……どひそ……」

「ありがとう」

スペックデータを少し見せてもういちど彼女のT-Sの名前は『打鉄式式』という打鉄の後継機のようだ。でも、まだまだ完成にほど遠い。あ、マルチロックオンシステムも導入予定なのか。未完成だけど。ところでなんで、ひとりで作っているのだろうか？多分、このペースでひとりとなると、あと早くて半年、遅ければ一年はかかるてしまうだろ？それにいくつか数値を打ち間違えている。このままテストしたらほぼ確実に事故が起ころ。

「ねえ」

「……何？」

「……」とかの数値、間違えてるよ

「へ、うそ？……本当だ」

そう言って彼女はキーボードを操作して数値を修正する。

「何で君はエスをひとつで作ってるの？」

「……言いたく、ない」

「……わかった。邪魔しちゃって『めんね』

「」「……めんね……」めんなさい

お互に謝りあつた後、僕は作業に戻る。そして、僕と彼女はお互

いギリギリまで作業をやっていた。因みに、サーベラス・イグナイトは外装と内装は完成した。後はT.E.エンジンの出力調整とシステムの最適化だけだ。システムに関しては問題無いのだが、エンジンについてはかなり時間がかかりそうだ。

「あ、君ーえーと……」

部屋を出て行こうとする彼女を見て僕は呼び止めた。

「な、なに?」

「これ、あげるよ」

そう言つて僕は青いハロを差し出す。

「え、でも……」

「今日は作業の邪魔をしちゃつたからね。そのお詫び」

「そ、それは……お互い様……」

「んー……じゃあ、ガンダムを語れる友達が出来たからその記念かな?

「と、友達……わ、私と……?」

「そ、う。だからこれは友情の証つてことで受け取ってくれないかな?」

「…………わ……わかった……」

「ところで君の名前は？」

「更識…簪…。簪つて、呼んで」

「うん、わかつた簪。僕は——」

「氷川、優人…でしょ？」

「うん、そう。まあ、学園に一人しかいない男子だからわかるか。
……よしつと、はいこれ」

僕は簪のデータをハローに登録し、渡した。

「あ、ありがとう……」

「ハロー、カンザシ。ハロー、カンザシ

「わあああ……」

「気に入ってくれてなによりだよ。簪、何か困ったことがあつたら
なんでも言つてね。あ、今度、僕の部屋でガンダム鑑賞会やるうー。」

「うん…わかつた…！」

返事をした時の簪の顔はとっても可愛らしい笑顔だった。

翌日から僕は時々、簪と会うようになっていた。……第三整備室で
だけど。

そんな事があつてから二日程たつたある日。僕は一夏とともにトイレに向かつていた。

「はー。UJの距離だけはどうにもならないな……」

「確かに、トイレが遠いっていつ現状は回避したいね……」

学園内に男子が使えるトイレが三ヵ所しかないという現状、授業終了のチャイムと同時に中距離走開始なのだ。もちろん帰りも全力疾走しなければ授業に間に合わない。しかし最悪なことに先日『廊下を走るな!』と叱られた。ビックリ……

「なぜこんなところで教師など……」

「やれやれ……」

あれ? ふと曲がり角から声が聞こえて僕と一緒にちょっと注意を向ける。なにせ、聞いた声が千冬さんとUWUと断定できたからだ。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「UJのような極東の地で何の役目があるところのですか!」

普段のUWUからは想像出来ない程声を荒げている。

「お願いです、教育。我がドイツで再びUJ指導を。UJではあなたの能力は半分と生かされません」

「ほひ……」

「大体、この学園の生徒など教官が教えたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、EVAをファッショングループかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かるなど——」

「——そこまでにしておけよ、小娘」

「う……！」

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

「さて、授業が始まると、さつと教室に戻れよ

「…………」

千冬さんの声が聞こえた後、早足で去っていく足音が聞こえた。

「そこの男子共。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよー千冬ねーー

「ぱしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

「学習しなよ……一夏……」

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかつてゐつて……」

「そうか。氷川、こいつの面倒を頼む」

「はい。それじゃあ僕たちは教室に戻ります」

「おう。急げよ。——ああ、それと二人とも」

「「はい?」」

「廊下は走るな。……とは言わん。バレないよ!に走れ」

「「了解」」

（放課後。

三人称視点移行：

「「あ」」

ふたりそろつて間の抜けた声を出してしまつ。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリ亞だった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

ふたりの間に見えない火花が散る。どうやらどうも狙いは優勝らしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどうちが上かはっきりさせとくのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強く優雅であるが、この場ではっきりさせてしまはりませんか」

ふたりともメインウェポンを呼び出すると、それを構えて対峙した。

「では——」

——と、こきなり声を遮つて超音速の砲弾が飛来する。

「「——?」」

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃つて砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名『シユヴアルツェア・レーゲン』、登録操縦者——

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情には歐州連合のトライア

ル相手以上のものが含まれていた。

「……どうこいつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

とん、と連結した《双天牙月》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに、鈴とセシリアの両方が口元を引きつらせる。

「何？ やるの？ わざわざデイツくんだりからやつてきてボロられたいなんて大したマゾつぶりね。それともジャガイモ農場じやそういうのが流行つてんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですが、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？ 犬だつてまだワソと叫びますのに！」

ラウラのすべてを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いたふたりは、それでもどうにか怒りの口を開葉に見いだそうとする。

が、それはおおよそ無駄な労力であった。

「はつ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能がない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちつ——！

何かが切れる音がして、鈴とセシリアは装備の最終安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。——セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが——」

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？一足す一は所詮——にしかならん。下らん種馬共を取り合ひのようなメスに、この私が負けるものか」

「——今なんて言つた？あたしの耳には『どいつも好きなだけ殴つてください』って聞こえたけど？」

「場にいない人間の侮辱までするとほ、同じ歐州連合の代表として恥ずかしい限りですわ。その軽口、一度と叩けぬようここで叩いておきましょ」

得物を握りしめる手にきつく力を込めるふたり。それを冷ややかな視線で流すとラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とつとと來い」

「「上等——」

優人視点移行…

鈴とセシリ亞が第三アリー・ナで会う頃に優人は第三整備室にいた。

目的はサーベラスの武器の作成と簪のI.S.作成の手伝いだ。

簪は少し前までは拒否していたが、作成に詰った時に優人が手伝うとこれからも詰まつたら助けてほしいと頼まれた。

「あー、そこはこの数値ね」

「うん、わかった…」

黙々と作業を進める。

「ガンバレ、カンザシ。ガンバレ、カンザシ」

「うん、ありがとう。ハロ」

「あ、ハロにも手伝いさせる?」

「…出来るなら」

「はい、カレル」

量子化しておいたカレルを取り出す。そしてハロがカレルと合体する。

「〇〇と一緒にだ…」

「結構役に立つんだよ?これ

そしてまた黙々と作業を再開する。僕と簪でシステムや出力の調整、そしてハロは打鉄式式の外装と内装の整備を行っている。

そんな作業をしていくと何やら外、正確にはアリーナへ向かう通路のあたりが騒がしくなつていつた。

「外が騒がしいけどアリーナで何かあつたのかな？」

「アリーナ…モニタしてみる…」

簪は作業を中断して整備室にある大型モニターを操作し、アリーナを映す。

映し出された映像には鈴とセシリ亞、そしてラウラが一対一で戦っていた。それもラウラが優勢で。

「…これ…」

「鈴…セシリ亞…！」

映像を見ていると鈴とセシリ亞のISが展開不能になり、ラウラが止めを刺そうとする。

「く…」

「く…」

気がつくと僕は走り出していた。

(く…PF、サバニヤの起動を…)

(Hラー、指定されたパッケージがありません)

…しまつた。サーベラスの武器データとハロ達とハロ達のカレル

を入れるためにサーバーニャとクアンタのデータを抜き取つたんだつた！

「仕方ない、こいープレイヴハーツ！」

IISを起動し、全速力でアリーナに出ると鈴とセシリ亞を背にラウラと対峙する一夏がいた。

「一夏……」は任せてふたりを…」

「優人！？だけどよ！？」

「いいから！」

「ツ！わかつた！」

ふたりを抱える一夏。そしてピットへ戻るつとするが…

「逃げるな！」

ラウラの大型実弾砲が火を噴ぐ。

キンッ！

僕はその実弾を斬つて一夏を守る。

「悪いけど、僕が相手だよ！」

「貴様……ツ！」

突然の別方向からの攻撃を避けるラウラ。攻撃を飛んできた方向を見ると、シャルルがいた。

「優人！」

「シャルル！ 君も下がってて！」

「でも！」

「いいからーッ…！」

「はあああああ…！」

僕とシャルルのやつとつの最中にラウラはワイヤーブレードを飛ばしていく。

「しまった！」

僕はよそ見をしていたせいで手に持っていたエクスカリバーをワイヤーブレードで弾き飛ばされてしまった。

「でもっ…」

僕はケルベロスショットを構えて一連射する。

「ふつ…」

あっさりと躲されるが、僕はその隙に瞬時加速を使ってエクスカリバーを回収する。そして、回避体勢から攻撃体勢に戻ったラウラは僕を狙うがまた別方向からの攻撃に止められる。

「大丈夫！？ 優人！」

「あ、ああ、ごめん、シャルル」

「ちい…！」

「…僕に策がある。シャルルは離れたほうがいい」

「え？ でも…」

「大丈夫、僕は負けないよ」

「わかった…！」

シャルルは大人しく下がってくれた。

「君の機体のAICはかなり厄介だね。実弾が効かないからさ」

「なんだ？ 命乞いか？」

「いー や、違うよ。それ！」

「！？」

突然、僕の背中に巨大なコンテナが現れる。これはミサイルコンテナだ。これは一回だけ使える戦法のために用意していた。ちなみに中にはGN粒子たっぷりのミサイルがある。

ドドドドドン！！！

一斉にミサイルが発射される。

「そんなものなど！」

いくつかはA-Hによって止められる。が、その他は爆発して煙幕を振り撒く。

「煙幕だと！？だが、ハイパーセンサーを使えば…なにつ！？」
スモーク

現在、この煙幕内と周辺にGN粒子が散布されているため、ハイパー・センサーは誤作動を起こしている。

「だが、やつもこれではみえまー」

「アキラ君の...」

僕はイノベイターの力を利用し、微かな脳量子波を読み取つて、僕を見失つているラウラを後ろから斬りつける。

「がああああああああ！？」

「続けてくらえ！ファングスラッシュヤー！！」

ラウラが僕に斬りつけられ、距離を取るまでの間にファングスラッシュを投げつけた。念動力に近い力の脳量子波でファングスラッシュを操る。そして、大型実弾砲の砲身を切り裂いた。

「...」

だんだん煙が晴れてきて、同時にGN粒子の濃度が低くなつていき、ハイパー・センサーが元の調子に戻る。

「くっ…あああああ…！」

突然ラウラは眼帯を取り、ファングスラッシュ・シャーをプラズマ手刀で弾く。それに気づいた僕はファングスラッシュ・シャーを自分の手元に戻す。

眼帯が取れたラウラの目は金色に輝いていた。しかし、ラウラは驚きを隠せない顔になつていた。

「貴様…！貴様もヴォーダン・オージュを持っているのか…？」

何時の間にか僕の目はイノベイターの目になつっていたようだ。

「いや、君とはまったく違う力さ…」

そう言つてワイングセイバーを開ける。ワイングセイバーは一直線にラウラの掛けて飛んでいく。

「はあああああ…！」

ラウラは眼帯を取った途端に反応速度が速くなり、僕のワイングセイバーを躲しながらこちらへ迫つてくる。

相手はプラズマ手刀を構えてきてるので僕もエクスカリバーを構えるが、プラズマ手刀と別の剣が交わつた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん…？」

僕の目の前には普段と同じースーツ姿でEIS用近接ブレードを軽々と扱う千冬さんが立っていた。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

「わかりました」

僕とラウラは素直に頷き、EISの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され、弾けて消えた。

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

何時の間にか戻ってきていた一夏が素で答えていた。

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

返事し直す一夏にシャルルが追従する。そして、千冬さんは改めてアリーナすべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツー！と千冬さんが強く手を叩く。それはまるで銃声のよつて鋭く響いた。

第十七話 地獄の番犬とメガネの女の子と模擬戦（後書き）

お気づきの方はいると思いますが、ラウラ戦での煙幕からの奇襲は〇〇のセカンドシーズンの刹那対リボンズ戦が元です。

第十八話 生徒会役員になりました（前書き）

いつも、キンケドウです。

それでは続きをどうぞ。

第十八話 生徒会役員になりました

「…………」

場所は保健室。時間は第二ニアリーナの一件から一時間が経過していた。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむつすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくてよかつたのに」

「あのまま続ければ勝つていましたわ」

「一夏に感謝すると思えればこれだった。もうちょっと感謝の気持ちがあつてもいい気がする。」

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことがないで安心したぜ」

「EVAの保護装置のおかげだね」

「こんなのが怪我のうちに入らなーーいたたつーー！」

「そもそもこいつやって横になつてこること自体無意味ーーつひつひ

ー！」

「……。（バカなんだろ？）一夏の思考

「バカつてなによバカつて！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏つて心を読まれやすいのか？

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」「あ、シャルル。『苦労様』」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入るときに面白いことを言っていた。一夏は聞き取れなかつたみたいだけど。だが、鈴とセシリアは僕のようにしつかりと耳にしたようで、かああつと顔を真つ赤にして怒りはじめた。

「ななな何を言つてるのか、全つ然つわかんないわね！」
「これだから欧洲人つて困るのよねえっ！」

「べべつ、別にわたくしはつ！そ、そういう邪推をされるといさか氣分を害しますわねっ！」

ふたりともまくし立てながらさらに顔が赤くなつてゐる。なほはは、モテる男は辛いな、一夏よ。（リア充は死ね！）：今ラウラの声が聞こえた気がした。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

流石フオローの天才、シャルルだな。フオロ方フオロ四郎に匹敵する程じゃないか？

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですが、いただきましょうつづ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひつたくるよつに受け取つて、ペツトボトルの口を開けるなり「ごくごく」と飲み干す。ネットで知つたんだけど、冷たいものを一気に飲むと体に悪いらしいよ。

「ま、先生も落ち着いたら帰つていひつて言つてるし、しばらへ休んだら——」

.....
—
—

「な、なんだ？何の音だ？」

「……嫌な感じがする。じゃ、シャルルと一夏、ここはふたりで力を合わせて解決してくれ！」

保健室の窓を開けて外に出る僕。

「あ、おい！」

保健室から走って逃げると、保健室のほうからドカーン！と大きな音が聞こえた。そこに居なくてよかつた気がする。

僕は走り続けて第三整備室に着いた。

「ただいま」

「え… エレ… ル、 エカエニ…」

扉を開けて『ただいま』と言つと、簪が僕を出迎えてくれた。見たところ、あれから殆ど作業は進んでいないようだ。しかも僕を見てホッとしている。もしかして…

「あー、ごめん。心配かけた？」

「ううん、大丈夫だつて、確信してた」

「何時の間にか僕は簪から絶大な信頼を得ていたのか。うれしいな（何時の間にか僕は簪から絶大な信頼を得ていたのか。うれしいな）」

「えー？ もう、もう、もう、もう、」

顔を真っ赤にして俯く簪。……恥ずかしいよね……うん

「あ、あー、ところで、何が変わったことがあった？」

え、え、と、そ、た、さ、き、生徒会の人が呼んでた。

誰を？

一
ゆ
ひ
氷川
くん

堅いなあ……あの時みたいに優人でいいのは

「あの……時……？」

「ほら、僕が第三アリーナに行くとき、ビセイを紛れて僕の名前を呼んだでしょ？」

「え……聞こえてたんだ……」

「うん、まあね。ところで、生徒会の人気が呼んでるって？」

「うん……優人がここに来たら、生徒会に来てほしいって……」

「……わかった。それじゃ、僕はいくね。HSの作成、頑張って」

「うん……」

僕は第三整備室を後にし、生徒会室を指した。

……結論を述べましょ。迷いました。はい。ろくに調べもしないで出ていったのがバカだつた……

「生徒会室って……どこだよ」

「あら? あなた、生徒会室に用があるの?」

何となくつぶやいた言葉を聞かれたのか、後ろから声をかけられた。振り向くと知らない女子がいた。リボンの色から察するに一年生だ。もう一度顔を確認すると見覚えがある気がした。うーん、思い出せない……

「……誰ですか」

見覚えあるけど知らない人だ。どうじよ。

「あら、私を知らないの？私は生徒会長よ。名前は——」

ちよつと自称・生徒会長が言葉を続けようとしたところで、前方から粉塵を上げる勢いの女子が竹刀片手に襲いかかってきた。

「覚悟おおおおつーー！」

竹刀を持った女子は明らかに自称・生徒会長を狙っていたが、僕は自称・生徒会長の盾になるように立った。そして常に片手で持ち歩いている木刀で相手の竹刀を弾き、木刀の柄を叩き込み、気絶させた。

「こきなり襲いかかってみると、発情期ですか？」「ノノヤロー！」

……一度言つてみたかった。

「おおー、やるね。君」

「！」の程度なう

「へえー……今日は一人か」

「？何故生徒会長さんは狙われてるんですか？」

「それは……って、あら、あなた冰川くんじゃない。その話も含めて話してあげるから生徒会室に行こうか」

「はあ……」

その後、自称・生徒会長に連れられ、生徒会室に着いた。…自称・生徒会長と会つた場所から一分もない場所でしたよ、はい。

「まあ、適当にかけて」

「はい」

近くにあつた椅子に僕は腰をかける。

ガチャリ…

ドアの開く音がして振り返る。

「ただいま戻りました、会長」

「ん、」苦労様

入ってきたのは三年生の女子だった。眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事はできる』風の人で、片手に持ったファイルが非常によく似合っている。そして、いつかを見る。

「あら、こんばんわ、氷川くん。私はお嬢様に仕える布仏 虚^{ほう} よろしくね」

「はい、よろしくお願ひします。…ってお嬢様？生徒会長が？」

「虚、お嬢様はやめてよ」

「すみません、会長」

「あの〜…お嬢様つて？」

僕が疑問に思ったことを聞いへ。

「それはひ・み・つ」

「あれ？思つたよりドキッとしたな……

「んもう、リアクションが薄いなあ……おねーさん、泣こむかも……」

「はあ……」

「どうこのアクトショーンが正解なんだろうか？」

「素つ気ないわね……まあいいわ、改めて自己紹介するわね。私は現生徒会長の更識樋無よ」

「自称じやなかつたんか。あれ？更識？」

「更識？簪との回じ名字？」

「簪ひやんは……私の妹よ……」

『氣のせこだらうか、簪のこととを口にすると途端に暗くなつた気がした』

「それに、布仏つて本音さんと回じ名字——」

「ああ、やういえばあなたは本音と回じクラスだったわね。やうよ、本音は私の妹よ。あ、今お茶を出すわね」

「あ、どうせ」

…普段の本番さんから『んなお姉さんは想像出来なかつたぜ。

「はー、じゅん」

「あ、どいつも」

生徒会長も紅茶の入つたティーカップを受け取り、一口飲む。僕も香りを楽しみながら一口…「これは…? 紅茶…

「で、氷川くん、早速本題に入るけどいいかな?」

解説出来なかつた…まあ、いいか

「はい。それで…僕が呼ばれた訳は?」

「うん、今回の学年別トーナメント戦の事でね、お願ひがあるの」

「トーナメント戦?」

「ええ。今回は前回のクラス代表戦の一の舞にならなこよつにタッグマッチに変えたの」

「それは初耳ですね」

「あら、やうだつたの?まあ、いいわ。それで、念には念をと思つて、あなたには今回のトーナメント戦に出場せずに警護の方にまわつてほしの」

「警護…ですか?」

「そう。あなたはIRSを一台所持していて、両方強力なのは知ってるけど、片方はかなりオーバースペックとわかっているわ。だから警護にあたつてほしいの」

「でも、警護にまわるだけだったら別に僕が出場してもいいんじゃ……」

「実はね、警護にまわつてもう一つの理由があつて、それはあなたが強過れるってことなのよ」

「僕ですか？」

さつき僕のIRSが両方強力だの言つてたが、プレイヴは他のIRSより少し優れてるだけだと思つてたんだが……

「ええ。上の学年の専用機持ちのペアならまだわからないけど、同学年の専用機持ちのペアはあなたには勝てないと思つてね、そのバランス調整のためよ」

え、僕の腕はそこまですげいと見られていたのか。

「……わかりました。眞田は警護にあたりましょ」

「意外にすんなりと受け入れるわね？」

「確かにライセンスを使えば出場出来ないと宣告されても出場出来ますけど、それよりも警護にあたつた方が他の生徒達の為になるんでしたらそっちを優先しますよ」

「ありがとね。あ、後もつひとつ」

「何ですか？」

「あなた、生徒会に入らない？」

「……はい？」

突然何を言つてゐるんだこの人は？

「あなたの成績なら生徒会に入つても問題無いだらうし、私もちょっとあなたに手伝つてほしいこともあるから」

「手伝つてほし」と？

「ええ。雑務だけど」

「それだけ！？いや…待てよ…」

「このまま生徒会に入ればもしもの時に融通がきくようになるか？いや、それはライセンスで間に合つているな。んー、でも生徒会に入ればしつこい部活の勧誘を避けられるか？」

「冗談よ。私があなたに手伝つてほし」とは織斑一夏くんの護衛

「よ」

「一夏の？」

「ええ、彼はあなたのように強くないからね、誰かが守らなくちゃならないの。勿論、一夏くんにも強くなつてもう予定だけね」

「

「あなたは…何者ですか？」

「この発言、明らかに表の舞台の者とは思えない。恐らく裏の——
「察しがいいわね。そう、私の家、更識家は対暗部用暗部よ。そして私はその当主って訳」

「なるほど…大体目的はわかりました」

とある暗部が一夏を狙つてゐるから守らなければならないつてわけか。

「感がよくて助かるわ。で、生徒会に入つてくれるかな?」

そつ言いながら、手に持つた扇子を口元に寄せる樋無さん。

「…わかりました。生徒会に入りましょ」

暗部に關われば情報も入つてくるようになるからな…

「うん、ありがとね氷川くん そしてこれからよろしく!」

そして扇子を広げる樋無さん。そこには『感謝』といつ文字が書いてあつた。

「…それで、生徒会での僕の役職はやっぱり雑務ですか?」

「ううん、優人くんはかなり強いからね。副会長として私をサポートしてもいいわ」

「副会長ですか……で、主な仕事はやはり一夏の監視ですか？」

「そこいら辺はいいわ。学園にいる限り安全だろ？ 他には……特にこれと書いて仕事はないから普段通り生活して構わないわ」

「それじゃ、必要な時に僕の力を使いつと？」

「そういうことね」

「なるほど……では、大体話は終わつたみたいですし、そろそろ帰つてもいいですか？」

「ええ、構わないわ」

僕はカツブに残つてゐる紅茶を飲み干し、席を立つ。

「虚先輩、紅茶美味しかつたです。それじゃ僕は——

ドアノブに手を掛けた時だつた。

「氷川くん」

名前を呼ばれて振り向くと真剣な顔で櫛無さんが僕を見ていた。

「私の妹を……頼める？」

それは仕事などではなく、簪の姉としての頼みなんだとすぐにわかつた。

「……はい。でも条件があります

「何？」

「簪と何があつたかは知りませんけど、絶対、簪と仲直りをして下さい。分かり合えないままなんて悲しいだけですから」

「…わかつたわ、絶対に簪ちゃんと仲直りしてみせる」

その時の楯無さんの顔はとてもきれいだった。

そして僕は生徒会室から出て行つた。…あ、生徒会長がなんで狙わ
れてるのか聞くの忘れた。

第十九話 P.F強化？計画（前書き）

いよいよ第一巻の終盤に入りました。

あの青いヒーローのアイテムが登場です。

お詫び。閑話の話は本編に関わらないと言いましたが… 考えた結果、
関わることとなりました…すみません。

それでもいいところ方は続きをどうぞ。

んなんだつたらやめちまえ！糞作者という人は即戻るボタンを押し
てください…

第十九話　PF強化？計画

生徒会室を去った後、僕は部屋に籠っていた。今考えているのはPFの容量についてだ。PFは基本武装を持たないため通常のISよりも容量が多いのだが、主武装となるパッケージが最大でも2つしか入らないことが問題点だ。

今日の鈴とセシリアを助ける際にサバーニヤを使おうとした時にはPFの中にはサバーニヤが無かつた。これはサーベラスのパーティとハロとハロ達のカレル等を入れるためにデータを抜き取ってしまったためだ。

普段使わないパッケージはパソコンの外付けHDDのようなもの（以下HDD）に一時的に入れてある。最初はこれを接続しながらISを開く展開すればいいと思っていたのだが、実際に展開してみるとHDDは待機状態と同じ扱いにならず、物質のままだった上に展開に15秒程のタイムラグが生まれた。タイムラグはHDDの中身とPFの中身を入れ替える作業が起こったためだ。いざという時の対処にならない上、HDDを破壊されではたまらない。

「どうしたものかね~」

まったくいい案が思い浮かばず、その日はベッドに倒れこみ、そのまま寝てしまった。

翌日。

僕は教室に入つて席に着いてすぐに考えを始めた。

（うーん…どうすれば…）

「あ、優人。なあラ・ウ・ラのA・I・C対策について聞きたいんだけど?」

「しかし、HDDと一体化をせるとなるとかなり大型化するからな…しかも、HDDで容量増やしてもうつぐらいが限界だし…ブツブツ…」

「おーい? 優人? 優人!!」

突然の大声に驚いてしまった。どうやら一夏は僕が考え事をしている時にずっと話かけていたようだ。

「な、何? 一夏?」

「だからー! ラ・ウ・ラの対策を教えてくれよ!」

「あ、ああ、あれか。君の零落白夜で斬りつけ。はい終」

「それじゃ避けられちまう可能性があるじゃねーか…昨日の一件があるんだから真面目に答えてくれ!…」

昨日…? ああ、保健室に置き去りにしたことか。

「あれね。結局なんだつたの?」

「女子達が俺とシャルルにタッグを組まないかって来たんだよ」

「それで? どうしたの?」

「俺とシャルルで組むことにした」

ああ、原作でもそんな感じだつたかな？まあ、ビリでもいいけど。

「そりやよかつた。今回のタッグマッチに僕は出られなくなつたからね」

「なんでだ？」

「生徒会長から出るなと言われたんだよ」

「生徒会長から出るだよ」

「秘密。あ、ラウラ対策はちゃんと考へてるよ。武装だけ」

「武装だけかあ……まあ、後はシャルルと打ち合せだな」

「あ、そういえばシャルルは？」

「ん、忘れ物があるから取りに行つたぞ？」

「そりが……」

（あ、今はP.F.だよ。うーん、小型で大容量か……そんな未来技術みたいのがあるわけ無いか……といつも前世に比べたらこの世界はかなり発展してるからなあ……ん？待てよ……未来技術……！……そうか！その手があった！――）

僕は教室の窓を開けて身を乗り出した。

「おー！優人……どうしたんだ！？」

後ろから一夏に声をかけられる。僕は振り向き、一夏に伝言を頼んだ。

「今日は僕早退するからー山田先生と千冬さんによろしくー」

僕は窓から飛び出し、クアンタを起動した。え?なんでクアンタがあるかって?そりゃ、中身を入れ替えたからに決まってんでしょ。

ソーデビットを開け、量子ゲートを作る。目的地はあのムーンレイスっぽい場所だ。

ゲートをくぐるとすぐに縁が広がった。僕はクアンタでゆっくり下降し、地面に着地してクアンタを解除した。そしてパーティ置き場へとむかつた。

「えーと…これじゃない…これでもない…」

カタカタカタカタ…とキーボードを弾く音だけが聞こえる。…やつぱり、神様に頼んでないものは入っていないのか?

パーティ置き場のパソコンを操作し始めて数十分。やっと見つけた。

「あつた…! PETとチップ!!」

僕が探していたのはロックマンエグゼシリーズで活躍した携帯端末機、PETだ。これならP.F.に容量に余裕を持たせることが可能になる上、最新型の携帯も手に入るという一石二鳥作戦だ。

僕の考えたことは「うだ。未来技術という単語から前世と比べる他

に思い浮かんだのはロックマンエグゼだった。ロックマンエグゼのアニメではファルザーとグレイガのデータやソウルユニゾンのデータをチップに移していくことを思い出したからこれをPFに活かせないか?と。

「PETをまずは作るか

機械からPETの設計図（神様からもらった脳内設計図にはなかつた）を取り出し、PETを造った。そしてそれをPFの待機状態になるよう改造した。因みにPETのデザインは最終章6のデザインだ。5と迷つたが、こっちのほうが高性能そうだし、スマホに近いデザインだったから、6のデザインにした。ロックマンはない入れたいけど。

「よし、問題のパッケージだ…」

僕はPETの中のパッケージのデータをブランクチップに書き込む。

……結果は……

成功だった。

クアンタのデータはすっぽりと入り、チップのなかにはギリギリもう一つのパッケージが入りそうな容量だ。他世界とはいえ、未来技術すげえ……流石、ファルザー やグレイガのデータを入れる事が出来た技術だ。

試しにチップをスロットインしてIDSを展開してみる。

ほとんど前と同じくらいのタイムで起動に成功。展開の時のイメージはロックマンエグゼのアニメのクロスフュージョンを思い浮かべてくれればいい。

その後、僕は他のパッケージもチップ化してパーティ置き場から対ラウラ＆ある意味一夏専用武装のパーティを取り出して地球に戻った。今回は田帰りすることが出来た。

コンコン

「はーい? って、優人! ? 今日どこに行つてたの! ?」

一夏の部屋をノックするとシャルルが出て來た。

「え、秘密や。それより一夏歸る?」

「むー… 一夏ならシャワー浴びてるよ」

シャルルが不機嫌そうな顔をする。なんで?

「そうなんだ。じゃあ待とつか

「なら、僕お茶淹れるね」

「ありがとつ

僕は椅子に腰をかけるとシャルルが日本茶を持ってきてくれた。

「はい、優人」

「ん、ありがとう」

お茶を一口。うん、美味しいね。シャルルと話す話題も無く、しばらく、沈黙が続く。

「…ね、ねえ…優人。今度さ…僕と買い物に、行つてくれない?」

モジモジしながらシャルルが僕に聞いてきた。

「ん? 買い物? いいよ」

僕が言うと途端に顔をパッと笑顔にした。

「本当に…? 絶対! 絶対だよ…?」

「う、うん…」

ハイテンションなシャルルに少し引いてしまつ僕。そんなやうりをしてると風呂場のほうからガラガラと音が聞こえた。

「シャルル~出たで~?」

風呂場の方から一夏が出て來た。

「や、一夏。君にプレゼントだよ

「お、優人。何くれるんだ?」

「対ラウラ戦用武装や。」それを白式の待機状態の物に装着して
くれ

そう言つて僕はポケットから小さな黒いブロックを取り出す。

「これは？」

「僕が試作してるエラの容量増加装置。でもこれは一度使うと使い物にならなくなる上、武装が一つしか入らない不良品なんだ」

このパートは前回の鈴とセシリアを助ける時に使ったミサイルが入っていたものを修理したものだ。正直、今後使う気がないから修理する必要はなかったけど、親友の為だからね。

「へえ？ ジヤあこの中に入ってる武装が本番でしか使えないってことか？ 無茶あり過ぎるだろ」

「心配しなくても一夏が手に取ればすぐに使い方のわかる武装を」

「ねえ、優人。どんなの？」

「んー……やっぱり、ネタバレしておいた方がいいか……その中身は一夏なら知ってると思うがビームマグナムだ」

「ビームマグナム？」「ビームマグナムー？」

シャルルは頭にマークを浮かべている。それに對し、一夏は興奮している。

「そ、強力なビーム兵器さ。あ、使い終わったら僕に返してよ？ そ

の技術は量産されると色々とまちがいから

「強力なビーム兵器つて…各國が試験段階の武器を軽々と作る優人
つて本当に何者!…?」

シャルルは驚きを隠せないようだ。まあ、普通の反応なんだひづけ
ど。

「まあ、気にしないで。使い方はH.I.I展開後に指示を出せば、展開さ
れるからね」

「軽くあしらわれた!…?」

突っ込みもキレがいいね。流石優等生。

「わかった。でも、なんでビームマグナムなんだ?」

「理由はただ一つ、A.I.C.はビーム兵器には弱いんだ。そしてその
出力が高ければ…?」

「あ! A.I.C.を貫通して、ダメージを『えられる』

シャルルが僕の質問に答えた。

「ごめん。弾は全部でリロード分を含めて15発。一夏の知ってる
通りや」

「わかった」

「後、これはアドバイスだ。ビームマグナムを展開するのは一対一、

または一対一の時がベストだよ

「なんでだ?」

「一夏は遠距離武器に慣れてないし、それに一夏のHSにはセンサー・リンクがついてないからね、一夏が当て易くするためににはターゲットを一つに絞らなきゃいけないんだよ」

シャルルが僕の補足説明をしてくれた。

「成る程な。じゃあシャルル。本番ではサポート頼むぜ」

「まかせて」

「んじゃ、俺はこれで」

「ああ、これ、サンキューな」

そう言つて一夏は僕があげた容量増加装置を見せる。

「うん、それじゃ一人とも頑張つて」

「「おー! (うん)」」

僕は一夏の部屋を後にした。

そして……学年別トーナメントの戸がやつてくれる……

第十九話 P.F強化？計画（後書き）

色々とグダつて申し訳ない…作者のわがままにカオスな展開になってしまってます…ごめんなさい…

第一十話 学年別トーナメント -一回戦、試合開始-（前編）

今回は原作丸写しがばかりで量がかなり多くなつてしましました。
すみません。

では、続をどうぞ

第一十話 学年別トーナメント、一回戦、試合開始！

一夏視点…

六月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遙かにすぐく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやつと開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに男子組は例によつてこのだだつ広い更衣室をふたり占め（優人は用事があるらしく、既にいなかつた）である。気前のいいことだ。たぶん、反対側の更衣室では本来の倍の女子生徒を収容して、大変なことになつてゐるのだろうけど。

「しかし、すゞいな」つや……

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各國政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が來ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チエックが入ると思つよ」

「ふーん、『苦労なことだ』

あんまり興味がなかつたので話もそこそこに聞いていたのだが、シヤルルには俺の考えていることが筒抜けだつたらしい。くすつと笑

わかれてしまった。

「一夏はボーデヴィッシュさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

鈴とセシリアはやはりトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得ない状況になつていて。普通の生徒ならござしらず、ふたりは国家代表候補生でありその中でも選りすぐりの専用機持ちである。それがトーナメントで結果を出すどころか参加すらできぬいといつのは、おそらくふたりの立場を悪くする要因になるだろう。一度、優人になんとかならないかと聞いたが…

『直せる』ことは直せるけど、その国に僕が修理したなんて事実がどこからか漏れたら色々と面倒だから直したくない』

と言われてしまった。

「自分の力を試せもしないつていつのば、正直辛いだひ」

例の騒動を思い出し、俺は無意識のうちに左手を握りしめていた。それがあまりに力がこもつていたらしく、シャルルがさりげなく重ねた手でそれとほぐしてくれる。

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく優人を除いた一年の中では現時点での最強だと思つ」

「ああ、わかってる…さて、じつちの準備はできたぞ」

「僕も大丈夫だよ」

お互にT/Sスーツへの着替えは済んでいる。俺はT/S装着前の最終チェック。シャルルは相変わらずの男装用スーツ（ボディラインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい）の確認をそれぞれ終えた。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

どういう理由なんだか知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかつたらしい。本当なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな

「え？ どうして？」

「待ち時間に色々考えなくとも済むだろ。こいつの勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっとと考えがマイナスに入つてたかも」

なんともシャルルらしい考え方だ。この一見正反対の俺たちだからこそ、馬が合うのかもしれない。しかしあ、やっぱりシャルルが俺に会わせてくれているんだろうなとは思う。

ペアでの特訓を重ねて改めて思ったが、シャルルはすごく性格がいい。そして優しい。俺の周りにはおおよそのなかつたタイプなのだ。（優人は優しい時もあるけど）多少大げさに女神か天使に見えてし

まつてもそれは仕方がないだろ？。そうだ！誰が俺を責められると
いつのつか！

『あ、対戦相手が決まったみたい』

モニターがトーナメント表へと切り替わった。俺もそれまでの思考
は一旦停止して、そこに表示される文字を食い入るように見つめた。

「「——え？」」

出てきた文字を見て、俺とシャルルは同時にぽかんとした声をあげ
た。

一回戦の対戦相手はラウラ、そして筹のペアだつたのだ。

優人視点移行：

現在、僕はアリーナの上空にいる。装備してるのはプレイヴハーツ。
ツ。え？ なんでPFじゃないかって？ だつてさ～プレイヴハーツの
IS装着時間増やしつかないといつ第一次^{セカンドシフト}移行するかわからなくな
つちゃうじゃないか。…まあ、本当の理由は樋無さんに使うなって
言われたからだけど。暇だし、その過程を思い出そう…

『へ？ あの青い機体と緑の機体は使わないで欲しい？』

『ええ、あれを使ってしまふと様々な機器に障害を起こしてしまふ
でしょう？だからよ』

『むー、それじゃあまり僕が警備にまわる意味がないんじや？』

『大丈夫よ。あなたのもう一つのISでも十分強いから それにも

しもの時はその青い機体とか使つてもいいわよ

『クアンタとサバーニヤは本当の切り札って訳ですね』

『そういう事。じゃ、何かあれば連絡するから、アリーナ上空で警備を頼むわね』

…とまあ、こんな感じでした。え？ だつたらサーベラスはどうしたつて？ まだエンジンの調整がうまくいかねんだよー！ クソッタレ！ ！ 何が安定度の増したT-Eエンジンだ！ めちゃくちゃ安定しないじゃないか！ … 実際はもうすぐ調整出来そうなんだが…

…あ、トーナメント表が出来たみたいだ。僕のハイパーセンサーに映し出される。… 何という僥倖だろうね、一夏？ 初戦がいきなりやりたい相手なんて。

数分後、アリーナに一夏たちが現れた。

一夏視点移行：

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたといつものだ」

「そりゃあなによりだ。いつも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一……開始！

「「叩きのめす！」「」

俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

試合開始とともに俺は瞬時加速イグニッシュ・ショントーストを行う。この一手目が入れば戦況はこちらの有利に大きく傾く。

「おおおつー」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。——来る。

俺はラウラと直接戦った鈴とセシリアの意見を聞き、話しあった結果、確実な手段でAICを破る方法は思いつかなかつた。
それなら、手段は一つ。——意外性で攻める。

「くつ……ー」

しかし、その程度の戦略など読んでいたのだろう、俺の体は腕を始めて、胴、足とAICの網に捕まえられる。押して引いても動かない。見えない腕に掴まれたかのように、身動き一つ取れなくなってしまった。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな

「……そりゃどうも。以心伝心で何よつだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろつ

ああ、わからたくないが、想像はつく。ガキン！と巨大なりボルバーの回転音が轟き、白式のハイパー・センサーが警告を発する。
慌てるなよ。何も一対一って訳じやないんだ。——な？

「させないよ」

シャルルが俺の頭の上を飛び越えて現れる。同時に六一口径アサルトカノン『ガルム』による爆破弾の射撃を浴びせた。

「ちつ……！」

肩のカノンを射撃によつてずらされ、俺へ向けて放つた砲弾は空を切る。さらにたたみかけてくるシャルルの攻撃に、ラウラは急後退をして間合いを取つた。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へと移り、左手にアサルトライフルを呼び出す。光の糸が虚空で寄り集まり、一秒とかからず銃を形成した。

これこそがシャルルの得意とする技能『ラピッド・スイッチ高速切替』だ。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。それはシャルルの器用さと瞬時の判断力があつてこそ光る。

「私を忘れてもらつては困る」

ラウラへの追撃を遮るように打鉄を纏つた箒が現れる。防護型ISである証明とも言つべき実体シールドを展開し、銃弾を弾きながらシャルルへと斬りかかった。

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないとな！」

ラウラのAICから開放された俺はすぐさまシャルルの背中へと瞬時^{イグ}加速。^{ゾン・アースト}ぶつかる瞬間、くるりとシャルルが宙返りをしてお互いの場所を入れ替えた。このコンビネーションは特訓の賜だと言える。ガキンッ！

俺と箒、互いの近接ブレードがぶつかり合つて、火花を散らす。俺は箒と刀を何回となく打ち合いながら、スラスター推力を上げた。加速度を増した斬撃は徐々に箒を後方へと押していく。

「くつーこのひ……！」

押され続けたことに焦れた箒が大きく刀を頭上に振りかぶる。——ここだ！

「シャルル！」

「うん！」

ギイインッ！左手を添え、真横にした雪片式型で俺は箒の一撃を受け止める。その刹那、俺の背中にずっと控えていたシャルルが両脇から手を伸ばす。その手に握られているのは面制圧力に特化した六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタディ』二丁。この至近距離ならまず外しはしない。

箒が青ざめるのがわかつたが、もう遅い。シャルルは引き金を引いた。

「！？」

ふつと突然目の前の箒が消える。ショットガンの連射はむなしく空を切った。——何が起きた？

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードのひとつが箒が箒の脚へと伸びていて、アリーナ脇まで遠心力で投げ飛

ばす。どうやらさつきの緊急回避はこのワイヤーによる牽引だったらしい。

「なつ、何をする!」

しかし、味方を助けたとはほど遠いラウラの行動は、本当にただ邪魔だからどかしたというだけだったようだ。床にたたきつけられた篝が怒声を発する。

しかし、当の本人は聞く耳持たず。すでに俺たちへの攻撃を始めている。

プラズマ手刀を展開したラウラが左右から連続で斬りかかるてくる。

「数の差で私が有利だな」

「たかが一倍程度で!」

確かに、このラウラ・ボーデヴィイッヒの実力は確かに化け物じみている。今現在こうして俺との接近戦を繰り広げながら、同時にワイヤーブレードを駆使してシャルルを牽制、俺から引き離している。六つ同時には操っていないものの、上手く順番に射出と回収を行つて連射による多角攻撃を繰り広げていた。だが、優人との訓練に比べればどうということはない。あいつとの訓練ではラウラのワイヤーブレードより素早く動く、六つの遠隔操作の剣と優人自身の相手を同時にしていたからだ。

『シャルル、無事か?』

『一夏じゃ。すぐにサポートに入るからね』

『いや、いい。このまま例の作戦で行こう』

『……。わかつた』

ワイヤーブレードを捌きつつ、プライベート・チャンネルで短くやりとりを交わして、俺たちはあらかじめ決めていた作戦へと移る。それは『簫を先に倒そう』作戦だ。——苦情は後で受け付けよう。この作戦を決めたのは単純な理由だった。とにかく、ラウラの戦い方は一対多に特化している。つまりそれは自分側が複数での戦いを想定していないということだ。なので、まず簫を助けることはしないだろう。

それなら先に簫を撃破、一対一の状況でたたみかけるをそれでもラウラは前述した通り一対多の状況で戦えるだけの能力を持っている。——けれど、そこが落とし穴だ。ふたり組というのは一足す一だが、答えが一とは限らない。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なつ……！？バカにするなつ！」

ラウラの射程圏内から離脱したシャルルはすぐさま簫へと間合いを詰める。よくわからないが挑発だったのだろう、さっきの一言でいきなり簫は頭に血が上った。

ガギンツー簫の刀を、シャルルは瞬時に呼び出した近接ブレード『ブレッド・スライサー』で受け止める。そしてそのまま左手の『レイン・オブ・サタデイ』が火を噴いた。

「くつ……！」

射撃の印象が強いシャルルだが、ともかくにもその能力の最大の特徴は『器用さ』なのである。格闘も人並み以上にこなす上、そこ

への『高速切替』。斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ちかえての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。押しても引いても一定の距離と攻撃リズムを保ち、攻防ともに高いレベルで安定したその構えを突破することは容易ではない。

この戦法を『砂漠の逃げ水』^{ミラージュ・デザート}と呼ぶらしい。いわく『求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、緩やかなる褐色の死へと進む』……なるほど、納得だ。

「先に片方を潰す戦法か。無意味だな」

ラウラは籌を数に入れて無いのだらう。けれど俺たちにとつて意味はある。とりあえず今の俺の役目はラウラの猛攻を耐え凌ぐことだ。

「どうだろ？ よー」

両手プラズマ手刀+ワイヤーブレードの波状攻撃。これを捌くのは容易なことではないが不可能なことではない。俺は全身を使い、ラウラに食らいつく。

「つおおおおおつー」

優人との特訓の甲斐があつてか、ラウラを少しずつ押ししていく。

「くつ……そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除をする。——まづつ！
刹那、ビシッと体が凍り付いたかのように俺の体が止まった。ラウラは片手を突き出し、その手のひらは俺に向いている。

(くつ！ A I C ! !)

「では——せらばだ」

ラウラの大型レールカノンが俺に向けられている。が、レールカノンが火を噴く直前にラウラは黄色い影と入れ替わるように俺の目の前から姿を消した。

「お待たせ！」

俺はシャルルに助けられたと同時にその場を離脱。直後、俺たちのいた場所は砲弾の雨で吹き飛んだ。

「シャルル、間一髪。助かつたぜ。サンキュー」

「どういたしまして」

「筹は？」

「お休み中」

そう言つてついつと視線を向けるシャルルに従つて俺もそちらを見る。アリーナの隅でシールドエネルギー、E.S各部損傷甚大の筹が悔しそうに膝をついていた。

「さすがだな」

「その言葉はこの試合に勝つてから、ね

両手に持つていたアサルトライフル銃を捨てて、シャルルは新たに武装呼び出す。ショットガンとマシンガンがそれぞれ形を成した。

「いいからが本番だね

「ああ、見せてやるつさ、俺たちのコンビネーションをー。」

そして、反撃の狼煙が上がる

特別話 HAPPY BIRTH DAY!! 梓!! (前書き)

今日の赤坂のイベントで話題に思ついたストーリーです。現在やつてゐる話とまったく関係ないので、注意を。そして、時間軸は結構先のお話です。

けいおんが苦手な方は即バックを。

本編の続きはもうすぐできとうです。

それではねじゅう。

特別話 HAPPY BIRTH DAY!! 梓！！

11/10 3:00

「という訳で明日は中野梓の誕生日パーティーを行いたいと思いま
す」

「…………」

「い……ええ……」

現在、僕たちは定休日の中反田食堂で明日の中野梓、あずにやんの
誕生日パーティーの計画を練っている。

「明日は平日だが、僕と一夏、簪は休みを貰っている。弾と和馬は
？」

「俺は勿論、許可をもらつたぜ」

弾が答える。

「俺は無理だつたな。だから整理券をもらつたら一回帰りうつと思つ
てる」

和馬も続けて答える。

「つむ…和馬は残念だな…並ぶ時間を考えなければ…」

「徹夜すんじゃねえの？」

「馬鹿野郎！！ルールは厳守！！当たり前だ！！」

「ゆ、優人……でもよお…徹夜組がいるぜ？」「

「だから、俺たちは始発前の時間に並ぼうと思つ

「でも、どうするんだ？」

「ネカフュだと学生はお断りだからな…とりあえず、近くのホテルをとつてある。そこで待機だな」

「相変わらず準備がすげえな、優人」

「当然だ。前世では僕の命を救つてくれたアニメだからな…

「備えあれば憂いなしってな…さて、待機メンバーは和馬以外のみんなでいいんだな？」

「おう。あ、でも簪、女だぜ？むか苦しい男と同じ部屋じゃ嫌じやないか？」

一夏が気を使つ。

「わ…私は…大丈夫…梓ちゃんをみんなで祝いたい…」

「…一応、簪の事も考慮して部屋を用意しておいたが、いらなそまだな…よし、待機時間を潰すためにはいおんのBDを持って行こう

「当然だろ、優人？」

「ふつ……まあ、そつだな」

弾が言つた言葉に同意する僕。

「では、和馬のみ始発組という事で、バースデーカードを貰つた後は今日、待機するホテルに集合だ」

「ん? なんでだよ」

「実はなファンの参加自由型でバースデーパーティーを開く為にそのホテルを貸し切つた。あと、父さんのコネでメインキャストと山田監督が来てくれるそうだ」

「…………な、なんだつて――! ? 」

僕の爆弾発言に物静かな簪すら大声を上げた。

「ふつ……この位、当然さ」

「優人……お前が一夏の幼馴染でよかつたぜ! 」

「竹達さんに会える……みんなに会える……」

「お前やつぱりすげえよ……」

「や、山田監督……」

「みんな大興奮のところ悪いが、そろそろ時間だ。では、18時に駅に集合だ」

「 「 「 「はい！」」

「そして、始発組の和馬、頑張ってくれ！！」

「おひーーあずにゃんの為ならこの命ー差し出すぜーーー！」

「では、解散！！」

一方、その頃ヒロインズは？

「む？シャルロット！今日、一夏がかなり浮かれていたのだが、知らないか？」

篠が廊下でシャルロットに話し掛ける。

「あ、篠。うーん…わからないな…放課後になると同時に優人と一緒に学園から出て行つたし…優人もどこに行つたんだろ？」

「あら？おふたりともなにしてらっしゃいますの？」

ふたりが話していると金髪でいかにもお嬢様なセシリ亞と一緒にいた鈴がむこづから歩いてきた。

「ああ、今日の放課後に一夏と優人がすぐに居なくなつたことを話していたのだ。ふたりは知らないか？」

「残念ながらわたくしは…」

「あー、なんか弾の家に行くとか行つてたわね

「む、それは本当か！？」

竇が声を上げる。

「ああ、本当のようだ。嫁は五反田食堂とかいひつてゐる
「うわーー・ラウラーー・おどかさないでよ……それに一夏はラウラの嫁
じゃないでしょ……」

突然、ラウラが後ろから声を掛けられたことに驚くシャルロット。
「HISをステルスマードにされた時のために発信機を付けておいた
のだ。さて、早速追つか

「ああ、そうだな」

「優人さんのことも気になりますし……そりしまじょつ

「一夏が何すんのか暴いてやるんだから……」

「あれ！？みんな一夏に発信機を付けてたことに突っ込まないの！
？まあ……僕も行くけど……」

満場一致といひことで一夏（&優人）を尾行することが決定した。

「あら？何か面白そうね、おねーさんも着いて行くわ！」

「」「」「せ、生徒会長…？」

「やん そんなに驚かないでよ。実は簪ちゃんも放課後に居なくなつたのよ。どうも優人くん達と一緒にみたいなのよね。だからおねーさんも着いて行くわ」

「そ、そつなんですか…では、気を取り直して出発だ…！」

「…おー…」「…」

「うひー、一夏（&優人）尾行チームが完成した。

18:00

「よし、全員集まつたな」

「おう。俺と弾は万全だぜ。簪は？」

「わ…私も…大丈夫…」

「うひー、それじゃ、行きますか！」

続く…のか？

特別話 HAPPY BIRTH DAY!! 梓!! (後書き)

本編を書き終えてその氣があつたら続きを書きます…

最後に、あずにやん誕生日おめでとおおおおおおおおーーーー

第一十一話 行き過ぎた力（前書き）

第一十一話です。

どうぞ。

第一十一話 行き過ぎた力

一 夏視点…

「はあ！」

俺は零落白天を発動させながらラウラに斬りかかっていく。

「ふん…シールド無効化攻撃か…だが、当たらなければいい話だ」

ラウラはA.I.Cによる拘束攻撃を行おうとするが、俺はそれを急停止、転身、急加速で躱す。

「ちつ…ちょろちょろ田障りな！」

立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、その攻撃は熾烈を極める。だが、俺一人で戦ってるわけじゃない。

「一夏！前方一時の方向に突破！」

「了解！」

シャルルが援護をしてくれる。

「ちい！小癪な！」

ワイヤーブレードをくぐり抜け射程圏内に入る。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「誰が普通に斬りかかるつて？」

俺はそれまで足下へと向けていた切っ先を起こし、体の前へと持つてくる。

「…？」

斬撃で読まれるなら、突撃で攻める。シンプルだが、そのシンプルさゆえに腕の軌道が捉えにくくなる。線より点のほうが、捕まるのは難しい。

「無駄なことを…」

ビシッと体が固まる。AICの網が俺の全身を固定した。

「腕にこだわる必要はない。よつはお前の動きを止められれば——」

「……俺だけでいいのか？忘れてんのか、知らないのか、わからな
いが、俺たちは——ふたり組なんだぜ？」

「…？」

ラウラは慌てて視線を動かすがもう遅い。シャルルが零距離でショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を構えていた。シャルルが引き金を引くとラウラは緊急回避行動を起こすが、間に合わない。俺はAICの網から抜け出す。やはりAICは『停止させる対象物に意識が集中させていないと効果を維持できない』よつだ。

そして、ラウラは今度はシャルルに意識を向けるようになった。俺

はハイパーセンサーから『あれ』の展開命令を送る。すると、俺の手と腰に粒子の糸が集まりその形を作る。形を作り終えると、手にはビームマグナム、腰にはそのエネルギー・パックが形成された。

そして俺はラウラにビームマグナムに向けてシャルルにプライベート・チャンネルで話しかける。

『シャルル、ビームマグナムを使う。離れてくれ』

『了解、一夏』

そう言いつとシャルルは距離を取りつつ、手に持ったマシンガンでラウラを撃つと、ラウラは回避し切れず、AICでそれをとめる。今だ！

ドショーン！ガコンッ！

大きなビームの発射音が響いた後、排莢音が響く。ビームはラウラに真っ直ぐ飛んで行く。ラウラはすぐ気がついたが、僅かにビームが足を掠めた。掠めただけだったが、ラウラのシールドエネルギーは一気に減る。

「！？貴様……何をした！」

「さあな！！」

俺は立て続けに引き金を引く。ラウラも勿論今度は大きく避けるがそれが仇となりシャルルに狙い撃ちにされる。

3発目は肩のレールカノンを掠め、レールカノンを破壊する。4発目、5発目は外した。そして5発分のエネルギー・パックを使い切つ

た俺は新しいパックをリロードする。

「当たれえええ！」

リロードし終えた後、狙いを定め、引き金を引く。
ドショーン！！

シャルルが誘導してくれたおかげで今度は直撃！そして爆煙が起
り、なにも見えなくなる。そして煙が晴れると変形する金属に取り
込まれそうになり、悲鳴を上げるラウラの姿があつた。

ラウラ視点移行…

（こんな……こんなところで負けるのか、私は………）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えのないミスだ。しかし、
それでも――

（私は負けられない！負けるわけにはいかない………）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。
一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体C-0037。
人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。
――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。
知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。
わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えるかという戦略。
格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であつた。性能面において、最高レベルを記録し続けた。
それがある時、世界最強の兵器――IISが現れたことで世界は一変
した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』——擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した日のことを『ヴォーダン・オージェ境界の瞳』と呼ぶ。

危険性は全く無い。理論上では、不適合も起きない——はず、だつた。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事件』により私は部隊の中でもE.S訓練において後れを取ることとなる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。——私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここに最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかつた。特別私だけに訓練を課したということはなかつたが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はE.S専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかつた。自分を疎んでいた部隊員も、もつ氣にもならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人——憧れた。

その強さに。その凜々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

——ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そう思つてからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけて話しにいった。

いや、話などできなくともよかつた。ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつふつと力が湧いてくるのが感じられた。

それは、『勇気』という感情に近いらしい。

そんな力があつたからだろうか、私はある口説いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？…どうすれば強くなれますか？」

その時——ああ、その時だ。あの人気が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情になぜだか心がちくちくとしたのを覚えている。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどうこうものなか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな……いつか日本に來ることがあるならISの開発者の一人と共に會つてみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに——」

「

優しい笑み、どこか恥ずかしそうな表情、それは——

(それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに)

だから——許せない。教官をそんな表情をさせる存在が。そんな風に教官を変えてしまつ弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。

だから——

(敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると……)

ならば——こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、あれは、まだ動いているのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そうだ、そのためには——

(力が欲しい)

ドクン……と、私の奥底で何かが「づ」めぐ。
そして、そいつは言った。

『——願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

言つまでもない。力があるなら、それを得られるなら、私など——空っぽの私など、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を——私によこせ！

Damage Level.....D.

Mind Condition.....Uplift.

Certification.....Clear.

『Valkyrie Trace System』.....boot.

優人視点移行：

試合を見ていると、突然ラウラの体が変形したISの金属に取り込まれ、黒い全身装甲フルスキンのISのような『何か』の姿へと変わった。そしてそれは一夏へと突撃し、斬撃を加え、一夏はISの展開を解除させられてしまった。だが、一夏はISの展開を解除されて尚、その『何か』に突っ込んでいく。

「あいつ……バカか！？樋無さん！？」

……ああ、思い出した。何かに似てると思つたら、千冬さんが使っていた『暮桜』じゃないか。となると……あれは『VTシステム』か。小耳に挟んだシステムなのだが……説明は後にしよう。僕は監視室で待機する樋無さんを呼ぶ。

『優人くん！？』

「樋無さん、あれは恐らく『VTシステム』です！」

『やつぱりそうなのね……取り敢えず今はフィールドの一部の展開を解除するわ！そこからアリーナへ入つて！』

「了解！」

楯無さんとの通信後、僕のちゅうじ真下の位置にあるフィールドに穴が出来上がる。

(……正直、クアンタとか使いたいけど……中にラウラがいるからな……)

クアンタなら一発であれを破壊出来るが、中にいるラウラへの被害が大きくなる気がする。まあ、プレイヴァーツでも充分かな?そして、僕はそのままプレイヴァーツで急降下する。そして、一夏の盾になるような形で簫によつて止められている一夏の前に立つ。

「一夏、なにやつてんだ!HSの展開解除されて突っ込むバカがいるか!?

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそつ!」

「…そんなことはわかつてゐる。HSの展開が出来ない一夏はさつと出て行つて。後は僕が何とかする」

僕はエクスカリバーを構え直し、黒いHSと対峙する。

「でも!」

「一夏!優人の言つ通りだ!今のお前に何が出来る?白式のエネルギーも残つてない状況で、どう戦う気だ」

「ぐつ……」

簫がもう一度一夏に忠告する。それでもあいつに、あの黒いHSに

一発叩き込みたいのだろう。

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は收拾されるだろう。だから——」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「そうだ」

「違うぜ篠。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうとか、知るか。大体、ここで引いちまつたらそれはもつ俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「ええい、馬鹿者がーならばどひするといつのだ！エネルギーはどのみち——」

「……はあああ…………」れだから馬鹿は困るよなあ……シャルル、君のリヴィアイヴならコア・バイパスを利用して白式にエネルギーを移すことが出来るだろ？？

僕はシャルルの方に向き直し、言ひ。

「うん、確かに出来るよ」

「なら、残りのエネルギーを白式に送つてくれない？」

「うーん…わかった。いいよ」

よかつた。シャルルも了承してくれた。

「本当か！？じゃあ、シャルルー早速——」

「カジ！」

びしつとシャルルが一夏に指揮して言う。珍しく、その言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もううるんだ。ここまで啖呵切つて飛び出して、お膳立てもされてんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通つてね」

「うーーーーー、いいぜ？なにせ負けないからなー！」

一夏の女子の制服姿か…面白そつだな…

「……はい、リヴァイヴの残量エネルギーを全部移し終えたよ。白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

そして一夏の右腕にもう一度白式と雪丘式型が構築される。僕は白式にエネルギーを送る際に取り外した拡張端子を回収し、一夏の隣に並ぶ。

「やつぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分だ」

「一夏、行けるか？」

「ああ、こつでも」

「い、一夏つ…」

それまで傍観していた筈が、弾かれたように口を開いた。そのまますぐ一夏を見つめていて、真剣そのものである。

「死ぬな……絶対に死ぬな！」

「何を心配してんのだよ、バカ」

「ばつ、バカとはなんだ！私はお前が——」

「信じろ」

「え？」

「俺を信じろよ、筈。心配も祈りも不要だ。信じて待っていてくれ。必ず勝つて帰つてくる」

その表情は一瞬でイケメンでした。全く……こいつあ

「じゃあ、行つてくれる」

「あ、ああ、勝つていいー！」

「…頼むぜ、優人。零落白夜、発動」

その時の零落白夜はいつもより鋭く、まるで鍛え抜かれた刀のようだった。

「任せろ……僕の後に続くんだ、一夏っ！」

そういう黒いISに突っ込んでいく、僕。

「おうー！」

後ろからは一夏が続く。

「うおおおおおーー！」

僕が突っ込んでいくと、黒いISも同じく突っ込んでくる。正に真っ向勝負。僕のエクスカリバーを握る力が強くなる。そして、激突する。が、所詮は千冬さんの偽物、型などは真似事。簡単に見切れる。僕は斬りあげて、相手の刀を弾き、相手の刀を空に上げ、そのまま横一閃し、切り抜ける。

キュイイイイイン…

その時、謎の違和感を感じた。

(ー?なんだ…今の感覺…)

だが、考へている暇はない。一夏にすぐに命令を出す。

「今だ……」

「おおおおおお……」

一夏は零落白夜で黒いEISを縦に真つ直ぐ断ち切る。正に一刀両断。

「やあ、やあ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いEISが真つ二つに割れる。

「……まあ、ぶつ飛ばすのは勘弁してやるよ」

力を失つて崩れるラウラを抱きかかえて、一夏はひとつぶやく。
それが果たして聞こえたかどうかは、ラウラだけが知るところだろう。

第一十一話 あれからとそれから（前書き）

更新かなり遅れてすみません。実はテスト期間に入ってしまい、筆（　？）がなかなか進みませんでした。

今回は『霧氷黄泉路さん』と『jodちゃん』のアイディアを使わせていただきました。……まだ伏線の段階ですけど。

後、25万アクセス越えとお気に入り登録件数250件突破ありがとうございます。それでは第一十一話をどうぞ。

第一十一話 あれからとそれから

優人視点…

僕はラウラが保健室に運び込まれるのを確認すると、すぐにモニタールームに向かった。

「（）苦勞様。でも、一夏くんにやらせたのは関心しないわね」

僕がモニタールームに入ると樋無さんが声をかけてきた。

「すみません。でも、あいつはそこまで言つと聞きましたから」

「そんなこと言つて、本当は一夏くんにやらせたかったんでしょう？普段のあなたの性格なら氣絶させてでも引かせてるでしょうしね」

「ばれてましたか。まあ、いいです。それで、ラウラの件ですけど――」

「それに関しては問題無いわ。既に学園がドイツ軍に問い合わせてる。それよりも、私はあなたが何故ＶＴシステムだとわかったのか教えてほしいわね」

「ＩＳの開発に関わる者なら誰でも知ってるシステムじゃないですか？別に珍しくもないでしょ？」

「確かにそうだけど、私はあなたは何故ＶＴシステムの詳細をどこで知ったかを知りたいの」

「……ちょっと前に色々な国をハッキングしていたら見つけたんですよ。たまたまね」

まあ、実際は断片的に僕の記憶に∨Tシステムのことがあったっていつ理由なんだけどね。

「……なるほどね。でも、それだったらあのラウラちゃんにシステムが組み込まれたこともわかるんじゃないの？」

「僕が見たところではシステムのことしか書いて無かつたんですよ」

「ふうん……。取り敢えず、今回の件でトーナメントは中止になつたわ。一回戦だけはやるみたいだけど」

「そうなんですか……」

「今日はこのぐらこかしら。部屋でゆっくりと休んで

「はい。あ、ラウラのヒーローにありますか？」

「え？ 第一整備室に運ばれたらしいわよ。それがどうかした？」

「いえ。わかりました。ありがとうございました」

そのまま僕は生徒会室を後にし、第一整備室へと向かった。

ラウラ視点移行…

「う、あ……」

ぼやつとした光が天井から降りてくるのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

その声には聞き覚えがある。聞き覚えがある——どこのではないどこで聞いたと一瞬で判断できる、自ら愛してやまない教官」と織斑千冬だ。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

「何が……起きたのですか……？」

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。VTシステムは知ってるな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。
過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、ISI条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のISIに積まれていた」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメ

ージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになつていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろ？」

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

その言葉を口にしなかつたが、教官には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒー！」

「は、はい！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は……私……は、……」

「誰なのだろうか？自分がラウラであると、じつしても今の状態では言えなかつた。

「誰でもないのならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

そう言つて教官が励ましてくれたことに驚いて私は何を言えぱいのかわからなかつた。そして、気がつくと教官は出ていつてしまつた。

優人視点移行……

「また盗み聞きか？氷川」

保健室から出てきた千冬さんの第一声がそれだつた。

「人聞きの悪いことは言わないで下さいよ。僕はラウラに用があつて来たんですから。そしたら、織斑先生との話声が聞こえて待つてたんですよ？」

「そうか、なら早く用件を済ませるよ」

「はいはーい」

「プシュー……。

「お邪魔するね、ラウラ」

「……お前は、氷川か」

部屋に入るラウラは一瞬身構え、睨んできたが、僕だとすぐ分かり、構えを解く。

「何の用だ？」

「君のエスについてかな」

「…………」

「君のエラだけど、僕が修理しておいたよ」

「何故、そんなことを?..」

「うーん、まあ、気まぐれで」

「……そつか

僕の適当な返しこじか不満そうにするラウラ。

「それじゃ、それだけ。じゃあね」

「あ、おいー氷川!」

「ん、何?」

「その……今日は助かった。あ、ありがと!!……」

「…どういたしまして。あ、僕のことば優人でいいから。僕はラウラって呼ばせてもらつてるし」

「ああ、わかつた。優人」

「それじゃ、今度こそ出でいくね

そして、僕は自室へ向かい、夕食も摑らずにベットに伏せた。自室へ向かう途中、『トーナメント中止……!』『織斑くんと氷川くんとの交際は無し……!』などといふ声が聞こえたが、聞こえないこととした。

「サササ……

「…………と…………つと…………ゆうと…………！優人！」

僕は誰かに起こされた。

「んア…………？誰だあ…………？」

眠たい目を擦つて、見ると田の前に一夏がいた。

「なんだ……一夏か……。なんの用だ？冷やかしならサバー——ヤで蜂の巣だぞ？」

「そうじやねえよ。今日は大浴場が使える田なんだぜー！」

大浴場という単語を聞いてビクッと体が反応する。

「…………一夏、それは嘘ではないな？」

「嘘ついてなんの得があるんだよー！？さあ、早く準備しろー！」

そう言われて僕はベットの近くにある棚から風呂桶を取り出す。風呂桶にはシャンプー、ボディソープ、手ぬぐいが入っていた。

「よし、行くか」

「早っ！」

「当たり前だ、大浴場がすぐに使えるよつこと予め用意しといったのさー！」

「まあ、いいか。行こうぜー。」

「応！」

そして辿り着いた大浴場の入口にはシャルルが待っていた。

「シャルル、待たせたなー。」

「あ、遅いよ、二人ともー。」

「じめん、僕のせいだね。フルーツ牛乳でも奢るから許してよ。」

「あ、よく風呂上りに飲むって言つたれだねー。飲んでみたかったんだー。」

「はは、そりゃよかつた。で、入る順番はどうする?。」

「へ? なんで順番なんて決めるんだ?」

「…シャルルが女だつてこと、忘れたの?」

「あー、そうか! だから順番決めなきゃなんないのかー。ならシャルル、一番に入るか?」

「ううん、公平にジャンケンこしよう。僕はそれがいい。」

「でもなあ……。」

「まあまあ、シャルルもこいつらてるし、ジャンケンこよう。」

「わかつた。じゃあ、早速。最初はグー！」

「「「ジャンケン、ポン！」「」」

結果的に一番が一夏で、一番田に僕。そして最後にシャルルとなつた。で、現在、シャルルと風呂場の更衣室にて待機中。

ガラガラ……

「上がつたぞ～」ホカホカ

「おう。じゃ、シャルルお先に」

「うん、じゃあくつ～

……シャルルはちゃんと壁を見てるからなー？僕と一夏の裸は見てないからなー！

ガラガラ…

「おお～広い～！」

そして、体と髪を洗つてでかい浴場に入る。

「ふい～生き返る～……。賽の河原のあの温泉には敵わないけどね

」

……なんだろ？。イノベイターの直感が今すぐこの風呂を出ようと告げている気がする。

ガラガラ…

「お、お邪魔します……」

振り向くと生まれたままのシャルルがいた。……タオルで前を隠してるけど。

「シャ……シャルル……？」

「あ、あんまりジロジロ見ないで、優人のえっち……」

「『』、ごめん！」

僕はすぐに反対方向を向く。そして、ちやふん……とお風呂に入つてくる音が聞こえてきた。

「……ツーじゃ、じゃあ一僕はもうたっぷりお風呂を堪能したからで、出るねー！」

「まつ、待つてー！」

僕があ風呂から出ようとすると後ろから抱きつかれた。や、柔らかいものがふ、ふたつ当たってるんですけどーーーし、静まれ！もうひとりの僕ーーー！

「そ、その、話があるんだ。大事なことだから、優人にも聞いて欲しい……」

「わ、わかったよ……わかったから、と、とりあえず離れてくれないかな？」

「あ、うー、じめんね！」

慌ててシャルルが僕から離れる。シャルルが離れると僕はゆっくりと湯船に浸かる。そして、背中合わせの状態でシャルルの言葉に耳を傾けた。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前……学園に残るって話？」

「そ、そつ。それ。僕ね、ここにようと思つ。僕はまだここにだつて思える居場所を見つけられないし、それに……」

「そ、それに？」

「…………」

……なんで沈黙？ 急に会話が止まり、浴場全体が静まりかかる。ひとり……と、僕の背中にシャルルの手が触ってきた。

「シャルル……？」

そのまま手は僕を後ろから抱きしめる。そしてまた僕の背中に柔らかいものが……。

「優人が、ここにいればって言ってくれたから。そんな優人がいる

から、僕はここに居たいと思えるんだよ

「…………」

僕はシャルルの言葉で落ち着き、顔が緩む。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「そう。僕のあり方。一夏と優人が教えてくれたんだよ？」

「一夏はともかく……僕は何もしてないよ？」

「うん、優人は教えてくれたよ。優人って自分に関する事はどこまでも鈍感だね。憎たらしくらい」

「む、むう……ごめん……（一夏じゃないのに鈍感って言われた……）」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことは昔みたいにシャルロットって呼んでくれる？ふたりきりのときだけでいいから」

「昔みたく……か。わかったよ、シャルロット」

「ん……」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。それはまるで子供のような無邪気さで、あのいつもの屈託のない表情がすぐに想像出来た。

「ヒ……ヒヒヒで、お、おた当たつてゐんですナビ……」

「あ、ああ、うそー、うつだねー、ぼ、僕、先に体と髪と洗ひちゃうねー！」

シャルロッタはやつと自分の状態を自覚したのか、ぱじゅぱしゃと慌てて水音をたてながら僕から離れて湯船に上がらうとする。

「いや、もう僕先に出たい……のぼせやつ……」

「わ、わかった……」「めんね……それじゃ、お、おやすみ……」

「いや、謝りなくとも……まあ、いいや、うそ、おやすみ……」

そして、僕は浴場を後にし、着替えて、一夏の部屋に行つてフルーツ牛乳を一夏とシャルロッタの分で一本、先に戻つていた一夏に渡して、そのまま浴室に戻つてベットでダイビングをした。今日は疲れた……色々な意味で。

翌日、教室に着くといつもの風景が広がっていた。僕はいつも通り自分の席に座り、S H R を待つ。そして、入ってきたのは顔が真っ青な山田先生だった。

「み、みなさん……おはよひいざこます……」

「や、山田先生……？」

明らかに元気のない山田先生に対し、僕は思わず声をかけてしま

う。

「これから提出する資料の書き直しと……後、……ブツブツ……」

「や、山田先生……？」

「あ、今日は、ですね……みなさんへ転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介はすんでいるといいますか、ええと……なにやら山田先生の説明はよくわからないが、……なんだろ、とつても面倒なことが起こりそうな気がする。」

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「」の声は……まゆ——

「シャルロット・テュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

「……じやないですかねー、シャルロットですかねー。」

「ええと、テュノア君は『テュノアさんでした。』ということです。はあ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

なるほど……山田先生はこれからが面倒臭いのか。

「え? テュノア君って女……?」

「おかしいと思つた! 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「つて、織斑君、同室だからしらないうことは——」

「ちょっと待つて！昨日つて確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワツ！教室が一斉に喧騒に包まれ、それはあつとう間に溢れかえる。——何かまずい気がするからP.Fにサバーニャを突破口インしといひ。

ドカアアアン！と盛大に教室の壁に穴が空く。

「一夏あつ！——！」

そこからは鈴がHSを開いた状態で出てきた。顔は烈火の如く怒り一色。

「死ね！——！」

「ちょ、俺は——」

鈴は両肩の衝撃砲をフルパワーで開放していた。——が、それは一夏に当たることはなかった。何故なら一夏と鈴の間にラウラが割つて入つたからだ。

「助かつたぜ、サンキュ。……つていうかお前のHSもう直ったのか？すげえな」

「……優人が直してくれたんだ」

「へー。そなん——むぐつ！？」

「なつ！？」

「「えつー?」」

「わおつ、大胆」

「ー?ー?ー?ー?」

……一応解説しどくと今のは篠と鈴、山田先生とシャルロット、そして僕、一夏の順だ。

「お、お前は私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「……嫁?婿じゃなくて?」

「日本では氣に入った相手を『嫁にする』といつのが一般的習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

それって一次元の話だよー!言葉に出さないけどー!ワリワリには日本の常識をちゃんと教えてあげなきやね。

「アンタねえええつー!ー!」

再び衝撃砲が開く。

「待てー!俺は悪くなーー!だけらかとこつと被害者サイドだー!」

「アンタが悪いに決まってるでしょーがー!全部ー!絶対ー!アンタが悪いー!ー!」

アハハハ、と笑いながら巻き添えを喰らわなーように教室から出ようとすると突然目の前をレーザーが掠める。

「あらー、優人さん?どーにこきますの?わたし、実はどうして

もお話ししなくてはならない」とがりまして。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

「アハハハ、それは大変だね！でも、僕も用事があるからー…じゃー…」
「あつーーーお待ちなさいーー！」

サバーニャを起動して、四基のシールドビットを一夏のほうへと飛ばし、教室から逃げ出し、宇宙へと向かつた。そして、僕はその日の授業をサボった。

ちなみにせつかく宇宙に行つたのでまたパーティを取つてきました。今日はビルトビルガーとソウルゲインのパーティです。

第一十一話 あれからとそれから（後書き）

では、御意見、御感想をお待ちしています。

次の更新も結構、遅れそうです……。けいおんの映画もありますし
……。

（このeや4は見ました！）

第一二三話 こひやの図書……？（前編）

“ひつわお久しぶりです。テスト期間を終え、けいおん！の映画を見、家庭用エクバをやり始めたらこんなにも遅くなってしましました。本当にごめんなさい。

それと今回は割と懶

せき
怠

だい
で書いた為、いつも以上におかしな部分があると思います。
では一三話をどうぞ。

第一二三話 こつもの口算……？

一夏がラウラにキスされた日の夜、僕は部屋でその日に取つてき
たパートの特徴を見ていると、ドアのノック音が響いた。

「はーい？ 誰ですかあ～？」

「私だ」

ドア越しに聞こえてきたのはラウラの声だった。なんのようだらう
か？ 僕は不思議に思い、ドアを開ける。

「どうしたの？」

「実はだな……嫁を私の物にするために仲間達に相談していたの
だが……イマイチ決まらなくてな、そこで同年代の男子に聞いてみて
はどうか？ どこか」とこいつとに決まったのだ

「なるほど。で、僕のところに来た訳か

「やつこいつことだ」

嫁、嫁言つてるけど一夏はなんでもちゃんとした返事を出さないの
だろうか？ バカなんだろうか……。まあいいや。とりあえず止め
た方がいいのかもしないけど、面白そうだから教えてみるか。

「あのね、日本の求婚方法の一つに『夜這い』っていうのがあるん
だよ」

「ヨバイ？」

「や、相手が寝たのを確認して、相手の布団の中に潜り込むことだよ」

本当はもつと先のことをするんだけどね。流石に学園でそれはマズイだらうからやめておひ。

「なるほどーそれで我が嫁を独占出来るのだなーでは、ヨバイとやらを今夜早速実行に移させてもらおうー」

「うん、頑張って~」

そして、ラウラは部屋を出ていった。……明日が楽しみだ。
つと、僕はビルガーとソウルゲインの組み立てとプレイヴハーツの強化パートを作らなきや。

現在の開発進行度

ソウルゲイン	15%
ビルトビルガー	10%
ブレイヴハーツ	
BHオートクチュール	
デストロイ	
・重火力型	30%
・シユーティングスター	
・高機動型	30%

翌日、教室に入り、一時間目の準備をして、パソコンを取り出してソウルゲインとビルガーのシステム的な部分などの作業を進める。とは言つてもソウルゲインは殆ど調整しなくてもいいんだがな。ただ、ビルガーだけはテスラドライブがあるからこれの調整が必要だ

けど、T E H エンジンほど手間がかからないから別に気にせしていない。

え？ お前朝食はとつたのか？ とつたさ。僕は朝食は毎回学食に行かないで、自室で焼きたての食パンにイチゴジャムを食べると決めているんだ。これだけは譲れない。……でも、何度か学食に行つたことあるんだよなあ……イチゴジャムパンだつたけど。

その後、S H R が始まる直前、窓からシャルロットが『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』を部分展開して一夏と共に入ってきた。

「到着っ！」

「おひ、『苦労な』ことだ」

シャルロットの顔を見ると顔が青ざめていた。入つて来て田の前に千冬さんが居たら流石にビビるよなあ。

「本学園はE S 操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし——」

すぱあん！ と教室に響き渡る出席簿アタックの音。うーん、いつ聞いても清々しいね。

「敷地内でも許可されていないE S 展開は氷川以外禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

優等生のシャルロットが予想外の規律違反をしたところのはクラ

スマイトにも衝撃的だつたらしく、みんな唖然としている。

そんな一夏とシャルロットが怒られている隙に筹とラウラ、セシリアが入ってきた。そして何事も無かつたかのようにな着席。

「テュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。一回田は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「「はい……」」

ふたり揃つて意氣消沈しながら席に座つた。
そしてチャイムが鳴り、S H R が始まる。

「今日は通常授業の日だつたな。 I S 学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取つてくれるなよ」

I I J 、 I S 学園は一般教科も履修するが、中間テストは無く、代わりにすべて期末テストに回されるという最悪なシステムなのだ。転生前の自分なら歓喜と悲鳴を同時に上げていただろう。何せ、テスト範囲が広くなるのだから。転生して頭脳チート付けてもらわなければ、恐らく僕の夏は補習だけで終わつていただろう。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物なもするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないよ」

校外特別実習期間といつのはぶつちやけ、臨海学校だ。初日は丸々一日遊べるので女子はハイテンション。後の二日は訓練なのに。ちなみに僕は海で泳ぐのはそこまで楽しみではない。前世で海で溺れたり、物を無くしたり色々トラウマがあるので。ただ、運動神経は前世よりいいのでサーフィンはしてみたい。……矛盾してるな。

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしつかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか?」

クラスのしつかり者の鷹月さんが素朴な疑問を言つ。まあ、この時期に一時的に休むというのは大抵、宿泊先のチェックを兼ねた旅行だろうが。

「山田先生は校外実習の現地観察に行つてるので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

それ見るー。(シーブック風)

「ええつ、山ちゃん一足先に海に行つてるんですか!?いいなー!」「ずるい!私にも一声かけてくれればいいのにー。」「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」

それぐらいで騒ぐ十代女子に飽きた様子の千冬さんは言葉を続ける。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しいを山田先生は仕事で行つてるんだ。遊びではない」

はーい、と返事をする一組女子。そして、ＳＨＲを終える。

「「ヒリコリ」と(だー)(なのよー)」「

「ま、まあ、落ち着いて」

その日の放課後、僕は屋上にて簫と鈴に言ひ寄られた。内容はラウラに何故夜這いを教えたかといつことだ。

「これが落ち着いていられるかーお前は私の味方をすると言つていたではないかー！」

「ちよ、簫、あんた氷川と手を結んでたのー？」

「ああ、やうだともーなのに何故ラウラに夜這いを教えたー？」

「いやー、面白やうだったから？」

その言葉と同時に簫は緋宵を抜き、鈴は双天牙月を部分展開して僕に襲いかかる。僕は鈴の攻撃を避け、簫の一閃を木刀で受け止める。

「「ふざけないでくれる?」「……」

「「めぐめぐ。ちょっとした遊びだつたんだよ。今度駿前のデザート店貸し切つてあげるから許してよ。それとふたりに一夏とデータする機会も作つてあげるし……」

「ふ、ふん……なら許してやる……」

「あ、あたしもそれなら……」

……軽つー女性どころのは甘い物に弱いと聞くがこじまどじな……
……こや、一夏のほうが大きいかもしね。

「ただし！」

「うおひー!？」

「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

ふたり同時にお互いを攋差しながら言

「そいつは出来ない相談だ。まあ、いいじゃない。ふたりとも一夏

卷二十一

一夏を犠牲にして助かる僕
最低だな

一なら、絶対！絶対だぞ！」

「やなしとふに飛はすわよ! ?」

そこで僕の前から立去るふたり

た
た
た

「ヤルロジエ、掃除は終わったのかい？」

うん。——夏が掃除好きで助かってたよ。すぐに終わってたしね。

……僕の勘違いだろ？　シャルロットが僕と田を合わせないようにしてる気がする。

「シャルロット、なんで僕と田を合わせないよつてしているの？」

「ええ！？いや、それは……その……」

「言いくことなのか……。あ。

「そういえば

「ひやつ、ひやいー？」

何故か声が裏返るシャルロット。

「そんなに驚かなくても……」

「あ、その……」めん

「いや、いいけど。それで、この前、買い物がどうとか言ってたけど、明後日学園も休みだし、校外特別実習の準備も兼ねて買い物に行かない？」

それを聞いた途端シャルロットは田の色を変えて、言った。

「ほ、本当ー？」

「うん。ちょうど僕も買いたいものあるし

「わ、わかった！約束、約束だよー！」

「ああ。じゃ、明後日ね。僕はこれから用事があるから

「うん！ 明後日ね！」

よかつた。機嫌は直つたみたいだ。

喜んでるシャルロットを残し、屋上を出ていく。そして第三整備室へ。……の前に溜まってたラノベ読もうかな？

研究室に入るといつもの先客が居た。最近は来てなかつたが、まだISの作成をしていたらしい。……おかしいな、僕が手伝つたからそろそろ出来上がつてもいい頃、だが？

「や、簪」

「あ、優人……ひ、久しぶり……」

「まだIS出来上がつてないの？」

「う、うん……あとはマルチロックオンシステムだけ出来てない……」

「マルチロックオンシステムか……。あ、サバーニャのデータがあるけど使つ？」

「あれは……ロックオン数が多くて使えない……でも、参考になるからほ、欲しい……」

「いいよ、僕と簪の仲なんだ。遠慮することないよ」

「 ゆ、 優人と私の……はっ……」

僕が近付こうとすると急に簪の頭から煙を出したように見えた。

「 ど、 どひした! ? 」

「 だ、 大丈夫、 なんでもない……」

「 お、 おひ……」

サバーニャのマルチロックオンシステムのデータが入ったメモリーを渡そうとするが、 僕と顔を真っ直ぐ見よつとしない簪。 ……まさか、 嫌われた! ? (ガビーン!)

「 う、 ごめん…… 簪、 僕何か悪いことでもしたかい? 」

「 い、 いや、 そうじやなくて! そ、 そのお……」

「 ほつ、 僕は簪に嫌われた訳じやないのか…… よかつた……」

「 う、 うん…… データ、 ありがとう…… それで、 今日はどひしたの? 」

「 ん? ああ、 新しいパッケージの作成とプレイヴハーツのオートクチュールの作成に来たんだ。 もつすぐ校外特別実習だからね。 その時に専用機持ちはパッケージのテストをやるらしいから僕も参加しようと思つて。 流石にヤフはマズイから」

「 へえ……」

「簪も校外特別実習行くんでしょ？」

「私は……行かない……」

「どうして？」

「HSは出来てないから……テスト運転とか微調整の時間も足りないし……」

「……それでいいの？」

「え？」

「本当にいいの、それで？僕は嫌だね。……じゃあ、簪。僕と一緒に『打鉄式式』を完成させるよー！」

「え？でも……いいの？自分のをやらなくて……？」

「そんなものどうにでもなるから。さあ、サーバーニヤのデータを開いて！」

「う、うん」

そして、僕と簪はサーバーニヤのデータを基に『打鉄式式』専用のマルチロックオンシステムを構築した。気付けば既に夜の8時（作成から1時間程）を回っていて、簪は完成と同時に寝てしまった。……相当ひとりで悩み続けて疲れたんだろうな。僕はそつと簪に毛布を掛けて、『打鉄式式』にデータをインストールする。その後、オートクチュールの重火力型の作成を行った。

そして僕は重火力型を完成させ、簪が目を覚ましたのは朝の6時

だつた。

「あ、私……いつの間に?..」

「やあ、おはよう簪。ごめんね、簪の部屋を知らなかつたからさ」の部屋に寝させちゃつて「

「ううん……全然構わない……それより、優人はずっとそれを?..」

「うん、まあね。さて、ん~~つと…そろそろ朝食の時間だし、一緒に食べない?..」

「う、うん…!..」

簪は珍しく大きな声で返事をした。簪は『打鉄式式』を待機状態にして僕のほうへ走つてきて、一緒に食堂へ向かう。

「簪は何食べる?..」

「私は……洋食セット……」

僕は券売機の2枚のボタンを押した後、洋食セットのボタンを押して、出てきた食券の1枚を簪に渡す。

「はい」

「あ、ありがとう……優人も同じ……なんだね……」

「ん?ああ、僕は朝は必ずイチゴジャムをたっぷり塗つた食パンを食べると決めてるんだ」

「けいおんーの……唯ちゃんみたい……フフッ……」

「あ、けいおんー見てるの?」

「うふ……梓ちやんが好き」

「僕は唯だね。やつだ、今度映画あるし、一緒に見に行かない?」

「う、うん……」（それってドードধよね!…）

簪は映画を見に行く約束をしてかなり喜んでいた。誘つてよかつた。

僕達は食堂のおばちゃんから洋食セットを受け取り、空いてる席に座つて楽しく談笑しながら朝食を取つていると、セシリアとシャルロットが「おひひひやつてきた。

「「優人（－－）（わふー）」」

バンジーとテーブルを叩くふたり。簪がかなり驚いてる。

「じゅらの女性とはどうして関係ですか？」「隣の女子とはどうして関係なの?」

「どうして……普通に友達だから?」

あれ?なんで落ち込むの簪?そしてセシリアとシャルロット、何故胸を撫で下ろす。

「「「はあ……」」

「なんで三人してため息するのさー!？」

「……バカツ」

「簪ー?」

そのまま立つて、食べ終えた皿の乗ったトレーを持って走つて行つてしまつ簪。追いかけようとするも、セシリ亞とシャルロットに道を阻まれる。

「どいてよー!」

「優人さん、先ほどの女子との関係を詳しく教えていただけませんこと?」

「そうだよ、あの子とはどうこう関係なのか詳しく教えてよ

ふたりからは黒い禍々しいオーラが見える。なんだこのプレッシヤーは!?その後、なんとかふたりから逃れ、第三整備室に引きこもり、高機動型のオートクチュールを完成させた。授業はサボるハメになつたけど。

現在の開発進行度

ビルトビルガー	20%
ソウルゲイン	30%
ブレイブ・バーツ	
BHオートクチュール	
デストロイ	
・重火力型	100%
・シーケンススター	
・高機動型	100%

第一二三話 こつもの口算……？（後編）

……正直、ビルガーとソウルゲインを登場させる場所をどうするか検討中です。サバーニャやクアンタも殆ど活躍してないのでマジどうしよう……オリジナルを挟むつもりですが、今の構想でもかなりオリジナリティが欠けてるのに更にオリジナリティが欠けそうです……（なんせOGsのキャラが出るし……）

それではじめ意見、ご感想お待ちしています。

第一十四話 一般的な「アーティスト」（前書き）

未だにエクバの慣性ジャンプの使いどりがつかめない作者です。

最近、新作投稿してみました。新作は昔やつたゲームをやり直した
ら思いついた作品です。まあ、またISとのクロスオーバーなん
ですけどね

そして、約34万アクセス＆約3万7千ユニークありがとうございます！
ます！ とっても嬉しいです！

それでは一十四話をどうぞ

第一一十四話 一般の問題"ハーフィー"ア

今日は週末の日曜日。つまり、シャルロットとの買い物の日だ。といつわけでシャルロットとふたりで街に繰り出している……あれ？冷静に考えたらこれって哪儿でじやね？

「じゃあ、シャルロット、今何買うの？」

「えー？ええと……もう一水着！水着だよー。」

「水着？ああ、臨海学校のか。丁度いい、僕も臨海学校の準備したいと思ってたんだ。……あれ、でもなんで水着？持ってきてないの？」

「う、うそ……元々、男子として入ってきたから……。」

「あ、うめこ……」

「ううん、ここのは。それより早く行こう。」

「うそ。ほんとここで時間を無駄にしけやダメだよね」

「もうだよ。……あの、せ、手……繋いでもいいかな？」

「え？ああ、はぐれないようにか。いいよ。」ホン…ハスコートをせて頂きますお嬢様

そう言つて僕は右手を差し出す。

「フフフ… よろしくお願ひします」

シャルロットは僕の差し出した右手と自分の手を繋ぎ、僕の隣に立つて、歩き始める。
そんな様子を見ている人物がひとりいた。

「な、なんで、手を繋いでいますの?」

禍々しい黒いオーラを放つセシリアであった……。

一方その頃、一夏と篠も日本に繰り出していた。……鈴とラウラの尾行つきだが。

「で、篠、~~めずらじこ~~に行く?」

「む、そうだな……では、アクセサリーショップなど~~せどり~~だ?」

「どうだって、お前の買い物なんだからわ、お前が決めていいんだぜ?まあ、いいけどわ」

「わ、それもそうだな……すまない」

「いや、いいって。別に気にしてねーし。じゃあアクセサリーショップは確か……」~~じつ~~ちだ、篠

やつぱり一夏は篠の手を取り、先導する。

「あああ、ああー」

「どうした、簞？顔が赤いぞ？」

「……いや、何でもない！」

「それならいいけど……」

一方、鈴とラウカは……

「何あいつ自然に手を繋いでんのよー。」

「…………やはり私はあそこへ加わってくるんだ」

「わー！待ちなさい！まだよー！まだ様子を見たほうがいいわー！」

「ふむ……そうだな、そうするか」

果たしてこの「ボボ」は平気なのだろうか？

「着いたな。じゃあシャルロット、一旦、ここで別れよう」

「あつ……」

ぱっと手を離すと、なぜだかシャルロットはみょうに心残りのあるような声を漏らした。？まだ手を繋いでいたかったのか？

「『めんね、でも流石に女性物のところに入るのさちよつと、ね……それに、僕も水着見たいし』

「ああ、それもそうだね。うん、わかった。30分後にここにで」

「了解。じゃあまたあとで」

女性用と男性用の水着コーナーの間でシャルロットと別れる。……やつぱり男性用水着のコーナーが異様に小さい。前世だと平等なのになあ。女尊男卑の影響はここまでなのかな……。

数分後、意外と早く水着は決まり、会計を済ませ、シャルロットと別れた場所に向かう。すると意外なことにそこにはすでにシャルロットが立っていた。

「あれ？ もう終わってたの？」

「あ、うう。ちょっとね、迷っちゃったからで、優人に選んで欲しいなあって思って」

「そりなんだ。いいよ、行こう」

そしてそのままシャルロットと共に女性用水着売り場に入していく。

(……やつぱり抵抗あるなあ)

田曜日なので女性の客は多く、一気に視線が僕に向けられる。

「ちょっとここで待つてね。すぐに持つてくるから」

「うん、わかった」

試着室の前で待機を頼まれた優人は少しでも気を紛らわすために音

楽プレイヤーで音楽を聴き始める。

「そこのあるな」

(あれ?なんか外から呼ばれた気がする。ま、気のせいっしょ)

「男のあなたに会つてゐるのよ。その水着片付けておいて」

(ああ、僕に言つてゐるのか。まあ、無視だけど)

優人は音楽プレイヤーの音量を上げて、更に無視する。

「——！」

外の女性が何やら騒いでいる。次の瞬間、警備員が後ろから優人の肩を叩いてきた。優人はイヤホンを取り、応答する。

「……なんですか？」

「いや、ね。その女性が君に暴力を振るわれたって聞いたからさ。慌てて来たんだよ」

ふう……と優人はため息を漏らして自分の財布からあるライセンスを取り出す。

「僕は暴力を振るつて無いです。むしろ、IJKの女性に命令されたん
で無視してただけですよ。それに、僕、こういったものなんですけど

?

警備員にライセンスを見せると、不思議な顔をした。

「なんですか？これ？」

「はああ……僕はIHSの開発者で、如何なる法律も受け付けないつていう証明証ですよ。なんなら、日本政府に問い合わせてもいいですよ？」

「ええ！？あなたが、かの有名な氷川優人さん！？」、これは失礼いたしました！」

「いやいや、分かればいいんですよ。…命令する相手を間違えましたね、お・ば・さ・ん」

「ぐつ……何よーブツブツ……」

何やら小言を言いながらその場を立ち去る女性。ああ、スッキリした！バカは最高だね！

「ゆ、優人！大丈夫！？」

中年女性と入れ替わりでシャルロットが来た。どうやら遠田で僕達のやり取りを見ていたようだ。手にはふたつの水着があつた。

「ああ、シャルロット。全然平気だよ。つーか、僕にどの国で法律も効かないしね」

「ええ！？そ、それっていいの！？」

「おかしな話だらうけど、ほとんどの国は許してくれてるよ。いくつかの国は渋々OK出したらしくけどさ」

「ゆ、優人に常識は通用しないんだね……ハハハ……」

お、なんかそれどつかの第一位さんみたいでいいねー使わないけど。

「あ、水着、見てくれるかな?」

「うん、いいよ

と、返事をすると僕をシャルロットが引っ張る。僕は持ち前の筋肉で引っ張るのを拒むとシャルロットがこっちをちゅうづきびり涙目で見てきた。

「どうしたの? シャルロット

「ほ、ほら、水着つて実際に着てみないとわかんないし、ね?」

「じゃあ、僕の手を離して試着室に入ったら?」

「だ、ダメ!」

「……シャルロット、流石に世間體といつものがあるから試着室に一緒に入らうとするのは……」

「うぐう……うん、じゃあ待つてね……」

ションボリしながら試着室に入つていくシャルロット。え? 可哀想だ? 馬鹿野郎! 試着室に一緒にいる一般人がどこにいる!!

「じゃ、じゃあ第一俺は先に出てるから!」

そんな声が聞こえてシャルロットの隣の更衣室から出てきたのは一夏だった。そして、中には簾が。

「え？」

「えつ？」

「ええつーー？」

後ろを振り向くと一組副担任の山田先生と担任の千冬さんがいた。ていうか、試着室に一緒にいる人、身近に居たわ。

「優人、これ、ど…う…かな?ってあれ?」

「うん、似合つてゐるよ」

試着室から出てきたシャルロットの格好はセパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げるという構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸のその谷間を強調するように出来ているのだった。

だが、シャルロットもこのなんとも言えぬ沈黙にキョトンとしていた。

「何をしている、バカ者が……」

一夏と簾の様子を見て、呆れたように千冬さんが呟く。

次の瞬間、軽いパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだましたのだつた。

「はあ、水着を買ひにですか。でも、試着室にふたりで入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「ていうか、普通、入らないでしょ？」

「「す、すみません……」」

ペコリと頭を下げる篠と一夏。最近、一夏つて怒られてばかりだな。すると、レジに行っていたシャルロットがこっちに戻ってくる。結局、水着は最初に着ていたイエローの水着にしたみたいだった。もう一方の水色の水着はあまりシャルロットのイメージに合わなかつたと僕が指摘したのでやめたらしい。

「あ、デュノアさんも氷川くんを試着室に入れようとしていましたよね。ダメですよ、そんな」としつけられました

「す、すみません!」

慌てて頭を下げるシャルロット。シャルロットも結構怒られているよな。

「ところで山田先生と千冬ねーー織斑先生はどういふのですか？」

話題を逸らさうと一夏が質問する。

「私たちも水着を買ひに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくとも大丈夫ですよ」

とは言つても、山田先生はカジュアルな服を着ているが、千冬さんはビックとサマースーツ着てるからなあ……呼びにくいよな。

「ところで、そろそろ出でてきたほうがいいんじゃないかな？ 鈴、セシリア？」

千冬さんとシャルロット以外は僕の呼びかけたほうの柱に注目すると、柱の陰から鈴とセシリアが出てきた。

「やるやうの田代によつかと黙りてたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

「鈴は差し詰め一夏のび「わ！私も水着買いに来たらたまたまあんた達を見かけたから隠れただけよ！！」……ふーん？セシリアは？」

「わ、わたくしも鈴さんと同じですわ！」

「そ、う、な、ん、だ、」

「せつせと匂い物を済ませて退散するとこよ」

ふう、とため息混じりにそう言ったのは千鶴さんだった。

「あ、あー。私ちょっとと貰い忘れがあつたので行つてきます。えーと、場所がわからぬので凰さんとオルゴットさん、ついてきてください。それに氷川くんとテュノアさんと篠ノ乃さんも」

「あ、僕とシャルロットはこれから用事があるのでいいで」

「わ、わたくしも」一緒にー?」

「「めん、今日はひつと席を外してもらえないかな?後で埋め合
わせするからね」

僕は女性ふたりをエスコート出来る腕前はないからね。セシリアには悪いけど今回は席を外してもらおう。

「そうですね……」

「ごめんな、セシリア。あ、今日の夜僕の部屋に来てよ。手料理ご
馳走するからね」

「わ、わかりましたわ!」

ションボリしていたのにすぐに立ち直るセシリア。わー、単純。じ
やない!機嫌を直してくれてよかつた。

「じゃ、シャルロット、行こ!」

「へ、うん!」

山田先生達とは逆方向に進み始める。

山田先生達と別れてシャルロットと共に来たのは高級料亭だった。

「こりひしゃこませ。何名様でしようか?」

「一ノ宮で予約した氷川です」

「少々お待ちを……。確認、取れました。こちらへ」

「どうも」

そう言つて連れられたのはとある個室。ここはいわゆる「エアリー」といひやつだ。

「ゆ、優人? なんでこんな?」

「ん? ああ、前に家族でここに来てさ美味しかったからシャルロットにも食べて欲しいな」と思つて予約したんだ

「でも、こんな個室まで用意して高かつたんじゃ……?」

「あ、気にしないで。HSを開発したおかげで使い切れないのでお金持つてるから」

「へ、へえ……」

そんなぐだらない話をしていると前菜が来た。シャルロットはそれを口に運ぶ。僕も同じように口に運ぶ。……うん、美味しい。

「ふあああ……僕こんな美味しい料理、食べたことないよ

「なんでも、ここの中のシーフは何力国も回つて料理の修行をしたらしく。そしてその修行の集大成がこれらの料理らしい」

「じゃ、じゃあー」これから出でてくる料理も…?」

「うん、期待してていいよ」

シャルロットの顔はとても幸せそうだ。うん、連れて来てよかつた。
そして一時間後、僕達は昼食を終え、店から出て行く。

「どうだった?」

「うんー…とっても美味しかったよー!今度なにかお礼しなきゃね!」

「はは、そんなのいらないよ。僕がやりたくてやつてるんだから」「

「うん。そうこう訳にはいかないよ。ゼーつたい優人が喜ぶものを今度あげるね!」

「それは楽しみだ」

歩きながらそんな話をしていると噴水のある公園に着いた。

「ちょっとここで休憩しようか」

「うん」

ふたりで近くのベンチに座る。

「……優人と出会ったの、こんな公園だったね

「そうだね。僕が噴水近くで泣いてるシャルロットを見つけて、一緒にシャルロットのお母さんを探したっけ……」

「でも、途中で僕のお腹が鳴っちゃつたてさ、優人がクレープ奢つてくれたんだよね」

「ああ、そしたらシャルロットのお母さんが来たんだ」

「あの時は嬉しかったなあ……お母さん……」

「……シャルロット」

「……うーん、しんみりするのはよくないね！明るく行こう！あ、そうだ！ねえ、優人。僕さ、もつクラスのみんなにシャルロットって名前を言つちゃつたからや、なにか新しい呼び方考えてよー。」

「新しい呼び方？急に言われてもなあ……」

シャルロット、シャルロット……シャルル・ジ・ブリタニア……シャルティエ……シャルティエ？シャル！

「シャルなんてどう？」

「シャル……うん、いいね！じゃあ、優人、これからふたりだけの時はシャルって呼んで！」

「ふたりだけの時？…まあいいか、わかったよ、シャル」

「うん！」

返事をした時のシャルの笑顔はとても魅力的で、思わず見惚れてしまつた。

「……ハツーし、シャル、そろそろ帰ろうつか」

「そうだね、するにとも無いし、帰らつか」

それから僕達はさつきの会話の通り、くだらない話をしながら帰つた。そして、夕食時にはセシリ亞に手料理をご馳走しました。
あと、料理の仕方も教えました。

第一十四話 一般的ヒストリー（後書き）

キンクriみてすみません…

第一一十五話 それぞれの訓練（前書き）

「めんなさい、更新かなり遅れました。とある事情であまり執筆が出来ませんでした。

では、改めて。どうも。スパロボOGをやり直したらPS2が壊れていて出来なかつた作者です。

今回はかなり終盤がグダグダになつてあります。マジで「めんなさい。国語力ねーです。

では、一十五話をじつう。

第一十五話 それぞれの訓練

ブツー！と試合開始のブザーがアリーナに響く。そして、その合図と同時に僕は両手に銃を構え、一夏に向けて発射する。一夏はそれをバレルロールを使って躰し、僕に剣を振るつ。

「はあつ！」

「ツー！」

両手の銃を交差させ、剣を受け止める。

「下がガラ空きだよ！」

「なあつ！？」

僕は剣を受け止めながら懷に飛び込み、足払いに近い蹴りを入れ、空中でのバランスを崩し、そのまま相手の体を蹴り上げる。これは潜身脚と呼ばれる技で本来地上で使われる技だが、自分なりにアレンジして空中でも使えるようにした。そして無防備になつた一夏に何発も両手銃の弾を撃ち込む。元々、この銃のツインハンドガンモードの威力は弱いため、何発も撃ち込まなければ大したダメージにはならない。力チカチ、と弾が切れた音がする。一夏はその隙を逃さず攻撃してくるが、僕は瞬時加速を使い、一時離脱。僕は両手銃の空になつたマガジンを取り出し、量子化させておいた新たなマガジンを呼び出し、装填する。これで、銃のエナジーは回復した。片方の銃のグリップを外し、両手銃を合体させる。そして、もう片方のグリップを合体させた銃と銃の間辺りに移動させると、バレルが伸びる。ショットガンモードの完成だ。そして、向かってくる一夏

に向け、引き金を引く。収束された荷電粒子は一気に拡散し、一夏の逃げ場を囮む。だが、一夏は瞬時加速を使ってそれを避ける。僕はそれを銃口で追つて止まりそつた位置を予測し、引き金を引く。すると、停止した一夏に幾つか当たるが、距離が遠かつたため、先程のツインハンドガンの時よりダメージを「えられなかつた。そろそろ遠距離で戦うのも飽きてきたので、ケルベロスショット改を量子化させて腰の剣を引き抜き、左肘のファングスラッシュヤーを手に取り、投げる。

「敵を切り裂け！ ファングスラッシュヤー！ ！」

「いっ！？」

一夏は僕の投げたファングスラッシュヤーを雪片式型で捌く。一夏が僕の操るファングスラッシュヤーを相手にしていくうちに剣を構えながら一夏に突っ込む。

「はあああああ！」

「つおおおおお……」

ファングスラッシュヤーを気合いの一振りで思いつきり弾いた後、僕の剣を受け止める。鍔迫り合いになるが、僕のHSの馬力のほうが弱いため、段々一夏に押される。

「へへ、今回は……俺の勝ちかな！」

「……そうかもしれない。でも、惜しかつたね」

「へつ？」

鍔迫り合いに夢中になつていた一夏は背後から近づくファンクスラッシュナーに気付かず、一夏を容赦無く切り裂く。そして、ブザーがなる。

『試合終了。勝者、氷川優人』

「ああああ！また負けたあああ！」

「一夏は詰めが甘いんだよ。それに、注意力も無いしね。この前僕が教えたことも忘れてるし。総合的に言つと、一夏は技術の吸収は早いけど、その技術を活かせてないんだよ」

「そつは言つてもよお、お前は俺が教わった技術を使つと、更に対抗策を出されるから混乱しちまうんだよ」

「相手が戦い方を変えるなりじつもそれに見合つた戦い方をするのが定石でしょ？」

「ぐぬぬ……まあ、でも訓練付き合つてくれてサンキュー」

「でも、どうしたの？いきなり模擬戦がしたいなんて？」

「いや、これから校外実習があるだろ？それに備えて俺も少し位腕上げとかねえとみんなにもつと差をつけられちまう。ほら、今回の校外実習で他の専用機持ちはパッケージが来るけど、俺の白式には使えねえからや」

「確かに。白式は操縦者の腕次第の機体だからね。一夏は一夏なりに考えてるんだな」

「くくっ、まあな。あ、そろそろアリーナの閉鎖時間だ！戻るつぜー！」

「うそ」

僕達はピットから更衣室に行つて、着替え、食堂を田指す。その途中簪が前から歩いてきた。

「お。やあ、簪。『打鉄式』は完成した？」

「う……うん、完成、したから、明日、い、一緒にテスト飛行してほしー……」

「明後日は校外実習だけど……大丈夫？」

「も、もう準備は済んでる！だから……大丈夫……」

「ああ。あ、こいつ、知ってると思つけど、織斑一夏。で、一夏、この子は更識簪」

「ああ、よひしきな、更識」

そう言つて右手を差し出す一夏。

「……私には……あなたを、殴る権利がある」

「…………白ばらのことか。

「え？」

「でも……あの子が完成、したからいい。後、私のことは……簪つて呼んで。更識は……嫌……」

「……つーああ、わかった。改めてようじへ、簪」

再度差し出した右手を簪が手に取り、握手をする。よかつた。ふたりとも仲良くなれて。

「じゃあ、簪、これから僕たち夕食食べに行くけど……？」

「あ、私は、いい。これから、明日の調整をしておきたい……から」

…

「わかった。じゃ、行こう一夏」

「ああ。またな簪」

「バイバイ」

軽く右手を振る簪に手を振り返し、再度食堂への道を田指す。結局、それ以降何もなく一日を終えた。

翌日、授業を終え、簪の飛行テストを見るために第六アリーナに行く。第六アリーナのピットにはEISスースを着た簪がいた。

「『』めん、待たせたかな？」

「ううん……私も、今来た

「やつか、じゃ、始めよつか」

そう言つて僕は腰の専用ホルスターに入つたPETを取り出し、サバニヤのチップを入れ、起動する。PETが光を放ち、その光が僕の体を包むと、緑と白を基調としたボディと腰に12個、両肩に2個ずつ装備されたホルスター・ビットが特徴的なサバニヤが身に纏われた。

「おいで……打鉄式式……」

簪は右手を軽く突き出し、そう言つと、右手の中指にはめられたクリスタルの指輪が光を放ち、その光が簪の体を包む。そして、装甲を纏うと同時に浮遊する。

「やつぱり、打鉄と全然違うなあ……」

打鉄式式は打鉄の後継機であり、発展型。と言われているものの、外見としてはだいぶ違う。

スカートアーマーは機動性を重視した独立ウイングスカートに換装されている。

腕部装甲もヨリスマートなラインへと変化していく、僕のブレイブハーツのように格闘戦における運動性を活かす構造になっていた。肩部ユニットはシールドではなく大型ウイングスラスターがひとつに、小型の補佐ジェットブースターが前後で二基搭載されている。その特徴的なシルエットは一夏の白式に似ていた。

見る限り、ほとんど打鉄と共通点がない式式だったが、頭に装着されたハイパーセンサーは同じデザインのものであった。

「それじゃ……行こう?」

「あ、うん」

僕は偏向重力カタパルトに両足をセットし、射出タイミングの譲渡を確認する。

「ガンダムサバーニャ、ロックオン・ストラトス。狙い撃つぜ!」

P.F.に取り付けられた変声機によつて三木眞一郎ボイスに変わった僕の声と同時にカタパルトが射出され、第六アリーナの空へと飛び出る。……なりきりつて楽しい!!

そして、プライベート・チャンネルで簪に話しかける。

「簪、先にタワーの頂上に行つてるぞ」

『う、うん』

簪の肯定の言葉を聞くと同時に、スラスターを最大出力で噴かせ、タワーの頂上を目指す。タワーの中間辺りで下を見ると簪が出てきた。簪が出てくる時に中間辺りまでくるとは……流石、サバーニャ。頂上に着くと、簪はタワーの四分の一ぐらいのところを飛んでいた。今のところ何も問題はない。

そして、簪は頂上に着いた。

「は……早いね……」

「ん? まあな。一応、ガンダムだからよ」

「声と口調まで……忠実なんだ……」

「俺の好みだよ。見た感じ、打鉄式式のスピードはセシリ亞のブルー・ティアーズと同じ位だな」

「一応……データ上は……」

「わつか、じゃ、次はマルチロックと武装のテストだ。降りるぞ」

「あ、うん……」

簪は返事をして、急降下を始める。段々速度を上げていくが、スピードを抑えながら後ろを飛ぶサバーニヤでも段々距離を縮める。最終的に僕は追いつき、隣を飛ぶ形になった。そして、地上に着いて、武装とマルチロックのテストを始める

その後、テストは上手く行き、何の問題も無く、稼働データが取れた。

そして、すべてのテストを終え、僕達は第六アリーナのピットで休んでいた。

「はあ……終わつたあ～」

「あ、ありがとう……付き合つてくれて……」

「いやいや、勝手に僕が手伝つただけだし。気にしないで」

「……何で私にそんなに構つてくれるの?」

「ん? 困つてる人を助けるのは当然でしょ? それと、簪に誰かを頼るのは間違いなんかじゃないって気付いて欲しかったんだ」

「……正義のヒーローみたい」

「そんな大層なもんじゃなによ」

「それでも、私にとって……ヒーローだよ」

「……やっぱ。じゃ、休憩も済んだし、帰らつか?」

「うん……」

「あ、夕食どうする?..」

「い、一緒に…食べたい…」

「ん。わかった。じゃ、着替えたら食堂前ね」

「わかった……」

「あ、お帰り」

「……すみません。部屋間違えました」

簪と夕食を食べた後、部屋に戻るとベッドの上に誰かが居た。

バタンとドアを閉め、もう一度ドアの標識を確認する。そこにには氷川の文字が。

「よし、もう一度入るぞ？誰も居なかつた……というか、この部屋に入れるの教師位なんだからあり得ない……樋無さんが居るなんてあり得ない……」

スカートの中丸見えの状態で女性雑誌を読む樋無さんが居た。

窓の方に顔を向けながら叫ぶ。

「あれ？ 優人くん、どこ見て言つてるの？」

「樋無さん！あなたは生徒会長何ですから！風紀を乱すやつな」とはやめてください！」

僕は目を瞑りながら櫛無さんの方を見て注意する。

「風紀を乱す……わかつたわ。もう目を開けて大丈夫よ」

目を開けると、スカートを自ら捲り、スカートの中を見せている櫛無さんがいた。僕は思わず後ろを向いた。

「あっはっはっはっ！ 優人くんて意外におませさんなのねー！」

「じ、冗談はやめてください！で！！なんで僕の部屋に居るんですか！？」

「あ、簪ちゃんのことでお礼をと HuffPost」

「お礼？僕、何もしてませんよ？」

僕は櫛無さんの方を向くと、ベッドから降りて、真面目な顔付きの櫛無さんが立っていた。

「一緒に『打鉄式式』を、作ってくれたでしょ？だから、ありがとうございます」

「……本当は違うでしょ？」

「優人くんには嘘はダメね……。『打鉄式式』のこともあるんだけど、本物は簪ちゃんの心を開いてくれたこと」

「簪の……心？」

「わい。あの子、最近ね、色々な子と話すようになったの」

「ストップ。何であなたが、簪のプライベート知ってるんですか？」

「え？そりゃ、生徒会長権限で防犯カメラを見てるからよ？」

「職権乱用過ぎるよ……。」

「本当何やつてんだ！……」の念長……！

「姉が妹を心配するのは当然でしょ？って、話の続きだけじ」

「スルーされた！？」

「もういいじゃない。それで簪ちゃんは今まで本音やあなたがいる

時以外ひとりだったの。最近ではクラスの友達とこんなひみつなつたし、笑うようもなつたの」

「それはいいとですねー」

「それもあなたが一緒に居てくれたからだと思います。だから、ありますか。それに、

「簪のことを任せるって言つたのはあなたじゃないですか。それが、僕がえたんじゃなくて、簪がひとつで変わつたんですよ。ベタな返し方ですけど」

「……そうね。でも、あなたが簪ちゃんと聞くようになつてから簪ちゃんは笑うようになったわ。これはあなたがえたとしか言つてない事實なのよ」

「……そなんですか。なら、素直にお礼を受け取つておきまますよ」

「やう? ジヤ、それだけだからバアーバー」

「もつ僕の部屋に勝手に入つてこなごドア下さよ

玄関を開けて、部屋を出るよつ確足する。

「許可があればいいのね?」

「え? あ、まあ

「わかったわ」

そんな光景を見ている人物がひとり居た。その人物は曲がり角に隠れていた。

(な……なんで……お姉ちゃんと優人が……あんなに仲が良さそつなの……)

簪は手に持った出来たてのカップケーキを握る力が強くなっていた。

「それじゃ、これからも簪ちゃんのことよろしくね」

「はいはい」

「何か簪ちゃんのことで手伝える」とがあつたひと言つてしまふ。それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

(どうして……お姉ちゃんは私から何でも奪つていいくの……)

「じゃあ、その嫉妬。利用させてもらおうかな?」

「え? あ? ……」

簪は意識を失う。簪は意識を失う直前、着物姿の女性を見た。

「うふふ……あの子と戦つてもうつかう……」

その着物を着た女性は静かに笑っていた。

そして、校外実習当日が訪れる。

第一十五話 それぞれの訓練（後書き）

はい！伏線張りましたー。で、ケルベロスショット改になつてゐる説明は次話辺りで入れたいと思います。

後、コミケに行つてくるんで、次の更新は来年になります。そして、ご意見、ご感想、お待ちしています。

それではみなさん、よいお年をー

第一十六話 いえーい、海だー（棒）（前書き）

お久しぶりです。

今日、やつとテストが終わってやつと執筆活動に移りました。

それでは続きをどうぞ。

第一十六話 いえーい、海だー（棒）

「海つ！見えたあつ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「…………」

バスで隣の席になつたのは一夏だ。ヒロインズと一時抗争になつたが、やつぱり男子同士のほうがいいだろうということで渋々OKしてもらつた。

「……優人、本なんか読んでないでお前も海を見ろよ」

「うぬわー。今いといこひなんだ」

因みに今僕が読んでいるのは『データ・ア・ライブ1 十香テッドエンド』だ。前世で友人に進められ読んでいた作品でこれがかなり面白い。あいつの選ぶラノベは外れが無かつたなあ……。

「それ、面白いのか？」

「ん？ああ、人を選ぶけどな」

「へえ、じゃあ、今度貸してくれよ」

「いいぜ」

「ゆ、優人さん。何を読んでいらっしゃいますの？」

通路を挟んで座るセシリアが質問していく。

「これは、ライトノベルだよ。中高生をターゲットに作られた小説。だから、漫画みたいな感覚で読めるようになってるんだ」

「そうなんですか？ わたくしに合う本なのでしょうか？」

「うーん……これはアニメとか漫画が好きな人じゃないとちょっとぴりきついかな？ セシリアはなんか、小難しい小説読んでるイメージだし」

「そ、そんなことありませんわ！ ゴホン……では、今度わたくしにも貸していただけませんか？」

「ああ、いいよ。百聞は一見にしかず、だしね」

「そうですね（やつた！）これで優人さんと話すきっかけになるー！」

……なんか、セシリアから欲望に塗れたオーラが見える。

「えへへ……」

後ろからは何とも間抜けな声が聞こえた。僕の後ろに座るのはシャルとラウラだ。先程の間抜けな声が誰のものか確認するために後ろ

を向く。僕が振り向くと一夏もつられて後ろを向いた。

「…………」

シャルは僕がショッピングに行つた日にプレゼントしたシルバーのブレスレットを見ながらものすごい笑顔なつてるので、間抜けな声の主はシャルだろ？ ラウラは、何故か拳動不審だ。

「大丈夫か？ 昨日合流したときからずっとそんな感じだけど、どうした？」

「…………」

「おー、ラウラ。おーい

あまりにもラウラが反応しないものだから一夏は席から乗り出し、ラウラの顔を覗き込む。

「！？ なつ……なんだ！？ ち、近い！ 馬鹿者！」

「ウボア」

一夏はラウラに鼻を思いつきり手のひらで押し返され、何処ぞの皇帝のような声を出す。一夏に顔を近づけられたのが恥ずかしかったのか、ラウラの頬はほんのり赤くなっていた。

「向こうに着いたら泳げ。篠、泳ぐの得意だつたよな

一夏はラウラに押し返され、席に着くと同時に通路を挟んで座るセシリヤの隣に座る篠に話しかける。

「や、やつ、だな。ああ、昔はよく遠泳をしたものだな」

幕は随分落ち着かないな。何かあったのか？

「やひそひ目的地に着く。全員席に座れ」

千冬さんの言葉にみんな大人しく従う。それから数分、旅館前に着いた。四台のバスからEIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やすないように注意しろ」

『よろしくお願いします』

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。

「はい、いらっしゃい。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

この旅館には毎年お世話になつてるのか。……ん？

「ふふ……」

あれ？今、旅館から誰かこっちを見てた？

「あい、じりりが噂の……？」

ふと、旅館を見ていた僕と目が合つた女将が千冬さんに尋ねる。

「ええ、まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子達じゃありませんか。しつかりしてそうな感じを受けますよ」

「片方はそうですが、もつ片方は感じだけですよ。挨拶をしり、馬鹿者」

一夏だけ無理矢理頭を下げるせられた。僕は礼儀正しくお辞儀する。

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「氷川優人です。よろしくお願ひします」

「うふふ、じ丁寧にぞつも。清洲景子です。つて、あなた……氷川つて言つの？」

「え？ はい、そりですが……？」

「はい。わうです」

「やつぱり一顔が少し似てると思つたのよ~」

……似てるか？僕と父さん。

「勇利さんは私が働いたばかりの頃の」最良さんだったのよ~結婚してから来なくなつたけど、その息子さんに会えるなんてねえ~懐

かしいわ～ポツ……」

何故類を赤らめる。父さんも罪な男つてこと。

「父がお世話になつたようですね」

「逆よー私の方が色々と教えてもらひちやつてね、ペラペラ……」

女将のマシンガントークがヒートアップし始める。どうしてこいつな
つた。

「ゴホン！ 清洲さん。 そろそろ部屋に案内してもうえませんか？」

千冬さんが呆れて話を元に戻す。

「ありー。じめんなさい。それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。
海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになつていりますから、
そちらを御利用なさつてくださいな。場所がわからなければいつでも
従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう。
とりあえず荷物を置いて、海に向かうつもりだらう。

初日は終日自由時間といつ大盤振る舞いをされているため、時間を
無駄にしたくないのだろう。食事に関しては旅館の食堂にて各自と
るよつこと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむー、ゆつわー」

この呼び方とこの声は本音さんか。振り向くと、亀の如く（そこまで遅くない）異様に遅い移動速度でこつちに向かってきていた。眠

たそりにしている顔は、たぶん素なんだと思つ。もしかしたら「一
ヌと呼ばれた漫画に出てきた人みたいに覚醒するとあの田をシャキ
ツとさせるのだろうか？

「ふたりの部屋つてどー? 一覧に書いてなかつたー。遊びに行く
から教えて~」

その言葉で周りの女子が聞き耳を立てるのが分かつた。しかし、み
んな命知らずだな。

「いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじやねえの?」

「そんなわけないでしょ、馬鹿。一夏自分の部屋聞いてないの?」

「おう。優人は聞いてるのか?」

「うん。僕らは教員室だつてさ。だから、織斑先生と山田先生と同じ部屋つてわけ」

聞き耳を立てていた女子全員が固まるのが一瞬でわかつた。残念だ
ねー、一夏との夜遊びが出来なくて。

「わうこうじだ。織斑、氷川、ついて。お前らの部屋に案内
する

「へーへー」「はー」

「氷川。ちゃんと返事をしろ」

鬼もびっくりの田で僕を睨む千冬さん。僕は黙つて千冬さんの言つ

「」と聞く。

「はい」

それから本音さんと別れ、千冬さんの案内で教員室に着く。流石に四人も寝るだけあってかなり広い部屋だ。僕は荷物を置いて、窓の外を見る。

窓の外にはきれいな青い海が見えた。そして、下を見ると、森の中で僕を呼ぶかのように手招きをする女の子が居た。

「一夏、先に着替えて海に行つて。僕、用事が出来た」

「え、あ、ちょ、おい！ 優人！」

僕は靴を履いて旅館を出て、森の中へ入つていく。先程、女の子の居た位置まで行くと、誰も居なかつた。

「はあ……はあ……あの子は……？」

「うううだよ」

声が聞こえた方を見ると、木の影から着物の女の子が出てきた。

「君は……誰だ？ 何故僕を呼ぶ？」

「誰つて……もう私を忘れたの？」

「え？ ……もしかして、神様！？」

「そ、だいせーかーい」

「でも、唯ちゃんの顔や格好じや無くないですか？」

「当たり前だよ。」の前のは私の仮の姿。今のが本当の姿ってわけ

「ふうん……で？」の前、神様はわ、もつ冴えないって言つていませんでした？」「

「神様の力は侮つてはいけないのです！」

「そうですか……。それで？僕に何のようですか？」

「もう、そんなに焦らなくてもいいじゃない。私はね、更識簪の居場所を知つているの」「

「……ああ、神様だからなんでもありつてわけか

実は簪は『打鉄式』の稼働テストの日から行方不明なのだ。監視カメラにも映つていなかつたから、楯無さんがかなり心配していた。

「そういうこと。それで、更識簪を攫つたのは私です！」

「…………はっ？」

「だから、簪さんを攫つたのは私です！」

「突然何を言い出すかと思えば……。

「つてええええ！？ なんで…？ どうして…？」

「だつてえ…君あまりにも面白くない行動ばかりなんだもん」

「あんたねえ……」

「ま、でもすぐ会えるから。楽しみにしてて」

そう言つと神様は霧の様に消えていった。

「あ、そうそう。ちよちよいとクアンタとサバーニャ借りてくれよ」

脳量子波で声をかけてくる神様。そして、P.Fを入れてあるP.E.T
ホルダーが光り、クアンタとサバーニャのチップが消える。

「つて、なんでだよーー。」

「明日の夜には返すから~」

「……くつ！ もう気配がしない！ ……諦めて海に行くか」

ちくしゅう。樋無さんになんて言えはいいんだよ。

」
.....
」

現在、僕は水着、その他諸々の荷物を取つてきて、本館と別館を繋ぐ通路にある庭に生えていゐつたさきの耳のよつなものを睨んでいる。

ウサリの近くには『引つ張つて!』などといつ看板があるが、引つ張らないほうがよさそうな気がしたのでそのままスルーしようとすると。が、離れようとすると足が何かに掴まれ、動けなくなる。

「……そんなに出たいなら自分で出ればいいじゃないですか」

僕はそう言つが、相手は出てこようとしない。僕は諦めてウサミミを引っ張ると、土からウサミミだけ取れる。

何も起きないと想ひきや 空から何かが落ちてくる音がする
上を見ると、大きな人参が降つてきた。そして、それは庭の地面に
突き刺さる。そして、桃太郎の桃の如く、綺麗に真つ二つに割れる
人参。

真つ二つに割れた人参から出でたのは束さんだつた。束さんは出でぐるや否や、めちゃくちゃ涙田で僕に抱きついてくる。

「え、どうしたんですか？」

「あのね！みんな私をスルーして行くんだよ！？篠ちゃんもいっく
んもちーちゃんも！」

「ああ、それで僕がやつと反応してくれたから感動していると」

「そうだよーーー！やつぱり、私の居場所はゆーくんの胸の中だけだよーーー！」

「ハハハ……。それで、ここにはどんな用で？」

「あ、篠ちゃんに誕生日プレゼントを渡しききたんだよ！でも、明日だから今日ははちよっと仕……ゲフンゲフン……何でもないよ。」
（あ、そういうや、明日は篠の誕生日か（今、何か誤魔化そうとしたな）」

「とううわけで、ゆーくん！また明日……」

「はーはー

苦笑しながら返事をすると、田川にも止まらぬ速さで廊下を走り去る束さん。

僕はその影が見えなくなると、急いで別館へ向かった。
別館で着替え、海に向かうとみんながビーチバレーをやっていた。
山田先生や千冬さんも参加していてとても珍しい光景だった。
僕は砂浜には行かず、階段のあたりでその光景を眺める。

（みんな、楽しそうだな……。篠……）

今見ている光景に混ざっていたかもしれない女の子のことを考える。

（すぐに会える……。どうこうことだ？……あ、原作知識が抜けたこと、神様に聞くの忘れた）

僕が階段あたりでビーチバレーを眺めながら考え方をしていくと、本音さんが僕に気づく。

「あ～ゆつき～だ～。おーい

「え？ 氷川くん？……本當だ！おーい……」ひちで一緒にやるつよ～

「！」

本音さんが僕に気づいたことを言つと、鷹月さんが僕に呼びかける。他のみんなも僕を呼びはじめた。

「今行くよー！」

とりあえず、今は考へない方がよさそうだな。階段を降りてみんなのところへ向かおうとすると、パラソルで作った影の下にビニールシートを敷いたセシリ亞に呼び止められた。

「優人さんーお待ちになつて！」

「へ？ ビニールシートを塗るとかいうやつか。

「どうかした？ ジヤあつませんわ！ 昨日のお約束をお忘れになつて？」

？

「ああ、ごめん。もしかして、今の今まで待つてたの？」

「そうですね！ またないチャンスを……ゲフン！ なんでもありますわ！ さあ、優人さん、サンオイルを塗つて下さい……」

そう言つてビニールシートの上に寝転ぶセシリ亞。そして、水着の紐を解く。

正に僕は今！ 思春期の男の子なら絶対望むであろうシチュエーションに遭遇している！ ……だが、不思議と性欲が湧かない……。やっぱり神様の言う通り、枯れてるのか……？いや、でもシャルと風呂

入った時は欲情しかけたんだ……多分枯れてないよ……。

僕はセシリアからサンオイルを受け取る。サンオイルを手に取つて揉むようにして温める。

そしてセシリアの体に慣れた手つきで塗つていく。

(……あれ? なんで僕こんなに手際いいんだ?)

自分の手つきに疑問を抱きつつ塗つていく。

「んつ……。慣れていますわね……何処かで経験が?」

あ、思い出した。

「うん。母さんと海に行くと毎回塗つてあげたからや。その時に手取り足取り教えてもらつたんだよ」

「もうなんですね……気持ちいいですわ……」

僕の塗り方は軽いマッサージを兼ねているため気持ちいいのだろう。そして、背中、腕を塗り終える。

「はー、終了。後は自分で」

「え? 足などは……?」

「流石にまづいでしょ? 周りの人達と絵的に」

僕がセシリアにサンオイルを塗つている間、ギャラリーが集まって

いたのだ。つまり……

「氷川くん！私にも塗つて……」

「私サンオイル持つてくるー！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「私サンオイル落としてくるー！」

「いや、落とすなよー!?」

思わずツッコミを入れてしまつ。

「おい、お前ら、面倒な事をするな

ギヤラリーの中から織斑先生が出てきて、暴走しかけている生徒達を止める。

「お、織斑先生……ありがとうございます……」

「？ 何故疑問系なんだ？」

(ち、千冬さんの水着……黒くて、大きな胸を強調しているつ！なんて大胆な水着なんだ！しかもそれだけでも色っぽいのに、いつも違つて髪を下ろしてより色っぽさを増している！とても大人っぽい！僕にとつてディストライク！－)

「……優人、鼻の下伸びてる」

「……生きててよかつた。つてえーシャル！？……う、うおおおおおー！」

僕は恥ずかしさのあまり、海に向かつて走り出す。

今のは正に思春期の男の子だ！

俺は枯れてねえ！！ひやつほい！！

優人がいきなり海に向かつて走り出すと千冬姉は呆れたようにため息を吐く。

「……ふう。あいつは放つておいて、お前たち。サンオイルを塗つたばかりのオルコットには悪いが、そろそろ食堂に行つて昼食でもとつてこい」

「先生は？」

「私は残り僅かな自由時間を満喫させてもらひとじよつ

やはり教師にはあまり時間がないのだろう。なら、俺たちは邪魔にならなによつせつと退散するか。

「じゃあ、俺たちは昼食に行つてきます」

「集合時間に遅れるなよ

「はい。あ、優人は？」

「あのバカは戻つてきたら私から伝えておくからさつと行け」

「わかりました」

現在、12時を過ぎた頃なので、生徒全員がぞろぞろと移動していた。

「織斑先生の水着見た？すつごいきれー。かつこいい～！」

「あー、私もあんな風になりたいなあ」

「いや、あなたは無理でしょ」

「や、やつてみないとわからないわよ！」

みんなはそんな感じで盛り上がっている。俺は身内が褒められるのが少しくすぐったくて、喜んでいいのかよくわからなかつた。

(それにしても、似合つてたなあ)

正直、かつこいい。本物のモデルみたいーーいや、モデル以上だった。

「……一夏のシスコン」

「ん？なんか言つたか？鈴」

「別に～？なんにも言つてませーん」

「はあ……」

俺の隣を歩くシャルロットがため息をこぼす。

「どうかしたのか？シャルロット」

「あ、一夏……。優人つて織斑先生みたいなのがタイプなのかな……」

？」

「どうしてそう思つんだ？」

「だつて、織斑先生の水着見た反応と僕の水着見た時と反応がちがうんだもん……」

「あー……あいつ、昔からそういうだから」

「えー？ 優人は昔から織斑先生が好きなのー？」

「い、いや、そうじゃなくて、あいつ。年上好きなんだよ。昔自分でそう言つてたから」

「そつ……なんだ……ライバル多いなあ……つづんーでも僕は諦めないよー！」

何を諦めないと云うのか？

「まあ、何かはわからんが、シャルロット。俺はお前を応援してるぞー！」

「うんー！ ありがとうー夏ー！」

その満面の笑みに俺は少し照れてしまつ。と、同時にふたつの視線を後ろから感じる。

振り向くと鈴とラウラが睨んでいた。

「……一夏？」

鈴から黒いオーラが見える……！

「私というものがありながら……お前は私の嫁なのだ！私だけを見ている！」

「「だから嫁じゃない！」」

食堂入口付近で俺と鈴の声がこだました。

第一十六話 いえーい、海だー（棒）（後書き）

ロックマンXの方ももうすぐ出来上がります。もうじきお待ちを。

感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4314w/>

第二の人生はISの世界で！？

2012年1月14日15時45分発行